
された男が復讐のためにチート転生する **---実は復讐なんてどうでもよかったり（笑）---**

波摩鹽

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神に殺された男が復讐のためにチート転生する - - - 実は復讐なんてどうでもよかったり（笑） - - -

【Nコード】

N6520P

【作者名】

波摩璽

【あらすじ】

神様の争いに巻き込まれて死んでしまった俺。お詫びにチート転生させてくれるらしいが、その代わり神々の争いに参加しろってどういうこと？人の話を聞かずに話を進める神様。不老不死、肉体究極強化、事象の干渉とチート能力をくれるらしいが、俺は………女になった。

感想をください！あと、題名変更しました

0話　く不良ってなんで絡んでくるんだろう？酔っ払いのおっさんか！？）（前

初めまして、波摩鹽　はまじ　です

後先考えないで書いてるので、あとで大幅に変える可能性大です（汗
それでも読んでもらって楽しいと感じていただければ非常に嬉しいです。

コメントなど送ってもらえればもっと嬉しいです。

フラグが立ちまくってる予告編もありますので、良ければそちらも
読んでもらえれば更新のスピードが上がるかもです。

それではごゆっくりお楽しみください

0話　く不良ってなんで絡んでくるんだろう？酔っ払いのおっさんか！？く

気がつくと誰かの部屋にいた

そこは何もかもが白かった

机も、イスも、本棚も、壁も、床も、天井も

影と白の強弱で表現された世界

時々小さい地震のように揺れる

……何をしていたんだろう？

分からない

……なんでここにいるんだろう？

分からない

分からない事だらけだが、一つだけ思いだしたことがあった

……体、無くなっただんだよな

× × × × × × × × × × × × × × × ×
× × × × × × × × × × × × × × × ×

俺「……縁起の悪い夢だな」

唐突に終わった夢に一言呟いた。

ここ一週間、同じ夢しか見ていないことに少々疲れているのだ。

だるいので二度寝しようと布団に潜り込もうとする。
が、ジャストタイミングで携帯のアラームが鳴りだした。
速攻で止めようと左手を伸ばすが弾き飛ばしてしまった。

俺「あゝゝゝ、畜生！」

仕方なく布団から出て携帯のアラームを切る。ついでに時間確認。
10時1分。

そのままリビングに移動して朝食をとる。

両親は共働きで休日出勤。弟は全国模試で学校。
つまり夕方までこの家は俺の城になる。

俺「とは言っても、何もすることないな」

実は現在右手の指、中手骨を骨折している。分かなければググってくれ。

ってか今現在治療を全くしていない。病院に行こうと親にお金を求めたが

親「別に大丈夫なんじゃないん？」

と言われ却下。保険証もないし、学生の身分で病院に行けるほど財布の中身は潤沢ではない。

おかげでリビングだけ設置が許可されているテレビゲームをしたいが、痛みで集中できない。

俺「古本屋で立ち読みでもしてくるか」

幸い10時なら大概の店が開店しているだろう。さっさと着替えて家を出る。

不良「おうおうおう！何もんだテメエは!?!」

Q、どうして不良に絡まれてるのでしょうか？

A、肩がぶつかったから

俺（ふ、不幸だぁーーーーーー！）

いつもなら大回りしてでも避けるのだが、右手を庇うことに集中しすぎて当たってしまった。

ってか思いっきり勢いつけてぶつかってきた。結果、バランスがとれずに尻もちついた。

俺（そしてむかついた#）

そしてイラッとした。

俺「全世界60億匹存在する人間ですが何かあ？」

不良「んなこたあ聞いてねえんだよ！」

俺「んじや何か聞きてえんだよ？金か？暴力か？臓器か？リンチかあ？」

不良「勝手に話を進めてんじやねえ！」

とてつもない問題発言が有りますがご了承ください。

マジで頭に血が昇ってるんで。

……あら？不良が持つてる金属の塊って刃物？

俺「真昼間から物騒なもん持つてんなあ。果物ナイフか？」

不良「うぜえ〜！」

俺「っ！！」

ちよつと待て！逆手で持つて襲いかかるって本気か！？

裁判沙汰になったら確実に殺意ありって判定になるぞ。

とりあえず

逃げます。

全力で逃げました。

運動不足の体で5分も走り続けた自分をほめたいと思います。
今は自宅近くの公園のベンチに座って休んでいるところ。
昼前の時間帯にもかかわらず10人前後の子どもが遊んでいる。

俺（ああ、もう帰ろう。こんな日は家にこもるのが一番だ。）

今日は一日家でダラダラ過ごすことに決定。

最近同じ変な夢をみるし、朝から不良と命がけの追いかけてこを
たし。

これ以上面倒事が起きる前に我が砦に戻った方がいくらかましにな
るだろう。

俺（さて……ゲッ！）

公園の出入り口の方を見ると、さっきの不良がいた。

Q、出入り口は二つ。一つは危険人物がいて通れそうもありません。
もう一方は誰もいません。しかし危険人物は公園で遊んでいる子供
たちを襲うかもしれません。どうしますか？

A、危険人物に突貫！！

俺（逃げてもいいんだけどねえ、何か目覚めが悪そうだ）

襲われても別に関係ないのだが、俺が原因というのはいささか引け
目を感じる。

ベンチから立ち上がって不良の方に向かう。

不良はこつちをずっと見ている。……キモイ笑顔はいらない。

不良「探したぜえ。早速だが」

そう言つと不良は消えた。

次の言葉は真後ろから聞こえた。

不良「死んでもらうぜ。」

俺「ッ!!」

背中から強い衝撃を受けたと同時に左胸に赤く熱した鉄をめり込ませたような違和感。そして間を置かず背なかを引っ張られた。同時に何かが体から抜けていく感覚が何かまずいことをされたと警鐘を鳴らす。だが今の俺にそれを考える余裕はない。

不良の声が聞こえるが何を言っているのか分らない。足に力を込めても立ってられない。

霞んだ視界に見えるものは地面の色だけ。

これはもしや

俺（心臓刺されて死にそう?）

割とはつきりした意識が出血多量で消えるのに時間はかからなかった。

人間離れした動き、ある意味非常識な行動をした不良
その不良に殺されたどこにでもいそうな少年

非常識が現実を壊した時、この物語は始まる。

0話　く不良ってなんで絡んでくるんだろう？酔っ払いのおっさんか！？）（後

自己満足で書いてみました！

よく【テンプレ】って言葉があるんですが、ぶっちゃけ分かんないんです。

分かんない言葉を使うのは危険なんで、最初から書いてみたって訳です。

では、次回もあなたの目の留まりますように

1話 〱現状確認と頼りない神〱（前書き）

早くも原案から脱線している様子……
マジでこれ書き続けられるかな？

1話　く現状確認と頼りない神く

目を開くと、夢で見た部屋にいた。文字通り白の濃淡だけで表現された部屋。

時折震度1程度の地震のような揺れも感じる。

俺（うん、ここは病院だ！……………なんて思えるほど俺の頭は都合よく出来てない）

俺は死んだ。

しかも肩がぶつかった不良に逆ギレされ、ナイフで心臓を一突きされてご臨終。

なんと簡潔な死因！

俺（つてことはここは死後の世界？んじゃ早速探検に……………あれ？）

ドアが無い。それどころか窓もないし、照明もない。

俺（……………もしかして牢屋？え？何か悪いことした？心当たりあり過ぎるんだけど！）

？「とりあえず落ち着いてもらってもいいですか？」

いつの間にか椅子に座っている少女がいた。

俺「…………えつと、俺は何に突っ込めばいいのでしょうか？」

- 1、出口のない部屋にどうやって入ってきた？
- 2、なぜアニメ『ひぐらし・鳴く頃に』の羽生が話しかけてくる？

3、羽生は原作では神として扱われている。そしてここは死後の世界。神として見てもよいのだろうか？

？「とりあえずその疑問は全部投げ捨てて話を聞いてくださると助かります。」

俺「……了解。そしてすいませんが敬語は割愛します。」

神「……ま、いいでしょう。それでは、まずは自己紹介からです。はじめまして、神です。」

俺「はじめまして。■■■■です。……あれ？なんで名前を言えないの？」

神「まず神様がここにいる時点で驚いてほしいのですが。」

俺「残念ながら俺の中では『自称』がつく。死後の世界つてのは認めるけど、あなたが天使か悪魔か神か死神かの判断材料がないからさ。」

神「ずいぶんとひん曲がつた性格してますね……。それじゃ、私の名前はあなたが決めてください」

俺「んじゃ羽生^{はにやうせい}で。よろしく羽生。」

羽生「それでは説明に入ります。大変申し訳ないのですが、あなたは我々神々の争いに巻き込まれて死んだのです「……マジ？」マジです。かなり昔から神々は小規模ですが争いをしてまして、約500年前までは論争で済んでいたのです。ですが地球で環境汚染や資源をめぐつての争いが起き始めると半数の神が『救いようが無いの

で絶滅させます』などと言い出しました。」

俺「つまり俺はその半数の神々うちの誰かが化けるか乗り移ったかして不良になり、俺を殺したってわけか。」

羽生「大まかに言えばそうです。」

俺「神が歴史を歪めたらまずいんじゃない？」

羽生「私たちは新約聖書に書かれているような存在ではありません。」

俺「ふん。それじゃ話の続きをどうぞ」

羽生「……本当にマイペースな方ですね。」

呆れられてしまったようだ。

羽生「えっと、あなたは神に殺されたことによつて転生の輪から外れてしまいました。残念ですがしばらく転生が出来ません。かと言つて次に転生ができるまでここで待つてもらふこともできません。」

「個人的には全く困らないんだけど」最後まで聞きなさい！そこであなたには臨時の神になつてもらいます。「だが断る！」拒否権はありません、あなたには空想現実夢二次元全てにおいて最強の能力を渡します。ぶっちゃけその能力で現世にいる神を殺してほしいのです。「却下。」……なぜあなたは否定的なことしか言わないんですか？地面を殴れば星が割れ、絶対に死なず、容姿や年齢は好きに変えられるし、何より魔法や超能力が使い放題なんですよ？それにここで断つたとしてもあなたの選択肢は魂の消滅しかないんですよ！？」

俺「知らん」

羽生「……え？」

流石に神でも驚いたか。

……友人たちよ、俺は今、神に論戦を仕掛けようとしているぞ。
出来ればおらに力を分けてくれ！

俺「例え魂が消滅しても一向に構わん。俺は現世に悔いはあるが、
神の雑用をしてまで生き返ろうとは思えない。それに一方的に能力
を渡した場合、その力が望む方向に使われるとは限らない。むかつ
く奴がいれば殴り殺せる、邪魔な建物があれば全壊出来る、全世界
を敵に回しても勝てる。そんな力を持たせて訓練もせずに現世にぶ
ち込んでみる。俺だったら間違いなく世界征服するぞ。」

ま、実際にする気はないのだが万が一気が変わったらしかねない。
ってかチート能力を持たせて現世へってのがまずいんだが。

羽生「それは……困ります。」

俺「神としては思慮が浅いと思うが、どうだ？」

羽生「返す言葉もありません」

うん、まずい！

羽生が思いつきり落ち込んでます。涙目になってるし。
ってか思慮が浅いにも程があるぞ神々よ！
しかも論戦のろの字も出来ないってどうよ！？

俺「しかたないなあ」

ポムッ

羽生の頭をなでる

羽生「ふえ？」

人間が神を慰めるってどんなシチュだよ……
しばらくなでてあげることにする

落ち着いた羽生に何として欲しいのか明確に話してもらった。
まとめれば以下の通り

- 1、地球にいる神を倒してほしい。
- 2、ついでに人類絶滅派の神も倒してほしい。
- 3、あわよくば羽生の補佐、あるいは神にしたい。

俺「その見返りが見返りがチート能力か。」

羽生「どうでしょうか？」

友人なら何も疑問に思わずに転生しそうだが、引っ掛かることがある。

俺「人が神になってもいいのか？」

ある意味大問題だ。可能なら某宗教の『セフィロトの樹』の概念が通用しないことになる。

羽生「問題ないです。現に神の3割が人間から昇格した人たちなので。因みに天使は神の分身体で、悪魔は制御不能になった分身体になります。」

某宗教の関係者だったら鳴き崩れそうな話だな。

俺（聞くことは聞いたが、協力する気にはなれないなあ）

友人が聞けば全殺しされそうだが、そもそも俺は現世がどうなろうと関係ない。

だって既に死んでしまってるのだから。

正義の味方になりたい訳でもない。

根本的にやる気も無い。

さて、どうするか

羽生「魂の修練として漫画の世界に行きたい、ですか？別にかまいませんが。」

全力全開で考えた結果、やっぱり自分の欲望に素直になろうと思います。

はい、原作介入および原作ブレイク。

やってみたいじゃないですか！

でも圧倒的な火力で蹂躪するするのは気が引けます。
なので

俺「転生時に発生するチート能力を全部破棄する代わりに次ぎに言う能力を与えてください。

まず『時間進行』。これは漫画じゃ語られないところをリアルタイムで過ごすのは非常につらいので、好きな時間まで話を進められるようにしてほしい。その代わり過去に遡ることは出来ない制約を付けます。

次に『次元移動』。一つの漫画では修行が足りないと思うので、別の漫画に飛べるようにしてください。これにも一回行った漫画には二度と入ることが出来ない制約を付けます。

最後に他の漫画に移動するとき自分が欲しいと望んだ能力を一つ付加する。あとは記憶継承、能力継承かな？」

羽生「かなり細かくて面倒な注文ですね……。」

そりゃ当たり前だ。

無理だといわれることを前提に言ってるのだから。

羽生「出来ないこともないですが、一つ問題があります。」

よし、その問題さえ解決できれば願いが叶う！

羽生「あなたのわがママを聞く代わりにあなたの性別が女になります。」

ま……て……

性別が……なんと……？

俺「……………もう一度お願いします。」

羽生「あなたの性別が女になります。しかも紫の目で黒髪、長さはロングで一部の髪をリボンでまとめてます。」

まさ……か……

羽生「具体的に言うと鍵の野球チームの姉御です。そしてもうその体になってます。」

そう言つて羽生は袖から出した手鏡を俺に渡してきた。

そこには既に『俺』は存在していなかった。完全に女になってます。確認しましたから。

……欲情？自分の体に来るか！そしてそんな余裕あるか！！

俺「まさかこんなことになるとは。おねーさん最早大打撃だよ……」
もういつそのこと現世の記憶封印をしてしまったほうが楽だな。
うん。前世の記憶は黒歴史にしておこう。

羽生「容姿はそれで固定になります。年齢はその世界に言った時点で決めてもらって、そこから成長していくってな感じになってます。」

俺「ふむ、確かに成長しなかったり若返ったりしたら周りの視線が痛そうだな。」

羽生「女性にとって若さは大切なものですからね♪」

俺「待て羽生君。語尾の『♪』に悪意が感じられるのは私だけか？」

羽生「あ、バレました？」「・・・ちよつと、O H A N A S H
I しょうか？」「ごめんなさい！謝りますから肉体言語での会話はやめてください！！」

本気で反省しているように見えるので許すことにする。
こういう時って身体年齢が幼い人って得するよなあ。

羽生「うう、そろそろあなたをどこかの世界に飛ばそうと思います
が、名前はとうしますか？」

恐る恐る聞いて来るのは地味に傷つく。
そんなに酷いことしたかな？

俺「ふむ、そういえば初めの質問に答えてもらっていないぞ。なぜ元々の名前、■■■■が言えないのだ？」

羽生「それはまだ現世にあなたの肉体が存在してるからなんです。この世界では現世で生きる人の名前を名指しできないようになってます。」

俺「なぜできない？」

羽生「神が名指しするという意味は結構重要なんですよ？幸運を司る神が名指しすればその人は幸運になり、力を司る神が名指しすればその人は力持ちになるなど簡単にその人の運命が変わってしまうんです。」

俺「ふむ、了解した。名前は……一槻>ツキ<がいいかな。日本でも外国でも使えそうだ。」

羽生「わかりました。それではさようなら。」

羽生が手をたたく。

足元に穴が開く。

下に落下。

これはもしかしなくてもあれだね

俺「って待て！どこの世界に行くかも能力も決めてないぞ！」

羽生「どこの世界に行くのかはヒミツです。能力は現地で考えてくださーい」

俺「そんな投げやりなああああああああああああ」

こうして俺は性転換をし、転生者になった。
因みに高所恐怖症の俺にとって初の自由落下だった。

1話 〱現状確認と頼りない神〱（後書き）

ああ、ダメだ。これ以上上手く掛けない……

しかもまだ行く世界が決まってるない！

これが勢いで書いた結果なのか！？

2話「完結するはずのないアニメで能力稼ぎ」

(ドラえもん編)

目が覚めると、空き地にある土管の上で昼寝をしていた。

槻「さて、ここはどこの世界かな？」

初めの世界は羽生が勝手に決めたのでどのアニメか分からない。
空き地に置いてあるものは、なんとなく見覚えがある柵と積まれた
三つの土管。

槻(……ドラえもん?)

もう数年も前に見るのをやめた国民的アニメ。
そして今も続いているアニメでもある。

槻「原作介入しても意味が無いアニメが最初つてのもなあ……」

いわゆる終わりが無いタイプのアニメだから、介入したとしても劇場版と同じ扱いになっってしまうだろう。それでは面白くないし、やる気も出ない。

さっさと次の世界に行くことにする。

まず土管から降りて足で土管を囲むように円を描く。その外側に行きたい世界の名前、およびアニメの名前を書いて円の内側に待機する。その中で10分間いると、能力『次元移動^{ディメンション・アイン}』が発動し、他の世界に移動する。

槻「……ちょっと回り道していくとしよう。」

いいこと思いついた♪

外側に書いた名前を消して新たにそのアニメの名前を書く。

(ちびまるこちゃん編)

槻「凄まじいまでのデフォルメ……。」

この世界に来てまず感じたのはそれだ。この世界で自分の顔を見ることがこれほど恐ろしく感じる世界は他にそうないだろう。

槻「とにかく次に行こう。」

来て10分も経ってない世界だが、さっさと次の世界に行く。

（サザエさん編）

槻「これでほしい能力は手に入った。」

一番初めにドラえもんには飛ばされた時は羽生に殺意が湧いたが、今は逆に感謝している。よく考えると自分の身を守る最低限の能力は有るべきだ。そこで無駄に世界を渡って足りない部分を補わせてもらった。

槻「さて、次の世界から原作介入だ。精々楽しませてもらうか」

『次元移動』を発動。

ある魔術の禁書目録、とある科学の超電磁砲

学園都市へゴー！

2話〱完結するはずのないアニメで能力稼ぎ〱（後書き）

一週間かけてこれだけしか書けないとは……
非常に申し訳ない気分ですね。

ま、次回から本格的に始まるんでそこら辺はよろしくお願いします
！

三話、レールガンを入れたから思ったより昔からのスタート

目を開けると、そこは見知らぬ部屋のベッドで情眠を貪っている女性を写す鏡が見えた。

槻「……ああ、そう言えば女性になったのだったな」

それが自分だと認識するまで少々かかったが、あまり気にせずに起き上がる。

部屋の中を見渡すと間取りは上条の部屋と同じだった。

部屋には年ごろの女性にしては飾り気のない家具が並んでいるだけ。ある意味寝るだけのためにこの部屋があるくらい生活臭が無かった。

身だしなみを整えたので、早速この世界でどう生きていくか考えることにする。そのためにはまずこの部屋の物色とこの体を持っている記憶を探る。

まず名前は片桐槻^{かたぎりつき}。なんとも羽生が用意しました的な名前だ。前世の名前に似てる。

10か月前に学園都市に入学してそのまま高校へ。今は冬休み。能力開発を受けていてレベル2。名前は【複製貼付】（コピー＆ペースト）。一度触れた物体を片手で持てる大きさを再現する能力。中身までは再現できないうえ、5分で消えてしまうことからこのレベルになった。

お金は貯める方で、預金通帳は結構な残高がある。

友人はあまりいないようで、良い印象を持った人の顔が一つもない。まわりつく輩はさっさと掃除しており、無事進級出来てほっとしている。

槻「こんなものか」

おかしなことに学園都市に来る以前の記憶がかなり霞んでしまっている。あることにはあるが、感じ取るのは結構難しいくらいに。まあプライベート情報と言うことでこれ以上は探るまい。

さて、今度は能力を使ってみるとする。

前世で使っていた箸をイメージして、大きさを決める。結構集中しなければならいらしいので目を閉じる。

槻（複製）

必要な固さ、材料などを細かく設定して手のひらにあるとイメージする。

槻（貼り付け）

目を開くと同時に前世で使っていた箸が手のひらに出てきた。

槻「これが超能力か。……うむ、多用は避けた方がいいな。」

頭が熱かった。記憶によれば連続使用は6回が限度でそれ以上は頭痛がひどくて力が使えない状態になるらしい。一回でこの負荷だと

非常にづらい。この能力で戦闘は難しい。

槻「それにしても、良く出来てるな」

外見は少々曖昧だったため茶色一色だったが、強度に関しては問題なかった。

そして五分経つと空気に溶けるように消えた。

気分が落ち着いたところで外に出る。服装は黒いコートに白いセーター。下はジーパンと言う防寒対策重視の装備になっている。

実は財布が見たらない。記憶を探っても分からなかった。

そうなると必然的にお金を引き出しに行かねばならない。面倒だが郵便局に向かう。

パンツ！

拳銃が放つ乾いた音。

カンカララン

続いて菓莢が転がる。

槻（はて、なんだか見たような場面ですね。）

郵便局でお金を引き出し終えた私は奥の窓口で色々な手続きの方法を聞いていた。預けていたお金も結構な額でしたからね。そのため郵便局のど真ん中でキョロキョロしている不審人物に気がついていながらも無視していました。

槻（……なるほど、レールガンの昔話の場面ね）

どこから始まるのかと考えていたが、まさかここからとは。

槻（原作介入をここからすると後が面倒になりそうだけど、ほっとけないわね）

いつでも能力が使えるように準備する。

この間にも事態は進んでいて、白井が強盗を気絶させるが強盗の仲間に初春を人質に取られる。焦っている郵便局員によってシャッターが下ろされ警備ロボットが動き出して強盗に向かって突進。

槻（ここ！）

手に貼り付けした野球ボールを黒子に向かって投げる。狙いは足。見事命中！

警備ロボットと一緒に走りだそうとした白井はいきなりの衝撃でバランスを崩してその場に倒れる。

なんとか起き上がったが、同時に警備ロボットが強盗に破壊された。

槻（これで黒子は反省しないけど、固法が背中に傷を残すことが無
くなった）

小さいけど大きな介入の始まりだ。

三話、レールガンを入れたから思ったより昔からのスタート（後書き）

なんでここで介入したんだ!!

もっと後でもいいだろ!

ノープランでやるには早すぎるぞ槻!

槻「あなたが頑張ればだけでしょ」

そう言えはいきなり女らしい言葉遣いになったが、どうして?

槻「気分」

……もう何も言いません

四話　初めての戦闘は反省点が多い

槻「さて、その強盗さん。お金を持って早く逃げた方がいいのでは？警報が鳴ってしまったのでアンチスキルがもうすぐ来ますよ。」

「ここでお金を持って行かれたところで私には何の影響もない。今最優先すべきことは出来るだけ無傷で事態を納めること。」

強盗「お前、ジャケット風紀委員だな？」

槻「答えはノーです。お役所仕事など私じゃ出来ませんから。」

「どうやら白井の仲間と思われたらしい。」

槻「それより早く逃げた方がいいのでは？仲間は気絶していて使えない。シャッターが邪魔して逃げにくい。時間が無い。私ならさつさと尻尾を巻いて逃げますが。」

強盗「ならそこにあるバッグを持ってこい。この通り身動きが取れないのでな。」

初春にナイフを突き付けて脅す強盗。

この場合、脅しても何の効果もないのになぜやるのだろうか？

白井「くっ」

白井黒子、頼みますから変なことしないで。

槻「分かりました。」

ここは素直に行動。下手に刺激して暴走してもらっても困りますから。

槻「っ！！お、重い……。」

アニメではロープしか見えなかったので軽いと思っていたのですが、重いです。

かよわい乙女に持たせるには少々キツイですね。

槻「その眼鏡をかけた人、済みませんが手伝ってくれませんか？」

固法「わ、私！？」

ここで固法を頼るのは当然でしょう。黒子は警戒されているから不味いでしょうし。

……同じウエストポーチを付けているだけで感づかれることはないですよ？

槻「構いませんよね、強盗さん。」

強盗「……いいだろう」

槻「すみません。助けを求めてしまって」

固法「いえ、大丈夫ですよ」

よろめきながらも何とか強盗の前まで到着。

白井も歯ぎしりしながらもその場にいた。

槻「で、次は何をすれば？」

強盗「そうだな、眼鏡の女は元の場所に戻れ。お前は目をつぶれ。」

言う通りにする。

少々頭が痛くなってきましたが、次の能力発動の準備に当てさせてもらいま

ゴッ

ナイフの柄で殴られて倒れている、と分かるまでしばらくかかりました。

流石にキツイですね。軽い脳震盪が起きているようです。意識は朦朧として能力は使えないし、視界は霞んでいます。

初春「お姉さん！お姉さんしっかりしてください！」

白井に向けられるはずの声が私に掛けられるというのも中々面白い
ものですね。

強盗「まったく、お前みたいなすかした奴を見ると、腹が立つんだ
よ！」

槻「ッ！！カッ……」

この状態でお腹を蹴るとは……。

これではしばらく何も出来ませんね。

息は吸いにくいし思考もバラバラ。

時折初春の声も聞こえるが聞きとれない。

槻（ろくに訓練していない一般人が首を突っ込むところなのです
か。）

……少々悔しいですね。

ちよつと悪足掻きでもしてみますか。

槻「……やはり屑、ですか。」

強盗「あああん？」

小さい声しか出ないのだが、律義に反応してきた。

槻「この街に住む人たちは……大きく分けて……四通りいます。一
つは……不器用ながらも……自分が信じた道を歩く人達。一つは……

…自分に負けて……考えることをやめた人達。一つは……自分の自己満足で……周囲を顧みない人達。一つは……それ以外の人達。」
色々考えている暇はない。支離滅裂でも構わない。挑発する文字を羅列させる。

槻「胸を張って……いいですよ。あなたは……私にとって……五通り目の人……人間として……終わっている人達の……一人目として認識しました。」

強盗「黙れ。」

そう言われたと同時に強盗が馬乗りになって首を絞めてきた。

強盗「俺の能力は【絶対等速】^{イコール・スピード}。投げたものが壊れるか、能力を解除するまで直進し続ける能力だ。御希望なら、その目を潰してやつてもいいぜ。」

強盗は右のポケットの入っているパチンコ玉を取り出してそう言った。

それを見て言った。

槻「残念、ですね。」

強盗「何？」

回数制限ありで、まともなものも作れないこんな能力よりも扱いやすそうで羨ましいです。

槻「能力があるのに、こんなことをするのは残念だと、言ったんで

す。
」

ツインテールの彼女がこちらに走ってきていますが、強盗が両手で首を締め始めました。

もう意識を保つのが難しいですが、やれることはやりました。

槻（あとは任せましたよ、白井黒子）

頭が痺れていくのを感じながら私の意識は沈んでいきました。

四話「初めての戦闘は反省点が多い」

（後書き）

話し言葉とか統一したいのだが、どうでしょうか？

槻「知らない」

制御できないのは自分の責任ってのは分かってるから、そこをなんとか……

槻「未熟なのは承知しているのでしょ？あとは努力すべし。」

そんな～！

五話〱事情聴取で自己紹介〱（前書き）

初めてアクセス解析を見ましたが……

P V	4 8 0 0
ユニーク	1 5 0 0

読んで下さってくれた皆さん、ありがとうございます……！

五話　事情聴取で自己紹介

槻（き、気持ち悪い……。）

意識が戻った時にまず感じたのが吐き気。まだ殴られた時の衝撃が残っているみたいで頭がくらくらする。

頑張って目を開けると辺りは茜色。夕方頃になっていた。

固法「あ、気がついた？」

そして目の前に固法がいた。

槻「……ここは？」

固法「まだ郵便局です。救急車を手配したので、もうしばらくお待ちください。」

周囲を確認するとアンチスキルが現場検証していた。

固法「本来ならすぐ調書を取りたいのですが、今はゆっくり休んで下さい。」

槻「ありがとうございます」

せつかなので寝かせてもらう。

槻（で、やっぱりこうなるのですか。）

目が覚めるまで付き添ってくれた白井に感謝はするのですが、何故邪魔したとか、何故出しゃばったとか非常にうるさい。白井の性格を考えると当然ではあるのですが、今この場であなたの声は拷問器具です。

槻「お、お願い……。少し静かにして。気分が……。悪いの。」――
――

良く響く声ですね。

頭の中がガンガンして吐き気がします。

白井「そうはいきませんわ。何件かの事件に関与していると疑いかかっています。証拠不十分で釈放。そんな人物をここで逃してたまるものですか！」

逃がすって……。なんで助けてあげたのにそこまで言われなきゃいけないのよ。

槻「じゃ、答えてあげるから……。10分ほど黙ってもらえない？」

白井「嫌ですの」

このガキ……。#

肉体言語で事情聴取のやり方教えてみようかしら。

固法「はいはい、そんなやり方じゃ相手を怒らせるだけよ、白井さん」

白井「固法先輩！」

槻「あ、こっ……眼鏡の人。」

軽く礼をすると、固法も軽く会釈する。

……危ない、危なかった。まだ自己紹介されてないのに名前で呼んじゃ不味いわよね。

固法「白井さん。自己紹介はしたの？」

白井「い、いえ。」

固法「まずは自己紹介から。それと、容疑が固まるまではあくまで容疑者。犯人と決め付けての会話は少々頂けないわね。」

白井「……了解ですの。私は第七学区、第一七七支部所属の風紀委員、ジャッジメント白井黒子ですの。」

しぶしぶ、自己紹介する白井。そんな不機嫌な顔で睨まれても、ねえ。

固法「同じく風紀委員、ジャッジメント固法美偉。あなたの名前は？」

槻「なぎさ学園高等部一年、片桐槻です。以後お見知りおきを。」

固法「以上です。ご協力ありがとうございました。」

つつがなく事情聴取は終わった。

固法は比較的やわらかい声だったからこれ以上気分が悪くなることなくてほっとした。

むしろいきなり割って入る黒子の声が問題な訳で、しばしば休憩を入れる必要がある位悪化したわ。

……ちよつといじめてもいいわよね？

槻「固法さん、鉛筆と書くものありますか？」

固法「ええ、これでいいかしら」

礼を言つてシャープペンと白紙の報告書の裏（いいの？）を受け取った。

そこに大きく長方形を書いて中に棒人間、丸、四角を書いて行く。

槻「さて、白井さん。この図面、どこのものか分かります？」

白井「……先ほど郵便局の見取り図ですの？」

しかもアニメでは省略されていた一般人や局員の位置も全て書きこんである。全員合わせて17人。

槻「まず、固法さんが郵便の窓口で手帳を見せていたことからアンチスキルに通報してほしいと郵便局員に話していたことが推測されます。そしてその前に白井さんと話していたことから強盗目的で入ってきた客の存在を確認したとこれも推測されます。その後強盗は発砲。それに対して固法さんは動かず、白井さんは強襲し無力化させる。二人の行動に食い違いがあることから固法さんからの命令無視が考えられます。それによって隠れていた仲間に一般人が人質になる。」

……私の推論に間違った点がありますか？」

白井「……ありませんの」

槻「それでは続きを。郵便局員によって警報装置が押される。それによってシャッターが下ろされ、警備ロボットが起動。その陰に隠れて白井さんは強盗に突撃しようとしたけど私が投げた物によって転んで失敗。起き上がった直後に警備ロボットが破壊される。」

さて」

自分で気付かせた方がいいのだけでも、その機会を奪った私は教える義務がある、と思う。

槻「あなたはいくつの失敗をしたか分かりますか？」

白井「……それを今論じる必要がありますか？」

だから、言う。

槻「そんなことを言える立場なのか、分かって言っているの？」

ちよつと暗い感じの声にする。

……そろそろ固法が口出ししてくると思うのですが、その様子はなさそうですね。

槻「先輩の待機命令違反、独断先行による一般人への被害。さらに無謀な強襲で大怪我を負うかもしれないあなたに、その反省を次に生かそうという思いはなかったと言う訳ですか？」

口調は穏やかに

内容は厳しく

心は冷静に

……説教って結構難しいわね。

槻「そして、あなたが負うはずだった怪我は、もしかしたら他の人が負っていたかもしれませぬ。」

白井「え？」

槻「図面を見てください。もしあなたが警備ロボットに隠れて強襲していた場合、誰の前を通りますか？」

シャーペンで一本の線を引くと、近くにいる人は一人しかいない。

白井「……固法先輩。」

槻「半人前の後輩が危険な状態だったら庇っていたかもしれませんが、あくまで可能性ですが、あなたが独断で犯人を攻撃しようとしたがために、先輩がけがを負った。そんな結果があったかもしれないのです。」

白井が悔しそうに表情を歪めている。

……原作通り話を進めたいなら、介入するたびにこんなことしなきゃならないのでしょうか。面倒だわ。後悔はしてないけど。

槻「それと前の質問に答えてあげます。私があなたに物を投げたのは犯人が右手をポケットに入れたから。警備ロボットを止めるなら破壊するくらいしかありませんからね。その影で腰を低くしていたら一緒に行くのはほぼ確定しますし、あまり他人が傷を負うの、私は嫌なので。」

その結果が病院行きとは情けない限りです。もっとスマートに解決できるタイミングはあったんですが、我慢できなくて……。

槻「白井さん。あなたには力があるだけで経験も知識も判断力もほとんどないと言っていいでしょう。だからもつと周りを頼りなさい。そして頼られる存在になりなさい。そのためにも今回の失敗を二度としないように自分を磨きなさい。それがあなたの行動で巻き込まれた一般人に対して出来る、最低限の償いです。」

一般人に私は含まれないわよ？だって勝手に突っ込んだだけですし。まあ、言うことは言っていました。ちゃんと伝わっているかどうか……むしろ伝わってない可能性が大ですが、そこは黙っておきます。

もう私から言うことはないですね。

槻「……長々と話してしまいましたが、って固法さん、見つめられても困るのですが。」／／／

何か考え込むかのような表情で見られています。

……まさか白井が同性愛者になったのは固法が原因！？

固法「……惜しいわね」

槻「はい？」

固法「片桐さん、風紀委員やってみない？」

槻「あ、そっちのことですか。」

ですよー！。

もしそうだったら一七七支部は百合の園になっているでしょうから。……でも私、おんにゃーの子が好きだから傍から見れば百合になるんですよー！。

仕方ないか、元が男ですし。

槻「遠慮します」

満面の笑み攻撃でこっちは全力で拒否。正直やりたくないですね。ボランティア活動だけならまだしも事件の鎮圧とか報告書の作成とかやっつけられますか！

固法「でもあなたの行動力と分析力を活かす場って学校じゃあまりないでしょ？」

槻「非常に嬉しいお言葉ですが、退院した後でやる事が出来ましたので。少なくとも春休みまで多忙な毎日になりそうなので落ち着いたらまたじっくりと考えさせていただきます。」

固法「具体的には？」

……あの、固法さん？逆光で眼鏡が反射して目が見えません。それで口だけで微笑んでいるとマジで怖いです。しかも何かオーラが出てますよ？（逃がさないわよ）え、どこから声が！？
言いますから、言いますから威圧しないで下さい！

槻「……白井さんには結構傲慢に説教していましたが、私自身も今回のことで未熟だと思い知らされました。」

手のひらに白井にぶつけた野球ボールを張り付ける。

槻「私の能力は『複製貼付』&『コピー&ペースト』。何もない空間から物体を作り出す能力。これで白井さんを危険から救ったまでは良かった。けどその後は最悪。頭を殴られて意識が混濁して能力が使えない、おまけにお腹を蹴られて満足に動くこともできない。出来ることと言えば強盗を挑発して人質を手放させて私の首を絞めさせる。その後は救った白井さんに全て丸投げ。」

先の展開を知っている者としても、ここで生きている者としても最悪の選択。引つかきまわすだけ引つかき回して、後は原作のキャラに任せるなんて、私はしたくなかった。

槻「その結果が気に入らないですし、何より自分のことを勘定に入れないで行動していました。それが周りの迷惑になることを知っているのに……」。

です。これから自分の力で何が出来るか知るために自分を見つめ直そうと思っています。そのために知り合いの研究室を借りて色々とお世話したいことがあるので。」

固法「ふん。」

……あれ？固法ってこんなキャラでしたか？こんな余裕たっぷりで見下すような顔、本編じゃ見たことないのですが？

固法「それじゃ、私の番号を覚えておくわね。もし風紀委員に入るのなら、書類くらいは用意してあげる。」

（逃げちゃだめよ？）

……どこからか電波を受信しました。これは無視したら面倒なことになりそうな気がします。

春から風紀委員ですか。……正直嫌です。何とかありませんかね？

五話〱事情聴取で自己紹介〱（後書き）

ねえ

槻「好きにすれば？」

まだ何も言っていないよ！？

槻「どうせ人を呼ぶ時の書き方でしょ？」

……………

はい、そうです。

作者は女性に対して畏敬の念（？）を抱いておりまして
呼び捨てにすることに非常に抵抗があります。

なので次回から女性には全部さんを付けます。ええ、年下でも関係
ありません。

槻「最初からそうすればいいのに」

いやゝ、傲慢な槻さんを表現しようと思ったたらそうした方がいいか
な？

とか思っただけど、書きにくい。

書くたびに違和感が膨らんでいくんで執筆が思っようにはかどらな
くて。

槻「原因はアラド戦記と他の転生物語見てるだけなの？」

……………はい、そうです。

しかも感化されやすい性格なので若干混ざる可能性があるのですその

場合は生温かい目で見て下さい。

槻「お気に入りに登録していただいた10名様には、感謝の言葉も
ございません。」

出来ればこの物語が幕を閉じるまでお付き合い願います。

六話、せつかく付加された能力があるのに全く使ってませんでした（前書き）

プロットが行方不明になってしまった！

……これから迷走するかもしれません

六話、せっかく付加された能力があるのに全く使ってませんでした。

入院費は風紀委員が支払ってくれたそうです。……これでますます断りにくくなりましたね、風紀委員の話。

今は退院して自宅にて安静にしています。

規（そう言えば、）

今さらながら思うのですが私は転生者。しかも若干の補正がかかっているチート転生者。

チート能力を使わないで何がチート転生者か！

榎（まあ、使うも何も現状の私が高んなのか知っておく必要はあるわね。……接続）

と言うことで、無駄に三回転生して手に入れた能力の一つ、【虚空年代記】を使って今持っている能力の確認をします。これは別名アカシック・レコードとも言われていて、『全てのことが分かる概念』らしいですね。wikiで昔調べましたがもう記憶があやふやです。

さて、
まずは

「『質問』、片桐楓のステータス。」

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

答え けっか

名前 片桐 槻

読み かたぎり つき

年齢 16歳

性別 女

髪の色 足元まである黒の髪

目の色 濃い紫

保有スキル

コピー&ペースト

【複製貼付】

【戦闘の極み】

神の気まぐれ

【騎乗】 B

【黄金律】 A

【十二の試練（劣）】

付加スキル、宝具

ディメンション・アイン

【次元移動】

タイム・シフト

【時間進行】

【空衣】

アカシックレコード

【虚空年代記】

【

え？

何これ？

神の気まぐれ？

「質問、神の氣まぐれとは。」

神の気まぐれ

神が勝手に付加した能力。

ただ、意味はあるし調整されている。

補足すると【十二の試練（劣）】はオリジナルの力から

『ある程度のダメージ無力化』

『既知のダメージに対して耐性』

「ストックされた命の補充」

以上三点を取り除いたうえで

「肉体が死亡してから5分後に蘇生。これは肉片が残らなくても適

用される。』

を追加したスキル。一度に複数回死ぬことが無くなった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

十分チートですね。

11回死んでもOK、とかもう作者の希望で何回か死ぬことが決ま
っているみたいで嫌ですね。ある意味、身を投げ出してまで人を救
える回数が11回までも取れますが、考えても意味がなさそうで
す。

さて、気を取り直して……………平凡な日常を送っていたはずの私が
持っているはずが無い【戦闘の極み】を『質問』します。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

戦闘の極み

その場に応じた身体能力の強化を行ってくれる能力。

筋力、反射、俊敏、学習能力を能力の保持者が扱える範囲で上昇さ
せる。

砕いて言えば

ドーピング＋技を覚える速度が天才並みになる
と云うこと。

視覚情報に頼るので目を塞がれると効果が激減する。【心眼】のス
キルで克服可能。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

いわゆる修行すれば修行するほど化け物になるスキルですか。
前世の私がそんな力を持っていたなんて……。なぜ平和な世の中で
生まれたのでしょうか？

……え？違う？

まあ、黙っててもらいます。

「『質問』、【空衣】【虚空年代記】【収集記録】【
についての説明。』」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

空衣

周囲の空間に物を収納できる小規模の結界。
中で時間は止まっているため倉庫として使うこともある……が、主
に武器を収納する事に使う。

原則として生物は入れられない。

虚空年代記

別名アカシック・レコード。

神の誕生から終焉までが記されているとされる概念の塊、と言われている。

これを人の中に入れてしまうと情報量の多さに脳がパンクしてしまう。なので一般的には外部から接続し、『質問』と『答え』だけをやり取りする。基本的に人間が解明したことしか『答え』が返ってこない。

使用権限は四段階あり、A B C Dで表わされる。現在C。

宝具・収集記録

バンダーログ

見聞きした呪文が全て記された本。大きさは図鑑並み。

魔法を使用する場合は、使用する魔法のページを開いておかななくてはならず、原則詠唱が必要。詠唱が無いものは自分で作らなければならず、一度詠唱を完了すれば収集記録に書きこまれる。よって詠唱の変更は出来ない。出る数や強さを決める部分は■で埋めている。使用者の魔力を使って魔法を使用するので、使用できないものは記されていない。ただラグナ・ブレイドは小規模で発動できるので使用可とする。

詠唱破棄などは論外。

[]

『人間は神だった』と言う仮定を『人間と言う肉体に閉じ込められ
たため神ではなくなつた』とねじ曲げて解釈して構築された術式。
神ならば扱えたであろう力を人のレベルで扱えるような規模で能力
したもの。命を対象にすれば自己再生。火を対象にすれば体温調整
をして筋肉をほぐす。水を対象にすれば血液を操つて強引に体を動
かしたり、流血時には体内の血を使つてウォーターカッターもどき
が使える。雷を対象にすれば脊髓反射以上の反応速度や動きが可能。
あくまで自身の持つているものを使うので炎や雷を出したり、水の
剣を作つたりは出来ない。

使用した時間に応じて強制的に寝なければならぬ。

[illegible]

あら？ 収集記録は回復呪文のためだけに出した一品の筈なのに、なぜし様の剣の話が？

まあ、魔力は一般人並みですからそんなに派手な呪文とかは出せないでしょ。

【 】は使い勝手が悪いわね。現世で漠然と考えてた能力を使ってみようと思つて付加させてみたけど、使えないわ。それに……。せめて無題とか名なしにすればいいのに。

それじゃ次

『質問』

「【複製貼付】についての説明」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

【複製貼付】

超能力に分類されるもの。レベルは2。

一度触れた物を複製する能力。

一見便利に見えるが、以下のマイナス要素がある。

片手で持てる大きさ、重量でなければならない

中身は空洞。つまり完全には複製できない。

複製したものは5分経過すると消滅する。

脳に負荷がかかり、連続使用は6回が限界。

スキル【虚空年代記】を使用すれば大きさと重量制限と撤廃と完全

複製、連続使用が20回に増える。ただ30分経過すると消滅する。

この時のレベルは4と推測される。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

槻「U・B・W.ですか？」

ちよつと突っ込んでみた。

……空衣と組み合わせればほぼ同じことが出来るわよね。あらかじめ作っておいた武器を空衣から出して攻撃。壊れるか時間が経過、もしくは投擲で使用したらまた取り出す。時間が経てば消えてしまうので敵に回収されることもないし、証拠が残ることもない。

……ああ、主人公補正マックスですね。本当にチート無双が出来そうな超能力、ご馳走さまです。

槻（もう調べることはないわね。切断。^{カット}）

アカシックレコードって便利なんだけど、接続しているだけでも疲れるわ……。

超能力の負荷と合わせるとあまり使いたくはないんだけど、早いうちにやっておいた方がいいわよね。

でも学園都市の中じゃアンダーライン（？）とかでアレイスターにバレるから嫌だし、休みも残り少ないし……。

うーん、どうしましょう？

実家に帰る。

……と言う名目で学園都市から出てきました。

きっちりナノマシンは注射されそうになりましたが、ねぎマの認識
阻害魔法でスルーさせてもらいました。

やっぱり便利ですね、魔法。

詠唱が必要なので周りの視線が痛いですが……。

今いるのが実家の近くの運動場。記憶ではしょうほくグラウンドと
呼ばれていた気がします。中々広いところで、野球が一度に三試合
できるほど広いです。そこで空衣から収集記録を取り出します。

槻（とりあえずまず封絶を張るところからね。詠唱は……）

元々魔法陣か何かだったはずですが、そこは気にしません。

一々唱えると長くなりそうなので、高速詠唱の原理で英語の頭文字
だけにします。

槻「え〜っと。流れよ、止めよ、ものよ、覚えよ、記憶よ、留め
よ。」

適当な呪文ですがそこは主人公クオリティ。黒色の炎の封絶が張れ
ました。同時に収集記録にさっきの詠唱が書きこまれたようです。
何度も変えたいんですけどね。ルールですから。

それにしても黒ですか……。

槻「桜とかオレンジとか水色とかがよかったのに……」

炎自体の色は希望通りにならないのは残念ですが、修行事態に支障はないでしょう。

まずアカシックレコードと超能力の応用から始めましょうか。

六話、せっかく付加された能力があるのに全く使ってませんでした。（後書き）

「 」は空欄です。名前が決まっています！
そして感想受付が制限なしになってませんでした！
申し訳ありませんでした！

槻「使用説明はきちんと読みましょう。具体的には各種マニュアルを。」

説明書ってあんまり読みたくないんですね……。
何より面倒……。

槻「少々感想が欲しいと言っていた人が吐けるセリフではないと思うのですが」

……
申し訳ありませんでした！！

七話　修行は終わりましたが、夏まで暇です

私が通っているなぎさ学園は学園都市の外にもあります。よって能力開発よりも学問を優先する傾向が強いのです。なので冬休みの課題をしていなければ補習ではなく、それなりの罰が科せられます。

修行が終わって帰ってきたのが昨日のお昼でした。学校の場所や授業内容を思い出している間に、実はまだ課題が全て終わっていないことを知りました。なんてことでしょう。

徹夜で頑張ったのですが、やはり間に合いませんでした。

……アカシックレコード？もちろん使いましたよ。ですが文字情報でしか答えてくれない、分かりやすい説明ではない、途中式が全くない……。今回は役に立ちませんでした。

？「ん？片桐、課題はどうしたあ？」

見事に左目の眼帯はスルーしてくれましたね、このポンコツ教師。ああ、この眼帯は修行中にミスして失明してしまいました。今でもオートリジェネをかけているのですが、まだ回復しません。

えっと、この語尾を伸ばす気持ち悪い先生は柊戸優治^{ますと ゆうじ}。

数学の担当で、この学校で唯一私が殺意を持つ先生です。

槻「少々事件に巻き込まれまして、柊戸先生の課題だけなぜか記憶から飛んでました。すみません。」

嫌みではありませんよ。ええ、決して。

柊戸「お前はいつも何もして来ないよなあ？何をしてるんだあ？」

これもスルーですか……。

槻「健全な学生生活ですが、何か？」

柊戸「それでは、健全な学生生活を送ってもらうために掃除の罰則でもしてもらおうかあ。」

柊戸 優治。元研究者で木原一族の血が流れていることもあって才能はそこそこあったらしいです。しかし同僚から濡れ衣を着せられ追放処分。仕方なく大学の卒業過程で持っていた教員免許で仕事をする事になったそうです。私に絡んでくるのは濡れ衣を着せた同僚の名前が片桐だったからと言われています。

以上が心優しい友人が話してくれた柊戸先生の歴史です。

逆恨みで私に突っかって来るなんていい度胸です。血祭りに上げて………もいいのですが、目を付けられるのは早いので我慢します。いつものことですし。

柊戸「放課後の6時から一年生の教室全部掃除しとけよー！」

………いつものこと、らしいです。

槻「そしていつも通り無視します。」

前世では真面目でしたが、流石に体罰級の罰則を受けるつもりはありません。

今は自宅にて、体の記憶とアカシックレコードを総動員して料理を作成中です。

そこそこ料理は出来ますが、いわゆる男料理しか作ったことがありません。なので頑張ってみようと思ったんですが

目の前には鍋に入ったカレーがあります。

楽がしたいんです！

出来れば料理なんてやりたくないんです！

でもいっぱい食べたいんです！

作り置きできて便利なんですよ！？

……とまあ、そんな感じでカレーになりました。味は私好みに作ったのでレシピは秘密です♪

そんなこんなで一カ月が過ぎました。

槻「……………暇。」

学校の机で呻いてます。だって本当に退屈なんですもの。現状を箇条書きにしますと

榊戸先生の言うことは完全無視。

多少の友人が出来ました。

アレイスターの目を気にして能力が使えない。

固法さんからメールが大量に来ます（内容は風紀委員関連……………）
眼帯が外れない。

このようなものです。ああ、ストレスが……………。

？「ツツキーが愚痴こぼすなんて珍しいわね、どうしたの？」

来ましたか、悩みの種の一人。

固法さんがこの私に送った刺客！

槻「……風紀委員には入らないわよ。」

？「そのことで朗報。白井って子が有能な助っ人をあの支部に連れ込んだから、少しは静かになるんじゃない？」

槻「そう願うわ……。」

訂正。悩みの種の緩衝材になってくれる人ですね。本当に助かります。

名前は村上巻子まきこと言いまして、茶色い肩まで伸ばした髪と、泣きばくろが特徴の女の子。この学校を担当している風紀委員の一人で、固法さんの友人でもあるようです。中学時代に同じ学校に行っていた繋がりで、私をスカウトしようと割と軽く誘ってきます。性格は適度に適當。・咲・の逆境部長に近そうです。

先ほど言っていた榊戸先生の情報を流してくれた友人もこの人です。

そう言えば固法さんと私は同い年でした。上条さんの一つ上。

槻「……上条×固法でくつつきませんかね。」

卷子「無理ね。」

声に出していましたか、次から気をつけましょう。
それに分かってます。固法さんには黒妻さんでしょ？男らしさはど
うあがいても上条さんじゃ敵わないわよね。

……主人公補正でもない限り。

槻「言ってみただけよ。あー、暇！」

卷子「それじゃツツキー。放課後付き合ってくれない？」

私のあだ名ですね。ツツキー。

D・K・でネツキーなどと言うボスがいた気がしますが、関係はな
さそうです。

槻「何ですか？藪から棒に。」

卷子「歌の練習をしたいのよ。」

槻「私はお前の財布かあ！！」#

卷子「資源は有効に使わないと。」

正確に言いますと、「カラオケ行きたいから奢って」

以前ドジを踏んでしまって、通帳の中身を知られてからずっとこの
調子です。

槻「そんなことしてたら枯渴するわよ？」

卷子「大丈夫よ、私には被害が無いし。」

槻「……ちよつとO H A N A S H I「つてのは冗談で」何ですか？」

ちなみに村上さんや他にもお金をせびつて来られた方々がいた訳ですが、一度O H A N A S H Iしています。それでほとんどの人は近付くことすら無くなったのですが、それ以外の方々は友達となっていています。不思議ですね。

……村上さんの顔が一瞬で青くなつたのは気のせいですよ？

卷子「ストレス溜まつてるんでしょ？歌って発散したら？って言いたかつたのよ。」

槻「一時期、毎日三時間歌つてた私が発散出来るでしょうか？」

他にもゲーセンに入り浸つた時期もありました。今では「黄泉への橋渡し」と呼ばれるほどです。……そこまで強くありませんが。

卷子「さらりと嫌みを言ってくれるじゃないの」#

そうやって首を締めながら縦に揺らしても何も出ませんよ。それにしても、随分と碎けた会話が出来るのもですね、私。他にも気軽に話す友人はできましたが、一番自然に話せるのは村上さんですね。

槻「はいはい、タップタップ。」

卷子「これでも力一杯やってるのよ！」

握力弱いですし、動脈も圧迫してません。ダメージは皆無です。それよりも周りの視線が気になります。

規「はいはい、分かっただから離してちょうだい。」

卷子「うにやあああー――――！！」
#

やっぱり友達はいた方がいいですね。

梶「ふう、そろそろ面倒ね。」

自宅に帰って開口一番がこれです。
カラオケ？もちろん行きましたよ。
……………私のおごりで。

多少のストレスは発散できましたが、やはり魔術師さんたちが待ち遠しいです。早く私色に染めてあげたいのですが、いつから学園都市に潜っているか覚えていません。

早く全力全壊で戦いたいものです……。

規「……
【時間進行】を使いましょうか。」

時を進められるスキルです。村上さんとお話しできる時間が減ってしまうのは非常に残念なのですが、そろそろ体を動かさないと本当に色々まずいです。

発散させる手段はあるのですが元男だけに、ちょっと……やりずらいです。

槻「流れよ、大地を走る輝く女神。五度目の月の満ち欠けまで精神だけ進めよ。」

いつでもどこでも使えて詠唱自由って非常に便利よね♪

槻「タイムシフト次元移動！」

さて、ミコちゃんはどんな子かしら？

七話、修行は終わりましたが、夏まで暇です（後書き）

固法さん、キャラ崩壊開始しましたw

一応原作通りに進められる程度に崩す予定ですが、どうなることや
ら……

さて、物語の中で説明する技量がないので
ここでオリキャラの説明をしておきます。

榊戸優治 ますと ゆうじ

元研究者の教師。外見は三十代後半で七三分けの黒髪。
本人は勧善懲悪の精神で生徒に接しているが、多少歪んでしまっ
ているため生徒に指摘される場合もしばしば。考えを改めない頑固者。
生徒の評判はかなり悪いが、彼の強引な理論での説教を嫌って問題
児が減っていることもあり、教師の間ではそこそこ良い。
趣味は健康管理。

村上卷子 むらかみ まきこ

レベル1の風紀委員。肩まで伸ばした茶髪で泣きぼくろがある。発
火能力系だが詳細は教えてくれない。

堅苦しいのを嫌い、先生にもタメ口の度胸ある女の子。

槻と話し始めたきっかけは、左目が潰れていて遠近感が狂っていた
時にぶつかってから。

何かと世話を焼いてくれるが、槻によく奢らせる。

固法とは昔同級生だった。今では槻への連絡役と化しており、固法の指令を笑いながら伝える。趣味は浪費。

八話、クレープが食べたくまりました（前書き）

PVが10000を超えました〜!!

読んで下さっているみなさん、ありがとうございます

八話、クレープが食べたくまりました。

槻「能力の向上が確認できるまで身体検査システムスキャンはしなくてもいいと思います！」

卷子「いきなり私に言われても……」

槻「ですよ。」

今は俗に言う試験週間、身体検査システムスキャンが各学校で順番行われる時期です。私の物体創造系の能力は一般の能力より非常に稀らしく、私専用の研究施設が作られており、毎回そこで能力測定をします。

……少々寂しいです。

卷子「んじゃ今日はゲーセンにでも行く？」

槻「眼がこの状態の友人を誘う場所ではない気がします。」

そう、まだ私の眼帯は取れていないのです。流石に時間進行した後でも眼帯が取れていないのはおかしいと感じた私はアカシックレコードで原因を調べてみました。どうやら直視の魔眼で言う目の死点に当たったらしく、回復魔法ではどうにもならない、とのことでした。………何か作為が感じられます。と言うよりフラグが立ったような

卷子「気のせいよ。」

そうでしょうね。

何せ能力で作った武器が砕けて、その破片が目に入って失明しただけですから。

……………今考えてみればなんてドジを踏んだのでしょうか。少し情けないです。

槻「まあ、行くには行きますが、なぜかクレープが食べたくなりました。」

卷子「クレープねえ……。そう言えばテレビで車のクレープ屋さんが今日オープンングセールやるって言うてたわよ。行ってみない？」

槻「……………その店の名前は？」

次元移動をしてまだ日が浅いのでそろそろではないかとは思っていたのですが……。

卷子「確かRABL^{ライム}Mだったかな？ふれあい広場でやってるはずよ。」

レールガンの始動ですね、忘れてました。

放課後………身体検査がなかったので午前中なのですが………
卷子さんとクレープ屋に向かいました。どうやらこのクレープ屋さんはベースやトッピングを自由に決められるようになっています。食べ物に関しては優柔不断な私に対してケンカを売っているのでしょうか？

槻「結構並んでるわね。卷子さん、トッピングが決まったら場所取りをしておいてくれませんか？」

卷子「オッケー。んじゃあ………ベースはアイスでトッピングはイチゴと白玉で。」

さて、私は何にしましょうか。いつそのことカレークレープなんてものを頼む手もありますが、それは一人で来た時にしましょう。

王道で生クリーム＋イチゴ。

同じく王道の生クリーム＋チョコ＋バナナ。

熱い夏にアイス＋チーズケーキ。

槻「すいませ〜ん。」

順番が来ても私はまだ、悩んでいます。

卷子「で、悩んだ挙句王道を選択した訳ね。」

槻「初めてのクレープなら正しい選択だと思いますが？」

結局、生クリーム＋チョコ＋バナナで落ち着きました。

卷子「へえ、クレープ初めてなんだ。それじゃ今日は食べ歩きツアーでも「今でお札が消えて無くなったのですが？」その銀行へ行けばいい！」

槻「却下します。」

と、他愛もないお話でそこそこ時間を潰していました。

クレープも食べ終わってそろそろ移動しようかと思った時、ふと聞こえてきた一言。

店員「お待たせしました。どうぞ、最後の一個になります」

おそらく佐天さんが最後の一個を受け取ったのでしょう。これから起こるミコちゃんの豹変を見ようと思っただけ振り向いたのですが。

佐天「み、御坂さん！しっかりしてください！」

慌てている佐天さんと全力で意気消沈しているミコちゃんがいました。どうやら佐天さんの前で売り切れてしまったようです。

槻（それまたなぜ……………って私が来たからですよね。）

原作と違ってイレギュラーが一人来ているため、佐天さんの前で最後の一個を迎えた、と言うことです。

ポケットに入っている両生類のキーホルダーに未練はないので渡しに行くとしましょう。

槻「ごめん卷子。知り合い見つけたから行くね。」

卷子「今度昼ごはんおごってくれたら眼を閉じておいてあげる。」

槻「…………分かったわ。」

あくどいですね。

まあ、その代わり完全版の O H A N A S H I を聞いてもらうとしますか。

槻「どうかしましたか？」

もう佐天さんとミコちゃんはクレープを買い終わったようですが、みこちゃんが立ち直れなくて困っているようです。

佐天「あ、すいません。邪魔でしたか？」

御坂「うう……」

ミコちゃん、残念なのは分かるけど人の声には反応しましょう。

槻「原因は……マスコットですか？」

佐天「多分……ってなんで知ってるんですか!？」

槻「マスコットが売り切れた直後にこんな状態になれば流石に、ね。」

失礼なのは承知しているのですが、苦笑いが……。

槻「仕方ないわね、私のゲコ太あげるから元気だ「いいの!？」……

…他人にその食いつきは若干危ないわよ。……どうぞ。」

すごい勢いでお礼を言ってきましたが言葉になってません。ミコちゃん、どれだけ好きなんですか？

調子を取り戻してくれたのでいいのですが。

佐天「すいません、見ず知らずの方なのに。」

槻「いえいえ、逆にこの両生類をどうしようか迷っていましたから」

礼儀正しくていいわねえ、佐天さん。

佐天「それでは、失礼します。」

槻「さようなら。」

これで用も済んだことですし、帰るとしましょう。
ですがその時佐天さんを見送っていたのは失敗でしたね。

「「……あ」「」

簡易拷問マシン、白井黒子と眼があってしまいました。

八話「クレープが食べたくなりました」(後書き)

槻：

こんにちは、片桐槻です。

今回作者がインフルエンザで氏んでいる、と言うことで代わりに補足させていただきます。

まず御坂美琴の呼び名ですが、これは私が個人的に呼んでいる名前です。

ああ、ミコちゃん。あのツンツンのデレデレは私のストライクゾーンです……。

因みに作者のストライクゾーンは佐天涙子らしいです。どうも高飛車なみこちゃんは苦手と聞いています。

……残念ですね。

次にクレープ屋の名前ですが、アニメで登場した店名です。

そこで疑問が一つ。チラシでは *rablun* に見えるのですが、お店には *RABLM* と表記されています。 *un* が *m* と言うのは理解できませんが、大文字と小文字の区別はつけるべきだと私は思います。

……突っ込んではいけないところでしたか？

さて、次回は久しぶりの戦闘になる予定です。そして風紀委員になるか否かも……

どうか、面倒なことになりませんように……

九話「強盗さん、もう少し冷静に行動したらどうですか？」

「「……あ」「」

コマンド、逃げる。

はい、躊躇なく逃げます。白井さんの声は既に私の中ではトラウマになっているので。

白井「お待ちなさい、片桐槻さん」

しかし廻り込まれて退路を塞がれました。

逃走失敗です。まあ、それは仕方ありませんね。白井さんは現在レベル4の空間移動能力者です。テレポーター

人間の足ではあらゆる意味で絶対に逃げられません。

白井「あなた……」

……仕方ありません、話のお相手くらいならしてもいい……のです
が、様子がおかしいですね。

落ち着きがないと言っか、鼻息が荒いと言っか。

白井「お姉さまに何を差し上げましたの！」

……ああ、トリップしていらしたのですか。
対処が面倒ですね。

白井さんの質問攻めがようやく終わりました。

このテンションで振り回されるミコちゃん達は大変ですね。同情します。

白井「あの、お時間はございますの？よろしければ友人を紹介したいのですが」

ようやく落ち着きを取り戻した白井さんが聞いてきました。

槻「えーっと、うん空いてるわ。それじゃ、お願いしようかしら」

私のスケジュールを確かめてみます。……はい、真っ白ですね。確認するまでもなく。

白井「では、こちらへ」

少々混雑している広場を横切って、ミコちゃんたちのところへ行きます。

初春「あ、白井さん。どこに行ってたんですか？」

白井「この方を見かけたので、皆さんに紹介しておこうと思いましたが」

佐天「白井さんの知り合いの方だったんですか。さっきはどうも」

槻「こんにちは」

ニコッ……と笑う技術はないので会釈します。
営業スマイル、いつか習得したいです。

槻「片桐槻です。趣味は」

ドガー—————ン

自己紹介を中断させたのは、銀行のシャッターを爆破する音でした。
さて、どうなることやら。

原作通りミコちゃんと白井さんのやり取りがあつて、お決まりの言葉

白井「ジャッジメント風紀委員ですの！器物破損、および強盗の現行犯で拘束します」

かっこいいですね。

現世でこんなこと言つてたら厨二確定の烙印を押されるのですが、さすが学園都市。非常識の塊です。

あ、強盗・sが笑い出しました。

その気持ちは分かるのですが、堂々と武器もなく1対3で足止めしようとする人の思惑ぐらい察することが出来ないのでしょうか？

強盗D「おい、お嬢ちゃん。とつとどっかに行かないと」

………強盗さん、前線の風紀委員は暴漢の拘束訓練は必ず受けるのですよ？

正面から突進なんて一番まずいでしょくに。

強盗D「怪我しちまうぜっ！」

………避けましたね、白井さん。

当たると思っただんですが、まさかあそこまで引きつけてから避けるなんて思いませんでした。

白井「そついう三下のセリフは」

そこから袖を少しつかんで足払い。
背中から落ちた強盗D、気絶。

白井「死亡フラグですわよ？」

自分の力ではなく相手の体重と勢いを利用した投げ技。あそこまで綺麗に投げられると見とれてしまいますね。こんなものを見せることが出来るなら、風紀委員の研修も中々厳しそうです。

……訓練の名目で風紀委員に入ることを検討してもいいかもしれませんね。

それにしても、半年前とは比べられないほど成長しました様です。かっこいいですよ、白井さん。

佐天「……すごい」

御坂「さすが黒子」

これなら何もしくなくても「ダメですって!」……あら?

初春「今広場から出たら!」

ガイド「でも!」

あー

男の子が行方不明になっていましたね。
確か、このまま何もしなかったら佐天さんが蹴られてミコちゃんが
報復。みんながレールガンの威力に驚いてお終い、てな流れのはず
です。

面白くないですね

主に佐天さんが痛い目に会ったところが

御坂「じゃ、私と初春さんが」

佐天「私も行きます！」

槻「私も行くわ」

美琴「……分かった、手分けして探しましょう」

年上がいるのに偉そうですね。

ま、それでこそミコちゃんですから咎めませんが

槻（さて、原作介入のリハーサルと洒落込みますか）

私の右目が薄らと赤みを帯びたことに、誰も気付かない。

九話、強盗さん、もう少し冷静に行動したらどうですか？（後書き）

因みに強盗Dと名付けた理由はデブだからです。

デブ = debug = D

ってな感じでw

感想を書いていただいた陽気な凡人様、ありがとうございました！
では、次回もあなたの目の留まりますように

十話、もし刃物を向けるのなら、それで刺される覚悟を持ってからにしましょう

……戦闘ではなく、駆け引きで戦ってますね

でも戦おうとするとアレイスターの目が気になるし

かと言って手加減して早々に一死するのは早すぎるし……

筆が進みません………

十話」もし刃物を向けるのなら、それで刺される覚悟を持ってからにしましょう

槻（まずやることは男の子をすぐに見つけること）

男の子を確保できれば佐天さんが犯人と接触することは無くなりま
す。これならば蹴られる可能性は皆無となるでしょう。なので急い
で背の低い木……………植え込みでしたっけ？……………の下を重点的
に調べます。

幸い年上権限で一人自由行動が許されているので、強盗の逃走用車
両の周辺を探しています。

槻（確か街路樹の陰に隠れて……………）

あ、いました。

爆発に驚いて街路樹の下に隠れていたようです。

槻「男の子はっけーん！」

背中越しに後ろの御坂たちに声をかけます

みんなが集まってくる間に男の子を保護してしまえばおし

佐天「片桐さん、危ない！！」

全力で飛び込み前転をしてすぐ振り向きます。どうやら強盗が襲っ
てきたようです。

……………飛び込み前転って意外と回避に役立つ有用な技なんですよ？簡
単ですし

強盗「チッ、まあいい。動くな！！」

槻（あ……………しまった！）

飛び込みすぎましたね。

男の子から離れる形、そして逃走用の車に向かって回避してしまったので、強盗Ｔに人質にされてしまいました。

現在強盗Ｔはしゃがんでいて、右手でカバンと男の子の手を、左手で持っていたナイフを持って威嚇しています。

槻（面倒ですね……………ですが）

私としては兎戯に等しいですね

チラッと白井さんの方を見ると、発火能力者の拘束は終了しているようです。

ならばやることは単純明快！

強盗の警告を無視して、立ちます

「「「「！？」「「「「

強盗Ｔ「なっ……………動くなと言っているだろ！」

槻「その前に、あなたは今していることの意味を知っているのですか？」

軽く説教タ〜イムとしましょう。

冷たい声で話しながら強盗に近づきます

槻「人質がいれば自分は安全？脅せば思い通りになる？そんな安易な考えで刃物おもちゃを振り回すのは感心しませんよ？」

一歩

槻「人に刃物を向けるのなら、せめて殺される覚悟が出来てからにしてほしいものです。学園都市の皆さんは、人を傷つけることに罪悪感がなさすぎですよ……」

ため息交じりに呟き

また一歩

強盗「く、来るな……来るな！本当にこいつを」

槻「傷つけることが出来ますか？出来るのならどうぞ」

強盗「なっ！！」

ようやく強盗「」が立ちあがりました。後ずさるには立たないと難しいですからね。

槻「私には出来ませんね。傷つけたら刑は重くなりますし、傷つけられる覚悟がありません。そして私はヒーローではないので全てを助けることは出来ません。」

チートではありますが……ね？

そして、私は強盗Ｔに手を伸ばせば届くほど接近しました。

槻「なので私は手を出しません。よって」

槻（複製！^{レプリカ}）

次の瞬間、私はアカシックレコードで強化した【複製貼付】で人体と同じ硬度の直方体を作りだし、それをナイフに刺させました。それと同時にナイフの柄を蹴り飛ばして遠くへ飛ばします。

槻「足は出させてもらいます。……白井さん！」

白井「っ！」

私の声に反応した白井さんのドロップキックが強盗Ｔの顔面に入りました。バランスを崩した強盗Ｔから男の子を奪還。

槻「何かをするのなら、相応の覚悟を決めてからにしないで」 ポソッ

誰にも聞こえないような声で、呟いてみました。

槻「ふう……終了」エンド

用事が済みましたのでアカシックレコードとの接続を終了します。
空衣に入れている手鏡をポケットから取り出して、目が元に戻った
ことを確認します。

槻「赤のカラコン、買った方がいいかしら？」

アカシックレコードで能力を強化している時は目が薄らと赤くなります。どうやら脳にかかる負荷を軽減する代わり、目の方に負荷がかかる仕組みになっているようです。
それならもっと赤くなりそうなのですが、気にしたら負けな気がします……

そう言えば修行している時に分かったのですが、情報検索と能力強化では接続方法が異なるようです。無視できるのですが、その場合脳への負担が結構なものになるので、命令を別々に作ることにしました。

情報検索の時は接続、アクセス終了、カット質問、インスペクトリザルト答え。
能力強化の時は準備、レディレプリカ複製、エンド終了。

丸二日かかってしまいましたが、負担は結構軽減されました。

辺りはあかね色に染まりそうで
もうすぐ夕方の時間帯になりそうな頃

私は銀行の消火活動に参加してました。
人手が足りないと言うことで暇つぶしにやってみたのですが、想像
以上に疲れました。
溜息をつきながら広場の柵に座ります。

？「あ、おねえちゃん！」

トテトテと私が助けた男の子が走ってきます。その後ろから母親らしき女性も歩いてきています。

……結果的に助けましたが、他人なので割と本気で見捨てていました。

憧れてもらっても困るのですが

母「本当に、ありがとうございました！」

槻「いえ、当然のことをしたまでです。気にしないでください」

社交辞令は叩きこまれましたからね、これくらいは言えます

母「そんな、何とお礼を言っていていいか……。ほら、あなたも」

男の子「おねえちゃんありがとう！」

佐天さんは少し笑っただけですが、私はきちんと言葉を残しましょ

うか

槻「どういたしまして。

次会うまでには、おねえちゃんに負けなくらい強くなってるね」

男の子「うん！」

風紀委員の仕事が終わったのか、白井さんと初春さんが銀行から出てきた。

それを見計らってミコちゃんのところへ集まったのですが、

白井「槻さん！なぜあのような危険な行動をとったんですの！」

白井さん、絶賛絶叫中です。

少しは年上を敬うことをしたらどうですか？

まあ、今回は私が全面的に悪いので仕方ないですが……

槻「私が一般学生だから。それじゃ不満ですか？」

白井「理由にも根拠にもなってますの！」

槻「一応理由にはなるんですが、端折り過ぎましたね。

……では、半年前と同じようにおさらいをしましょうか」

それを聞いて白井さんは少し身構え、それ以外は首をかしげる。

初春「あの、半年前って？」

白井「初春、強盗にボコボコにされながらも人質であるあなたを救ってくださった女性に覚えは？」

言葉に棘があるのはご愛敬なんでしょうか？

気にしないので別にいいのですが

初春「覚えてますよー！ってあの時のおねえさん！？」

槻「お久しぶりです」

御坂「ねえ、まずあんたの自己紹介が先じゃない？こっちは名前しか知らないんだけど」

流石傲慢ミコちゃん！話の流れを容赦なく切りますね

……とはいえ、これは少々溜息ものです

槻「……常盤台中学では言葉遣いを習わないのですか？」

御坂「ちよっ！………どついう意味よー！」

槻「では、改めて自己紹介「無視すな」！」「うるさいですよ」「ゴ
ン！」

御坂「痛っ~~~~！」

愛の鞭です。私は甘やかしたりしません

ミコちゃんが放電してますが、放っておきます。

槻「人の話は最後まで聞きましょう。では、私は片桐槻と申します。なぎさ学園高等部二年。趣味は読書と運動。能力は【複製貼付】のレベル2。以後、よろしく願います。」

御坂「私は御坂美琴。常盤台中学の2年で能力はレベル5、【超電磁砲】よ」

初春「風紀委員177支部の初春飾りです!」

佐天「初春とクラスメイトの佐天涙子です。よろしくお願いします」

ミコちゃん是不機嫌そうに、初春さんと佐天さんは少々緊張気味に自己紹介。

……レベルが低い方が社会勉強出来てるってどういうことでしょうね
原作知識があつて初めて気がつくこの違和感。……どうでもいいですね

白井「それでは、つつがなく自己紹介が終わったところで、お話ししてもらいましょうか」

面倒の一言で一蹴したいですが、放っておくとさらに面倒なことになりそうです。
仕方ないですね

槻「どこから聞きたいですか?」

白井「強盗の警告を無視したところからです」

槻「まず強盗は男の子に合わせてしゃがんでいます。強引に首を締めながら吊るして脅した方が効果的なのにあえてそうしたと言うことは、少なくとも最低限無傷で男の子を解放するつもりだと解釈できます。」

そして強盗の目的はお金だけであるためか、周囲をむやみに傷つけることに抵抗があったようです。現に私を攻撃した時もあまり力を入れて無かったようです……

最後にナイフの根元に少しだけ錆が確認できました。これはナイフの扱いに慣れていないのと同義です。

よって、警告を無視しても男の子が傷つけられる可能性が極めて低いと推測できたので立ちあがりました。」

佐天 初春「……………」

その二人、啞然としてますね。まあ、理由なんて全部後付けなんですけどね。

槻「……他には？」

白井「なぜ強盗に接近するような危険なまねを？」

槻「私に注意を向けさせて強盗の視野を狭める必要がありました。白井さんや御坂さんが行動を起こしても気づかれないように、そして少しずつ余裕を奪いつつ、暴走させないまでの余裕を残す。そのためにあえて冷静すぎる言葉で説教するのは少々骨が折れました。」

暴走しても責任を取らなければならぬという訳でもないから、なんて本音は言いません。

槻「他には？」

白井「強盗を無力化するためにとつた行動の一つ一つの理由をお聞かせ願いますの」

槻「私の能力で作った物質で、まずナイフの刃を全て無効化するためにそれを私が刺し込みました。強盗の片方の手はカバンと男の子で塞がっているため、この物質を取ることは不可能。よって斬る、と言うことを封じました。」

しかし、持っているだけでも鈍器になります。そこでナイフの柄を蹴り、強盗の手から蹴り飛ばしました。意外とここを正確に蹴ったり殴ったりすると、持っているもを手放させることが出来るのです。」

そして最後に白井さんを呼んだ理由。それが私が一般人だからです。」

佐天「え、どういうことですか？」

槻「私ならあの後、正拳突きで強盗をくの字に折り曲げさせ、かかと落として意識を狩り取るぐらいは出来ます。」

本当は空衣に入っている刃物で両腕を切り飛ばした後、頭を掴んでメラミ程度でも唱えれば終わるのですが、死体はマズいですからね。それに大前提として、先ほど申した『一般人』ですから

槻「ですが正当防衛とはいえ、暴行傷害の容疑がかけられます。おそらく無罪でしょうが、『容疑をかけられた』と言うことは事実です。それがこれから影響するかどうかは分かりませんが、少なくともこの半年は平穏な毎日とは過ごせないでしょう。」

それが、嫌だったからです。」

ということですよ。

逃げる手もあるのですが、ここでは目撃者が多すぎます。少なければ記憶の改ざん程度なら出来るのですが、アレイスターの目がありますし……。

槻「他に質問は？」

白井「それならば風紀委員に入っただけは何とかありますわよ？ 固法先輩に聞きましたが、お誘いをことごとく断っているそうで、なぜ風紀委員にこられないのですか？」

槻「風紀委員になれば確かに言い訳は楽です。ですが、自由な時間が減る、事後処理がある、責任と義務が課せられる、風紀委員に恨みを持つ人に襲われる等……。仕方ないとはいえ、リスクが高すぎます。なので私は風紀委員になるつもりはありません。」

何度も固法さんには言っているんですけどね。頻度は減りましたが、勧誘は受け続けています。

……白井さん、何難しい顔をしているんですか？
非常に嫌な予感がするのですが

白井「片桐さん、アボロン 肅清委員と言う言葉に聞き覚えは？」

槻「……神話関連？」

原作にはない、聞き覚えのない言葉ですね

白井「学園都市のアンチスキル、ジャッジメントで防げない、解決できない事件を一手に引き受ける機関と……言われていますの。」

槻（言われて、ですか）

御坂「どういうことよ？」

白井「お姉様、私たち風紀委員が扱う業務の中に、心臓が停止した方が関わるものは一切回ってきません」

佐天「それならいいじゃないですか。そんな大きな事件が起きてないってことでしょ？」

初春「……いいえ」

初春さんの顔が少し青いですね。……もしかして

佐天「初春？」

初春「正確な数は把握していませんが、その……」

槻「分かったわ、初春さん。それ以上は言わないで」

明らかに原作から外れた知識を彼女たちは持っているようです。
神の御手事件レベルアップが起きた後なら理解できなくもないですが、この状態は想定外です。
展開が早すぎですよ……

槻「白井さんと初春さんは知るには早すぎる物を見てしまった。……
いいわね」

ミコちゃんが聞いたら突貫すること間違いなしですからね。一応みんなに釘を刺しておきましょう
……人体実験で使われたものの破棄量なんて、ね
少し考えた後、私は警告を送る。

槻「これより肅清委員の話することを禁じます。話す場合は私がその場にいることを絶対条件とします」

流石にこの段階でこのメンバーを学園都市の闇に突っ込ませるのは危険すぎます。一般の常識では考えられないことが常識のあの世界は、私にとっても怖いです。

白井「……片桐さん？」

槻「異論は認めません。一応拘束力はありませんが、あなたなら禁ずる意味が分かるでしょう？」

意識していないにもかかわらず目が細くなります。

……初春さん、そこまで怖がらなくてもいいじゃないですか

槻「時間も時間なので私は帰らせていただきます。さようなら」

本当に、面倒な世界に入ってしまったね。

これでは私一人ではどうにかする、と言うスタンスを達成できない程この並行世界は歪んでしまっている可能性があります。

槻（……少々早いですが、あの人に会う必要がありますね）

淡々と歩く私

後ろから伸びてくる四つの影

はたして影たちは、物語通りに動いてくれるのでしょうか？

十話」もし刃物を向けるのなら、それで刺される覚悟を持ってからにしましょう

槻「あの、そろそろ私の口調決めていただけたか？」

………

槻「まだなんですね、分かりました」

だって！体は女、頭脳は男だよ！？
どう書けばいいんだよ！！

槻「逆切れですか？とりあえず乳酸菌をどうぞ」

ローゼンネタはいいから！
それで悩みが解決できたら苦労しないから！！
………ゴクゴク

槻「結局は飲むんですね。」

乳製品は好きだからね、それに渡されたものはきっちり返す！
これが俺のモットー
ってか話がそれてる気が……

槻「気のせいです。………そう言えば、あなたの執筆ペース、かなり遅くなってますか？」

それに関しては反論の余地がない
今までは書き溜めしてたから一週間に一回以上は更新出来てたんだ
が……

真面目に続きが書けん！

槻「気分転換にボタンでもどうです？」

……書いてみるか

載せるのは活動報告の所でいいよな？

槻「私に聞かれても困ります」

次回は10・5話ってな感じになると思います
それでは

十一話〜ラスボスは常に余裕を持っている者であるべきです〜（前書き）

ふ、筆が進まない！？

なので11、12話は番外編な感じで短いです……
カラオケイベント、入れたいなあ

十一話　ラスボスは常に余裕を持っている者であるべきです

Side out 第三者

とある病院の屋上。

忙しく騒がしい昼間と言うのに、ここは特別静かだと感じる。

そこに何かを眺めている人影が一つ。その人は持ってきた飲み物を口に運ぶ。

最後の一口だったらしく、置かれた紙コップを捨てようとゴミ箱に足を運び、そつと捨てた。

そんな場所に白衣を着た老人はいた。

カエル顔をした彼は、今週行う手術のカルテを見終わったところだった。『回復は不可能』『どうやっても無理』『無駄な手術』と言われるほど絶望的な状態の患者ばかりだ。

それでも彼はこう言う『生きてさえいれば必ず治してやる』と。そしてこれまで、全ての患者の病気や怪我を治してきた。

ヘブンキャンセラー
【冥土返し】

いつしか彼はそう呼ばれていた。

ガジャツ

休憩時間も少なくなつて、そろそろ診察室に戻ろうとした頃だった。ふと、音がした方へ視線を向けると

ボタン

？「こんにちは」

そこには、薄らと笑みを浮かべた黒髪の女の子がいた。

？「あなたは、冥土返しと呼ばれている方でしょうか？」

冥土返し「そうだけど、ここは関係者以外立ち入り禁止だよ？少しお行儀が悪いみたいだね」

やれやれ、といった感じに彼は答える。

？「そのことについては詫びます。ですが、どうしても聞いていただきたいお願いがあつたので」

冥土返し「お願い？この老いばれに出来ることは限られているよ？」

ここは病院だ。ならばお願いされることはひとつしかないと、彼は油断していた。

その願いは

？「単刀直入に言います。あなたが治療したこの学園の統括理事長、アレクスター・クロリーとお話がしたいのです。あなたの電話を借りたいのですが、よろしいでしょうか？」

彼の目を大きく開かせるのに十分なものだった。

この学園の理事長がアレクスターと言うこと
そのアレクスターを彼が治療したこと
アレクスターとのホットラインがあること

全てがトップシークレット級の情報である。
動揺しない訳がない

冥土返し「……………何故、君がそれを？」

対して彼女は透明な声で応答する。

？「知っている理由は、統括理事長と話したい理由に繋がるのでお答えできません。」

思惑が全く見えない表情と声。真意が見えない彼は思わず聞いた。

冥土返し「……君はいつたい何者だい？」

？「ただの能力稼ぎですよ」

少し気取った感じで彼女は言った

相変わらず透明な声であったが……………何のことだろうか？

S
i
d
e

o
u
t

E
n
d

槻「ただの能力稼ぎですよ」

自然と言ってしまいましたが

槻（なぜビバップのセリフを！？）

完全に無意識でした。ああ、こうやって厨二になっていくのですね、分かります……

ピリリリッ ピリリリッ

自己嫌悪しばらく浸っていたら、病院の中から内線らしき電話の音が聞こえてきました。

冥土返し「出ても構わないかい？」

槻「どうぞ」

道を譲ります。

私とて仕事の邪魔をするためにここにいる訳ではありません。言ったことに対してきちんとした答えが返ってくるのであれば、別に断られてもいいのです。彼には彼なりの信念がありますから、その場合は引き下がってもいいのです。

一応、断られた場合は手荒い方法になりますが、一方通行か幻想殺しを叩きのめせば嫌でも出てくるでしょう。

冥土返し「もしもし、……ああ、君か」

そこまでして私がアレイスターと話をしておきたかったのには理由があります。

まず、私は半年前に修行をしましたでしたが明らかに不十分です。学生的身分であることもあり、平日にアレイスターの目の届かない外に出ることは出来ませんし、かと言って中でやれば見付かってしまします。なのであえてこちらから一部の能力をバラして、干渉してこないようにお願いします。このとき大事なのはこちら側からバラすことです。これだけで信用しろとは言いませんが、こちら側に敵意がないことをアピールする、と言う意味があります。

そしてこれが本命で、アレイスターの方から干渉をなるべく減らしてもらおうようにお願いを

冥土返し「君」

……思考が中断されました
中途半端は好かないのですが……って、あら？
いつの間にか彼は受話機をこちらに差し出していました。

槻「何でしょう？」

冥土返し「……君に話があるそうだ」

槻「話、ですか？」

彼が名前を言わないのには意味があるのでしょうか。
別段何も考えずに受話器を受け取ります。

槻「どなたでしょうか？」

？『――ご希望の人物、
と言えは分かるかい？片桐槻』

電話から聞こえてくる声は

男にも

女にも

大人にも

子供に

聖人にも

囚人にも

どの声にも聞こえる不可思議な声。

槻「アレイスター……クローリー……」――――

スツと冥土返しに視線を投げるが首を振る。

……アレイスター自身が対話を望んだのですか!?

アレイスター『君は私と話がしたい、と言っていたね。なのでこちらから掛けさせてもらったよ』

槻「……………アンダーライン停滞回線、ですね」

アレイスター『おや?何だいそれは』

……思わず出た言葉で旗色が一気に悪くなりましたね。受話機の向こう側の声質が少し硬くなってます。最悪速攻で殺されますね

槻「……私はこの世界の並行世界から弾き出された者です。なので一定の未来を知っていますが、それだけです。」

アレイスター「……なるほど」

槻「幻想殺しの成長、一方通行の変異、虚数学区五行機関、エイワスなど、少しだけですがあなたの計画についても知っています。」

アレイスター「……ならば問う。学生に埋もれていれば普通に過ごせるこの世界。なぜ私との会話を望む？」

槻「私は超能力の他にこの世界ではイレギュラーな力を持っています。それを自分の庭で爆発されたら、排除するのは自然な流れと思いますが」

アレイスター「……つまり君が私に対して望むことは、こちらからの干渉を減らしてほしいという懇願、少しながら未来を変えていという自分勝手な願望の許容、といったところかい？」

槻「………はい」

いくら私でも、研究者の目をごまかしながら原作介入など出来ません。かといってこのスキルを封印したまま次の世界に進む気はありません。リスクは高いですが、アレイスターから直々にこちらに對しての、もしくはこちらからの干渉を制限してもらえば誤った方向に物語が進むのをある程度止めることが出来るはずです。

アレクスター『……ふむ。計画に乱入するイレギュラーである君は直ぐにでも排除すべきだが……』

だが？

アレクスター『実に興味深い』

次の言葉を、私は待ちます。

……この沈黙、十秒続くだけで寿命が10年縮むくらいつらいです
……

アレイスター『私の下にこないかい？』

来ました！

槻「もとよりそのつもりで………ですが」

首輪をつけられるのはごめんです

槻「束縛されると反抗したくなります」

要望ははっきり伝えておかないと後が面倒ですからね

アレイスター『……ふむ、いいだろう。君の仕事は月一回、君が知っている知識をレポートとして提出すること。これが私からの要求だ』

これで、ようやく全力で能力が使えます

アレイスター『異存はないね？』

十一話　ラスボスは常に余裕を持っている者であるべきです（後書き）

えー

活動報告で書いた通り

読ませていただいている小説の作者様方のお気に入り登録をしたんですが……

葵（仮）様からメッセージが届きました！

……すいません、嬉しいのですがどう反応したらいいか
そしてどう返信したらいいのか動揺してしまって

未だに返信出来てません……——————

この場所で感謝とお礼と謝辞と……

って何を言いたかったのか分からなくなってきました
とにかくありがとうございます！！

次も一週間以内に更新したいですね……

十二話　MPとTPと魔力と霊力とチャクラと……（前書き）

誠に勝手ながらしばらく更新を休みます

今さら単位が足りない！とか出席日数が足りない！とか卒業できない！とか言われたんで……

危機感？まったくありません

十二話　MPとTPと魔力と霊力とチャクラと……

アレイスターとの会話後、もう日は落ちて辺りは暗くなり始めてます。

私は今、ようやく自宅に帰ってきました。

ドサッ

槻「……………私が、玄関で、倒れこむ、とは……………」

疲れました。

非常に疲れました。

原因は一言で言えば緊張です。

ですが本当に寿命が縮んだと思うほど緊張するとは思えもしませんでした。

出来れば次がないことを祈ります

槻「……………シャワー……………」

精魂付き果てた体に活を入れて、モゾモゾと浴室に向かいます。

緊張による冷や汗で服がベタベタです。もう動きたくないのですが、不快です。

よって体を洗います

翌日、疲れが抜けきらず寝坊してしまいました。少々罪悪感がありますが、思い切って今日は学校を休みました。お昼に携帯で村上さんから質問攻めに遭いましたが、その日はのんびりと過ごさせていただきました。

つてなるはずなんですけど、何ですか？着信【アレイスター】つて？

アド交換してないんですが？……って、統括理事長の権限ですね、分かります

槻「もしもし」

アレイスター「やあ、ちよつとお祝いを、と思つてね」

槻「はあ」

一応協力関係なので必要以上に緊張することはありません。

……言葉使いには気を付けなければなりません

アレイスター「体調が万全なら、23学区のこれから言う場所に来てほしい。」

万全ではありませんが、来ました。理由はなんとなく、です。目の前にある建物は一見病院ですが、中身は空で何も無いそうです。いわゆる幽霊病棟でしょうか？

指定された場所はこの施設の地下にある部屋です。アレイスターの指示通りエレベーターに乗り、提示された暗号や数字を入力していき、やっと着いたところは広い部屋。

明かりはありますが、本当に何もない部屋です。

アレクスター曰く、ここでなら存分に暴れてもらっても構わないと
のことです。

理由を聞いても明確な答えは返ってこないのに、現場に来てみた訳
ですが………きちんと停滞回線は漂っているようですね。こちら
の実力を観察しておきたいのでしょうか？

まあ、こちらの手の内の全てを明かす訳にはいきませんが、修練場
として使わせていただきますでしょう

初っ端にやるようなものではないのですが

槻「……試してみましようか、【ユメノツツキ】」

構想だけ出来ているオリジナル呪文。詠唱がいまいち決まらない困

った呪文です。

……即興でUBWの詠唱にしましょう、ほぼ同じ固有結界ですし

槻「I am bone of my sword.（私の体は剣で出来ている）」

で、最後だけ変えます

槻「So as I pray, limitless dream works.（私はきつと、限らない夢の物語の中にいる）」

詠唱が終了すると共に、薄暗い図書館に場所が変わっています。

見渡す限り本棚と中に浮いている本しかない、戦闘とは無縁の空間ですがここは、完全に使いこなせばUBWよりも厄介な固有結界になります。

本当に使いこなせれば、ですが

槻「っ!！」

残念ながらもう魔力が尽きてしまい、めまいで膝をついてしまいました。

発動時間は7秒程度でしょうか？

槻「……………ふう、20秒は欲しいですね」

……そう、この固有結界を使用するには絶大な魔力が必要です。一般人レベルに留めてある私ではそもそも発動すら厳しいはずですが、そこはアカシックレコードと戦闘の極みと根性でどうにかしました。

主人公補正おてゆううあああああ！

電波を送ってきた者には必中の槍、グングニルを投げて差し上げました。

言い忘れていましたが、レベル4の【複製貼付】なら薬品から兵器、さらにFateの宝具やなんと食べ物すら作れます。

因みに食べ物は30分の時間制限が切れた時の喪失感が絶大なので、空腹を満たす為に食べることはおススメはしません

槻「次は……これにしましょう」

と言って空衣から出したのは収集記録。

さて、ここで問題。

先ほど固有結界【ユメノツツキ】によって魔力をすべて使い果たしてしまったのに、なぜ魔法を使うための物を出したのか？

答えはこれです

槻「氷柱、発射《頭を冷やさない!》、ヒヤド!」

槻「霰、氷柱化、発射《霜焼け程度で済めばいいわね》、ヒヤダルコ」

槻「吹雪、竜巻、冷凍、放て《吹雪の嵐に抱かれて凍れ》、ヒヤダイン」

槻「瞬冷、停止、生命、発散、始動《絶対零度の永久凍土にてその体、その魂と共に永遠の安息を》、マヒヤド」

魔力以外のものを使うために出したのです。

誤解を招きそうなので補足しておきますが、私の魔力は尽きてます。ですが、某クエストや某ファンタジーのMPは無くなっていません。つまり魔力とMPはこの世界では別であるようです。さっき使用した呪文でMPは尽きてしまいましたが、やろうと思えば霊力を使う。蒼火墜や次元刀、チャクラを使う豪火球の術や多重影分身の術、TPを使う魔人剣やレイジングミストなどもできます。

……なんてチートなんでしょう

チャクラや念に関しては少し勝手が違いますがそれを差し引いても異常です。

槻「次は……これね」

と言って空衣から一振りの刀を出し、収集記録をしまいます。

……これに関しては【複製貼付】で作る訳にはいかないので苦労しました。

そして今回初実験！

槻「それでは、いきます」

見る人が見れば何なのか分かるでしょう、この刀の正体

槻「軽やかに舞いなさい！浮翼！」
うきつば

一般的な刀が次の瞬間消え

右手にダイの大冒険で登場した手に着ける形のドラゴンキラーが装備されています。

そう、斬魄刀です。

完全オリジナルのもので、主にテイルズ系の技のためだけに作って
みたものです。

きちんと刀と会話もしましたし、アカシックレコードフル活用で望
みの能力を付加出来ました！

因みにやろつとおもえば正解できるのですが、霊力が足りません。

……………悔しいです！

~~~~~

槻「……………もう時間ですか」

完全下校時刻過ぎぐらいにセットしていたタイマーがなったようです。特に使用時間は制限されていませんが、ここで生活する訳にもいきません。

ただのお披露目になってしまいましたが、ヒヤド系呪文を全て放つてもビクともしない壁の強度を確認できただけでも良しとしましょう。

明日から放課後はここに通うことになるでしょうね  
楽しみです

十二話〱MPとTPと魔力と霊力とチャクラと……〱（後書き）

次回はバレンタイン企画でしょうかね？

リアルのごたごたが終わったら投稿しようかと思います

……それにしても筆がすすまねえ、なぜだ！？

十三話「紅茶を求めてデロ」ジャッジメントですの!」・・・えっ(前書き)

よ、ようやく投稿できる完成度になりました  
が、0.5話分の内容です・・・  
早くスランプ脱っしたいです!

十三話「紅茶を求めてデロ」ジャッジメントですの！」・・・え？

あの施設、もとい修練場に通い続けて数日が経ちました。

あれから結構な威力の呪文やオリジナル呪文を使ったのですが、一向に地下の壁には傷一つ付けられません。

まあ、ラグナブレードやカラミティウォール、燃える天空などはまだ使ってませんから、本気ではないと言えなくはないですが・・・

・・・え？なぜ壊したいか、ですか？

初日にマヒヤドを唱えたにもかかわらず壊れなかったからです。

もしここに閉じ込められてもしたらかなり無理をしなければならないので、その無理がどのくらいになるのか調べているところです。今のところ弱点らしきものは分からず、物質を変化させる魔法が一番有効の様です。ハガレンの錬金で壁の形を変えてしまうのが今のところ一番楽です。

捕まる可能性がゼロではありませんからね、暇つぶしにも一役買ってくれています。

・・・ですが対魔対物であってそれなりに強度がある物質。なんとなく予想は出来るのですが、もしそうだとすればこの地下は金の城と同じくらいの価値がありますよ？ま、まあ・・・そこはあえて突っ込みません。オリなんちゃらなんて神の金属で作られた地下なんて、ね？

それにしても、修練場には本当に何もありません。水道くらいあってもいいと思うのですが、椅子の一つもありません。

なので何回かはコンビニで水を買って行っていたのですが、面倒になってきたので今日は箱買いして空衣に入れています。

槻「以上、回想を終了します」

誰に言っているんでしょう？

まあ、とにかく現在は身体検査期間なので未だに午前中授業です。そして明日、ようやく私の能力測定があります。なので修練場行きはやめて、ミルクティーでも飲んでくつろぎたいと思っていました。ですが茶葉が切れていたのでデパートに行く途中

白井「あ、片桐さん。丁度よかったですの」

……エンカウントしてしまいました  
この後はもちろん

白井「お話がありますので、支部に来ていただきませんか？」

ですよー

……はあ

槻「ダージリンで沸騰したお湯に三分、砂糖はグラニュー糖10g、その後牛乳、量はカップの3分の1」

白井「到着と同時に何を仰っていますの？」

白井さんが177支部へ私を拉ち「ゲフンデフン」…まあ、到着してドアを開いた瞬間に私の要望を言っただけです

槻「ミルクティーの注文ですが、なにか？」

半ば強制連行されたのならば頼んでもいいと思います。

固法「ここはカフェじゃないのよ？茶葉まで指定されても用意できないわ」

槻「丁度茶葉を買いに行く途中にでしたので、少々気が立ってます」

初春「まさか……片桐さんはどこかのお嬢様なんですか！？」

初春さん、紅茶を嗜んでいるだけでお嬢様になれる人は居ないと思います

私とて、午後ティーの味を自分で作れないのか？という理由で嗜み始めたからですから

槻「とりあえず冗談はこれくらいにして、本題を早急にお願いします」

我が物顔でソファに座ります

普段の私なら断りを入れてから座るのですが非常事態です、緊急事態です、お怒りになっているのです！

白井「はあ……まあいいでしょう。お呼びしてまでお聞きになりたい用件は2つ。一つは、レベルアップと呼ばれるものについてなのですが」

そんな無礼講もどこ吹く風の第177支部。ゆるいですねえ

って、もうそんな時期ですか？案外早いですね

しらばつくれるのは苦手なので、少しでも情報を与えておきましょうか

槻「都市伝説と音楽ファイル、どっちのことでしょうか？」

固法「都市伝説の方のことなんだけど、音楽ファイルの話は聞かないわね・・・」

槻「ご存じないですか？又聞き之又聞きですが、聴くだけでレベルが上がる、能力が発現する、威力や精度が上がる音楽があるそうです。その曲名がレベルアップー。実物を持つている人がいないので本当かどうかは分かりませんが、信用に足るところからの情報です」

白井「にわかに信じがたい話ですわね」

槻「私としても、世間話程度に聞き流している程度なんで信じられなくてもかまいません。むしろ都市伝説通りの名の音楽ソフトにそんな噂が流れている、程度に認識してもらえればいいです」

あくまでも聞いた話

原作通りに話を進めたいので、共鳴感覚のことは言いませんし予言も出来ません。

最後の最後まで私は手を出すつもりはありませんからね

槻「で、レベルアップーのことで何かありましたか？」

白井「いえ、近頃妙な事件が多発しておりますの。今回のシステムスキャンで大幅に能力が向上した人たちが原因不明の昏睡状態に陥ったり、妙に向上した能力で自信過剰になられた方々がジャッジメントのお世話になったり、と検挙件数が激増してますの。おかげで書類が山積み・・・」

固法「だから手が足りないから片桐さんに手伝ってもら」「辞退します」……ケチ」

いや固法さん、口をとがらせる仕草は可愛いですが、ボソツと言っても聞こえてますよ？

ほら、白井さんもあきれてます

初春「ある言葉の件もありましたので、片桐先輩なら何かご存知かと思って」

生き字引のような使われ方ですよ？それ・・・

気にはしませんが、私の立ち位置はどこなんでしょうね？

せめて『頼れる先輩』レベルであることを祈ります・・・

槻「残念ながら先ほどの噂だけです。都市伝説の方はあまり知りませんし、音楽ソフトの方も情報源をたどるならそこそこの時間はかかってしまいますしね。・・・今私が提供できる情報はこれだけです」

白井「分りましたわ、それでは要件の二つ目……アボロン 肅清委員についての情報提供を」

ガシャン！

私は目の前のテーブルに頭を打ち付けてしまいました

片桐「し〜ら〜い〜く〜ろ〜こ〜〜〜〜！！」

白井「ひ、ひひはひはひほ！っへ、ひはい！ひはいへふわ！」

目のも止まらぬ速さで白井さんに近づいて、頬を思いつきり引つ張

つてぐにぐにします

人の話を聞いていたのでしょうかねえ、この子は？

片桐「その話をするのは私がいることが前提条件なだけです！むやみやたらその話をしてはいけません！！という意味だったのですが、どうやらうまく伝わっていなかったようですねえ」ニタア

白井「ひっ」

八つ当たりですね、認めます

でもやはり、きちんとお話することは大事だと思うんですよ  
あ、字が違いましたね

O H A N A S H I、でしたね♪

白井「……………」ピクピク

卷子さんの5割減まで手加減してあげました  
私って優しいですね！

初春「放っておいても大丈夫なんですか?！」

片桐「大丈夫ですよ。友人はもっとすごいO H A N A S H I  
をしていますから♪」

初春「・・・」ガクガクブルブル

ま、気は晴れたのでそろそろ本題に入りましょうか

片桐「さて、白井さんが聞いてきたということはあなた方もそれに調べているはずですよ。まずはそれから話ししていただきましょうか」

知らない単語ではありませんが  
変なことにはなっていないですよ？

十三話「紅茶を求めてデロ」ジャッジメントですよ!」・・・え?」(後書き)

槻「で?バレンタイン企画の時にしようとしたボルベイラの話は?」

いきなりそこですか・・・

あれは地味に痛いんで、うやむやにできませんか?

槻「・・・グニツと」ギユ

ぎゃ~~~~~!!

槻「作者の方は悶絶しているので、私が説明します

ボルベイラ、別名『作者殺し』、外見はテニスボール

本来物語の中から外、もしくは外から中への干渉は禁止されていますが

こいつは結構な回数無視してます

こちらにはこちらの思惑がありますし

何よりウザいので黙らせる為だけに作った宝具です

常時空衣の中にありまして、強く握ることで呪いが作者にかかります

『ダンスに足の小指をぶつけた』に代表される地味な痛みがしばらく続くので

しばらく何もできない状態になるものです」

さ、作者権限で対象は変えることはできなくしたが  
こんな強力な呪い、なぜ俺に?

槻「それではみなさん、また会いましょう」

無視すな！

って痛い！って待て待て待て待て！落ちつけて！！  
ぎゃ~~~~~！！

十四話　確かな情報がないのに、よく私を拉致してくれましたね（前書き）

ここに来ていないフラグを立てすぎたことに気がついた！！

そのつじつま合わせのせいで時間食ったな・・・

短いですが、どうぞ！

十四話、確かな情報がないのに、よく私を拉致してくれましたね、

槻「・・・なるほど、それは大変ですね」

丁度良い温度にまで冷めた紅茶を口にしながら感想を述べます  
一見くつろいでいるように見えますが

槻（厄介事を増やさないでください・・・）

心の中では抱えています・・・肅清委員なんて原作にはいませんでしたからね、厄介なものです  
とにかく話の内容を要約すると以下になります

初めは佐天さんがよくアクセスする都市伝説情報サイトの掲示板に肅清委員の名前を見かけたことが発端

風紀委員を名乗る者としては放っておけない白井さんが初春さんと調査開始

案の定、書類でも書庫でもそんな団体は確認できなかったが、妙な情報が入ってきた

人が死んだ場合、特別な訓練を受けた警備員のみが事態を収拾だが、絶対数が足りないためどうしても外部に頼らざるを得ない

ことが多々ある

その依頼先を警備員は『肅清委員』、または『アポロン』と呼ぶ  
この呼び名が外部に漏れ、肅清委員＝残虐というイメージが独り  
歩き

そこから裏の仕事を一手に引き受ける集団がいる、という都市伝  
説となった様子

肅清委員の情報を集めている最中に、研究施設のごみの中身から  
人骨が出てきたという報告書があった

内容から考えて、ほぼ確実に暗部にかかわる集団ですね  
この時期から関わらなければならぬとは・・・  
アレイスターとの接触で確実とは思っていましたが、早すぎません  
か？

白井「なるほどって・・・片桐先輩、この事態を『大変ですね』の  
一言で片づけてしまわれますの!？」

槻「私は『そんな集団があったのですか、驚きです』以外の感想を  
持ち合わせていません

何をそんなにあわてているのですか？」

呆れ半分、驚き半分で白井さんが興奮していますが、私は結構真剣

に聞いています  
だって

槻「肅清委員の不確定情報しかない状況で、なぜ焦っているのですか？」

白井「それよりも、人知れず殺されている方々がいらっしやるかもしれないよ？」

・・・やっちまいましたね

ときどき相手の話したい内容を汲んであげることが出来ないんですよ

私は肅清委員の話だと思ったのですが、どうやら最後に挙げた情報の話に切り替わっています

でも、私としてはそれさえもどつでもいい

槻「人骨が出てきた程度でそこまで大げさに捉える必要はありません。」

DNA情報消去法の廃棄物とも考えられるのですよ？  
それに、最悪肅清委員が対処するでしょうし」

白井「……なぜそこまで樂觀的になれるんですの？」

ふと顔を上げると、白井さんがすごい形相でにらんでいています

槻（なぜかって、あちら側は変なことをしない限り干渉はしてきませんし、アレイスターと協定結んでますから）

などと言うことができたらどれだけ楽なことか・・・  
持ち前のポーカーフェイスで誤魔化してはいますが、どうしましょ

ピリリリリッ、ピリリリリッ

私の携帯ですね。さて、だれから……

槻「……ですよね」ハア

初春「どうかしたんですか？」

槻「少し、席をはずしますね」

若干の頭痛を抱えながら、私は外に出ます。

ピッ

『非常に面白そうなことになっているね』

「用件をどうぞ」

心でため息をつきながら、電話応対をします

はい、アレイスターさんからです。こんなに電話を多用する人でし  
たっけ？

逆探知なんて無理でしょうけど、こんなに頻繁に個人向けに電話し  
てもいいんでしょうか？

『こちらから連絡を入れた・・・その意味を十分にくみ取ってくれ』

きつちり停滞回線で見えましたか・・・

白井さんたちが知ったのはまだ氷山の一角の欠片程度ですが、い  
れこちら側の人間と敵対することが決まっている人たちです  
それが早まるのは少々まずいですね

「……始末書は書きたくないです」

善処はしますよ、という意味をこめて曖昧に返します。

ポイントは曖昧なところですね。いざという時に言い逃れができ・  
・ますかね？

『そうか、なら何も言っまい』

そう言い残して電話は切れました

携帯を閉じて、少し体をほぐします。椅子に座ったの事情聴取や上司の機嫌取りは肩が凝りますね・・・  
いつになったら紅茶を買いに行けるのでしょうか？

槻（ま、原作通り進むように頑張りましょうか！）

解放されたら必ず白井さんをタクシー代わりに使うことを、割と固く決心して戦場に戻ります

十四話、確かな情報がないのに、よく私を拉致してくれましたね。(後書き)

今回はキリがいいので、総合評価100pt突破記念でも書くつもりです

で、アンケートを取りたいと思います!!  
ズバリ質問の内容です

ありすぎだボケエという方は私が困りそうな量でもかまいませんのでガンガン送ってきてください!!  
メッセージボックスでも感想でも好きな場所に送ってください  
送ってくれた方にはもちろん片桐槻製「作者殺し(ボルベイラ)」を差し上げます。説明書も同封するので、作者に仕返ししたい主人公の方々も一度使ってみては?

槻「私の許可は?」

もちろん無視

槻「よし、一時間ほど握ってあげましょう」

ちよ!?

槻「アンケートの期限については一週間後を予定しています。

それでは皆さん、ご意見ご感想。ついでにアンケートのご協力、  
お願いします。」

十五話〜レベル5！？何かの間違いでは・・・？}（前書き）

社会人になって初の投稿！

これから一か月に一回の更新になりそうです・・・

十五話〜レベル5！？何かの間違いでは・・・？

今日は待ちに待ったシステムスキャン身体検査。

昨日、きちんと白井さんにはタクシーになって頂いたので、無事紅茶も買えましたし体調も良好です。

「それでは片桐槻さん、よろしくお願いします」

槻「こちらこそ、お願いします」

私は今、周りをコンクリートで固めただけの殺風景な部屋の中にいます。

スピーカーから聞こえてくる声から察するに相手は男性のようです。

「今回は金属を出してください。形状や質量、出現速度で評価します。それではお願いします」

槻「・・・はい」

さて、どの程度本気になりましょうか・・・

……実は、アレイスターから『本気を出してね?』的なことを言われているので、何をするのか迷っています。

いつでもアカシックレコードに接続はできるのですが、目がほんのり赤くなることに気づかれましたし……かと言って魔法なんかを混ぜるのもどうかと思いますし……

槻（……空衣の中身を使いますか）

現在、空衣の中に収めているものは食糧から書籍、アンティークもどきの食器など結構な魔窟になってます。アカシックレコードにも記載されていましたが、空衣の中では時間が止まっているので複製貼付で作った武具を保存できるのです。

そうですね……今回はあの大きな刀を出すとしみましょう。

刀を背中に背負っている感覚で、

何かを片手で握ってスラッと刀を抜くように前に振り抜きます。

ブウン!

槻「おっととととと!」

とつさに両手で持ちました。やっぱり、重いですね

片手で持つようなものじゃないです。ま、元々人間が持つことは想定していませんしね。

『寧々切丸』

正式な名は「山金造波文蛭巻大太刀<sup>やまがねつくりはもんひるまきのおおたち</sup>」。実際する刀です。

全長が3・4 m、重量が22・5 kg

伝説では「ねね」と呼ばれる妖怪を刀自身が動いて倒して来たとか言う、少し恐い刀。

ま、私にかかれば自動防御用の武器に早変わり！抜刀の動作の意味は・・・ノリですかね？  
でも自動防御には魔力が必要なので、今は両手で持たねばなりません g

|         |        |
|---------|--------|
| 『能力発動速度 | 0.07秒  |
| 分子構成再現率 | 100%   |
| 想定質量再現率 | 100%   |
| 総重量     | 22.5kg |

総合評価、Level 5』

槻「・・・は？」

30分後には消えちゃうんですけど・・・

それから一時間後……

そろそろお昼ごはんを食べたいと思っていた頃

槻「えっと、すみません。状況を誰か説明していただけませんか？」

不良A「生意気なお嬢さんがスキルアウトに囲まれています。

そしてこれから行われるのはお嬢さんのストリップシヨオ  
オオオオーーーー！！」

解説ありがとうございます。

ただいま五人のスキルアウト（らしき人たち）に囲まれていて、絶  
体絶命です。

きゃー（棒読み）

槻「まさか能力者狩りの対象となろうとは・・・地味にショックで  
すね」

不良B「あん？まさかお前、無能力者か？」

槻「嘘を言えばイエス。真実を言えばレベル2です。ですが計器の  
故障でレベル5認定された者です。」

何かの間違いだと思つて再検査を依頼したところ、やはり計器に不  
具合があつたようです。

ですが部品の交換が必要だつたようで、また明日来なければならな  
いとのこと。

その帰ります。

不良B「スゲエ！俺らレベル5様のストリップを見られんのかあ！  
？」

不良C「そしてえ？」

不良D「大人の階段駆け上がるうううううううううう」

不良E「君はもう×××××××× - - - ! - - - ! - - - ! !」

フヨフヨフヨフヨ……スタッツ

面倒なのでスルーします。歩くと足音ではれるので、武空術でビルの屋上まで浮いてきました。

まだあまり速度が出ないのでゆっくりだったんですが、なんとか離脱できたようです。

あんまり下ネタは好きじゃないんで……

「オイオイ、何普通に空を飛んでいるんだい？」

規  
「  
つ  
!!  
」

その声を背に受けた私を感じたものは  
嫌悪感

すぐに振り向いてアカシックレコードに接続！  
したので、

規  
(  
・  
・  
・  
はい?  
)

・・・ちよつと失礼ですが、私はその人を見て少し目をしかめます。

規（あの、修験者さんが何か御用ですか？）

白い衣に（死装束？）黄色いちゃんちゃんこ＋白い綿毛（どう表現すればいいんでしょう？）という服装の男性が立っていました。ぱつと見、山伏や修験者を連想するのですが、なぜ学園都市に？

・・・今日はいろいろな意味で大変になりそうです。  
そんな予感がします

十五話〜レベル5！？何かの間違いでは・・・？}（後書き）

ボタンが書けない

続きも書けない

溜まっていく構想の山・・・

申し訳なさでいっぱいだあ！！

十六話　予感は外れましたが、とりあえずにげましょう（前書き）

.....

槻「作者は昨日飲みすぎてダウンしたようです

ま、私には関係ないのでさっさとはじめましょうか」

.....し、死ぬる・・・ガクッ

十六話　予感は外れましたが、とりあえずにげましょう

そつえばこの男性、顔が田中栄太に似ていますね  
赤髪赤眼のクラスメイトで、細目のがっしりした人  
ま、それは置いておきまして

槻「すみません、コスプレでしょうか？」

修験者？「んな！？」ズルッ

まずはボケで先制攻撃です。

……取り合えず話が通じそうですね。

これで無反応だったらアレイスターに電話しなければなりませんし

修験者？「あゝ、もういい。興が削がれた。どっか行け」

槻「いえいえ、証明書がなければ排除しないといけないので」

ちやつかり仕事を増やしてくるアレイスターさん……

『目の届く範囲で不審者（魔術関係者）に忠告しておいてね』と言  
ってましたね

今度増やしたら材料の調達を手伝ってもらいましょうかね？

つと、話がそれました。

修験者？「そつか。だが一応上には話を通してある。滞在には問題  
ないはずだよ」

ふむ、そう言われますと何も言えなくなりますね。

と言うより、服装からして魔術側の人間らしいので下手に手を出せ

ません。この時点で第三次世界大戦なんて不味いにもほどはあるでしょう・・・

ここは見なかったことにして、ゲーセンにでも行きましょうか

槻「それは失礼しました。では」

会釈をして修験者(?)さんの後ろにある非常ドアに向かいます。  
さて、久々にメルブラでもしましょうかね?

修験者? 「うーん、変だなあ

君からは何か漏れ出しているように見えるのだが・・・  
どう思う? 」

ただ単なる問いかけだったのでしょうか  
ですが私には他の意図もあるように聞こえます。

魔術関係者だろ? と、

すぐさま右に飛び、勢いを殺さずにそのまま

修験者？「ちよつと話を・・・って!？」

ビルから飛び降ります

・・・話だったら、飛び降りる必要はありませんでしたね  
まあ念には念を、と言つことで

S i d e o u t 修験者(?)

時間は少しさかのぼる

俺は、今の世の中が気に入らねえ

フッー・・・フッー

スゾゾッ

科学なんて、残酷な現実を突き付けるだけじゃねえか

全てを数値化して結果だけしか見ねえお堅いやつらを、なんで皆信じるんだろうなあ

数式？公式？法則？現象？

そんなの勝手に人間が決めただけじゃねえか！

ま、そんな絶対の基準がなければ不安になるのも日本人の性かあ

ああ、帰ってえ

フッー・・・フッー

スゾゾッ

本部から「学園都市の秘密を見つけてこい」なんて言われて来てみたけど、予想以上に難しいぜ？

ぶつちやけ言つと、学園都市内部の人間のガイド無しじゃどうにもならん

ここに来た瞬間に学園都市のトップから呼び出し食らったり、試しにゲームのプログラムを解析しようとしたけどチンパンカンパンだったり・・・

伊達に『表と科学技術が30年違う』なんて言われてないよなあ  
クソ、何なんだよここは？摩訶不思議世界だよ、ホントにさ・・・  
学生が最低限できるものでさえ俺にはできねえんだからな

フッー  
スゾゾッ

ま、この服装でネタには困らねえから話は弾むんだが、いかんせん金がない  
アレいなんとかって人がお金を貸してくれてるから、なんとかなってるが・・・

ゴクッ、ゴクッ

俺「あゝ、うまかった。体に悪いのは分かってるんだが、背に腹は代えられないんだよなあ」

今食べ終わったのはインスタントのカップ麺だ

このビルの一階でお湯を分けてもらって、屋上まで運んできた  
まだ仕事してる人がいたんでね、邪魔しないようにってことで

俺「あーどうしよっかな」

ゴロン、と寝転がって空を見上げる

情報は濡れ手に粟状態。だけどその粟が何なのかがわからない  
・・・適当にゲームのデータ引っ張ってきて帰ろっかな？

？「－－－－シヨーーーー！！！」

ん？路地に誰がいるのか？

・・・そういえば、近頃路地で昼食を食べてるとよく学生に襲われる  
超能力がどうか、レベルなんとかを使ったとかゴチャゴチャ言う  
やつらだったなあ

五月蠅いから俺の魂でボコボコにしたけど、あいつらおかしかった

よなあ

なんか頭から糸が出ててさ、それが四方八方に伸びていたっけ？

修験者（？）」「どこらせつと・・・ま、関係ないか」

体を起こして結論！どうせ出来る事って何もないし

興味本位でさっき叫び声が聞こえた方へ行こう立ち上がった時

フヨフヨフヨフヨ……スタッ

ふう、とため息をついた女の子が浮いてきた

俺「オイオイ、何普通に空を飛んでいるんだい？」

ちょっと苛立った感じの声をかけてみた。

いや、そう言っただけで自分が感じているプレッシャーを誤魔化そうとしたんだよなあ

さっき言ったように、俺には普通では見えないものが見える。それは何かの力。

これは魔力である場合もあるから、初めて会った奴の力量を測るときに重宝する

・・・稀に完全に遮断してるやつもいたっけな

女の子「っ！！」バッ

勢いよく振り向く女の子

あらら、左目に眼帯をしているのか

なかなかきれいな顔なのに、残念だ・・・って何を考えてるんだ？

まあそれは置いておいて、彼女はこの服を見て顔をしかめたけど、警戒は解いてないようだな

それでも俺の視界に変化はないってば、彼女は気が付いていないということか

俺（視界を埋め尽くすレベルの「気」か・・・ヤベエ、手汗も冷や汗も半端ねえわ）

俺らが使う「気」とは別の、いろんな色が混ざってんなあ・・・って何だ？あの太い縄のような「気」は？

・・・まあいい。じっくり見たところ、一つ一つの色の量は俺よりも少ないんだろぅが全部混ざってるこの灰色の「気」はマズい、マジで敵対とかしたくない

女の子「すいません、コスプレでしょうか？」

俺「んな！？」「ズルッ

・・・一気に肩の力が抜けたんだが？ま、使えなきゃどうってことないか

俺「あゝ、もういい。興が削がれた。どっか行け」

女の子「いえいえ、証明書がなければ排除しないといけないので」

面倒だなあ。書類関係はかさむからホテルに預けてあるから証明書がない

・・・ちよつと屁理屈こねてみるか！

俺「そつか。だが一応上には話を通してある。滞在には問題ないはずだよ」

一応アレイなんとかって奴に許可は取ったんだ。問題ないはずだろ？

女の子「それは失礼しました。では」

スツと女の子は去ろうとする。

・・・うん、やっぱり疑問は聞いておくべきかな？  
出来るだけ遠まわしに

俺「うーん、変だなあ

君からは何か漏れ出しているように見えるのだが・・・どう思う？

ちよつと話を・・・って!？」

飛び降り自殺!？」

急いで飛び降りた場所に行つて下を覗いたんだが  
・・・ってどこにもいない!？」

俺「逃げたってことは、こちら側に関係してる人間か？」

まあ、ぐだぐだ考えても仕方ない  
さっさと情報収集に行きましょうか

十六話　予感は外れましたが、とりあえずにげましょう（後書き）

ふつかーっ!!

槻「では」カリカリ

ん？何してるの？

槻「まず紙を用意しまして、このように書きます  
読んでみます？」

おう。

なになに？

強さ、床にバウンドさせる程度  
効果、同等の衝撃をランダムで与える  
・・・なんだか嫌な予感が

槻「次にこの紙をテニスボールで包みます」

ん？そのテニスボール、どこかで見たような・・・

槻「しばらくするとあら不思議、文字が消えています！」

おおーマジックか  
どんな種だ？

槻「それでは、このテニスボールを地面にたたきつけてください」

よしー！思いつきり・・・

槻「因みにそれはボルベイラです」

あだああああ！！

槻「以上がボルベイラのバージョナップ、機能拡張です

一応因果逆転の理の呪いをかけているので、結構強くなりました」

つてかバウンドするたびっ！痛さがいん！！

槻「ま、そこは自業自得ってことで」

十七話〜どっちら、しばらくレベル5として扱われるようです〜（前書き）

見切り発車感が否めないけど、とりあえず投下  
うーん、ゆっくり考える時間が欲しい……  
もっと長く書きたあ〜い！

十七話ぐどつやら、しばらくレベル5として扱われるようです。

槻（なんとか誤魔化せたようですね）

ただいま向かい側の建物に避難しています

自殺するつもりはありませんので、武空術で少し補正して窓から入らせていただきました

原作通りに話を進めたいですからね、慎重に行動するのは基本です

槻（では、ゲーセンにいきま

ピリリリッ、ピリリリッ

ピッ

槻「ただいまストレスが溜まっています。疲れています。

御用の際は機嫌をとってください」

ブツッ

ピリリリッ、ピリリ、ピッ

槻「……………」

アレイスター「こちらに来てほしい。返事は？」

槻「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「諾」

ピッ

忙しいですね・・・・・・・・ハア

私が呼ばれる場所は、例の逆さま人間のいる場所ではありません  
修練場のことです  
一応防音は完璧とのもので、面倒なお話がある際はここで電話を  
することにしています

・・・そういえば、まだ直接対面していませんね

槻「で、暫定的にああした、と？」

アレキスター『君の力はあちら側にとっても脅威だ。表立って庇うには相応の理由がある。』

だがあいにく席が用意できなくてね。次の定期検査までレベル5候補として扱うことにした、という訳だ』

そうですね

学園都市製の計器が本番で故障なんてありえませんか

・・・この人が手を回していたようです

アレキスター『だから次の定期検査、システムスキャン9月まで君はレベル5として扱われる。面倒事は増えるだろうが、よろしく頼むよ？』

槻「了解です。それでは失礼します」

電話を切り、少し考えます

槻「……そういえば序列はどうなるんでしょうか？」

ミコちゃんは確か第三位とか、アクセルさんは第一位とかのアレ。まあ、プランに関わる重要なファクターか否かの順だと思えますけどあ……このことがミコちゃんに知られたら「勝負よ！」とか行っつきそうで怖いです。

いや、余裕で勝てますけど怖いじゃないですか！

電流とか、砂鉄のチェーンソーとか……

槻「今日はその対策を考えるとしましょうか」

まずは砂鉄のチェンソーから……

十七話ぐどつやら、しばらくレベル5として扱われるようです。(後書き)

「諾」は承諾したって意味で書いてみました  
どうですかね？

次回は脱ぎおん……じゃなくて木山せんせの登場の予定  
あくまで予定！

ああ、マジで時間が欲しい・・・

十八話　〱 厚着派と薄着派……何か違う気がします〱（前書き）

うーん、予定していたネタが半分も出せないとはねえ  
しかも全体的にチグハグ感と違和感が・・・

まあ、いいか。とりあえず投下あ！！

十八話　厚着派と薄着派……何か違う気がします」

謎の修験者登場が数日経ちました。

測定機械の部品発注に時間がかかるということで、表向きにはレベル2、実質的にはレベル5になったと通知がありました。

予定通りですね……と言うよりも、そんないい加減なものでレベル5になってもいいのでしょうか？

聞いてみたところ

「測定記録が残ってしまっているので、それを上書きするためのデータがなければシステム上どうしようもできないのですよ」

と言われました。

面倒なので書庫<sup>バンク</sup>ごと破壊しようとはこれっぽっちも考えませんよ？  
まあ、あらずじはこれくらいにして、現在の気持ちでも吐き出してみましようか

槻「暑い……」

今は夏休みに入り、そろそろアイスに手を出したくなるこの頃  
私は冬服のまま町を歩いています

非常にだるくて暑いのですが、ポケットの数が減ってしまうのは嫌  
なのです。

なぜなら、パツと出せる物の数が減ってしまうから！

……セカンドバッグを持てという意見は却下します。昔何度も置き

忘れてしまったので

槻「暑い・・・って、え」？」

目の前には、見覚えのある女性が途方に暮れています

？「しまった・・・元の場所にすら戻れないとは・・・」

この女性に声をかけたんですかカミジヨウさん？

確かに困ってそうですが、普通なら素通りしてしまいますよ？

暇ですし、初見フラグとやらを立ててみましょうか

槻「あの、どうかしましたか？」

そういえば何気なくダラダラと歩いていましたが、なだらかな坂と街路樹がある時点でこのエンカウントは必然だったようですね。

？「ああ、実は車を止めた駐車場がどこだか分からなくなってしまつてね。」

槻「もしよければお力になりましょうか？」

？「いいのかい？」

槻「いいですよ。それでは、周りに目立つ物とか、目印になるようなものとか覚えていませんか？」

茶色でウェーブのかかった髪の毛、半開きの目に隈を作った女性。

……起伏が乏しいと言う割に、総合的なスタイルはいいと思うんですけどね。

？「目印か・・・目の前に横断歩道があつたなあ・・・」

槻「それだけだと、特定が難しいですね・・・この辺の駐車場をしらみ潰しに探すしかないのですが」

携帯を取り出して周辺の地図を探します。直ぐに見つかりましたが、もう少し拡大した地図が欲しいですね

？「ふう・・・それにしても暑いなあ」

槻「今のところ五か所ですね。直ぐにいきましょ！？」

目当てのものがすぐに見つかったので、彼女に知らせるのですが、既にシャツを脱いでいました。

脱ぎ女、ここに降臨！

槻「……あの、暑いのは分かりますが公然わいせつ罪とかに問われますよ？」

あくまで冷静に対応します。・・・いや、原作知識がなかったら私も固まってましたね。

それほど衝撃的です。

いえ、それよりもシャツを着てもらうのが先でしょうか？

彼女の名前は木山春生<sup>はるみち</sup>

レベルアップ！ 製作者兼、都市伝説【脱ぎ女】御本人です。

さすがにこの暑い中歩き回るのは面倒なので、久々に【複製貼付】で武器以外のものを作ってみました。名前はありますが、緑色の薄手のカーディガンです。効果は着ている間ならば赤外線を完全に遮断できる優れたもの。稼働には魔力が必要ですが微量なので一般人に渡しても大丈夫！

冬に着てしまうと逆に凍えてしまうので注意が必要ですが、今は夏。快適です♪

木山「君がくれたこれもいいが、やはり日陰の方が涼しいな。生き返る」

ただいま原作通り、例のテラスで休憩中です。

まあ、木山さんの言うことも分かります。一見暑いのに厚着してどうするんだ？とか突っ込まれそうな服装ですからね。  
やっぱり木陰が一番♪

コトン

さて……

ここで休憩、と言うことは

槻「これは？」

木山「一緒に探してくれる礼だ」

槻「あ、ありがとうございます……」

難しく言えば、目の前にそびえたつ熱気を帯びた鉄の密閉容器。

簡単にいえば、ホットのスープレーが目の前にあります。

さすがにこの暑さの中、さも当然と言わんばかりに買ってくる木山さん。

さすがにひるみます……。

槻「では、頂きます」

多少顔が引きつっているのは自覚してますが、そこは気にしないで  
もらいたい。

多少の抵抗はありますが、意を決して一口。感想は

槻（……もう少し辛い方がいいですね）

割とおいしかったです

木山「今日は助かったよ。本当にありがとう」

無事、青い車が見つかりました。

そしてあたりは夕暮れ時……。ではないですよ？ミコちゃんとは違って、探す場所を絞っていましたからまだ明るいんです。

槻「どういたしまして。今度はしっかり覚えていてくださいね」

木山「ふふ、善処しよう。それじゃ」

因みに学者だとかA I M拡散力場だとか都市伝説の話はせずに、もっぱら私の能力についてあーだこーだと話していました。

結論は出ませんでした。私の能力で出てくる物質はどこから瞬間移動させてから構成を組みかえる、という方向でまとまりそうです。

槻（……それって二重能力デュアルスキルでしょうに）

と、割とどうでもいいことを考えながら見送りました。

そういえば、木山さんの車ってエヴァのミサトさんの車が原型っぽいんですが、どうなんでしょうね？

十八話　厚着派と薄着派……何か違う気がします（後書き）

もうちょっと書きたかったんですけど、タイムオーバー  
ま、次回はきっちり御坂とのバトルは書きますので

槻「で、どう締めるつもりなんですか？説教は個人的に嫌なんです  
が」

うーんとね、基本的には説教のつもりだけど……御坂って結構頑固  
だからね。

ちよっと流血沙汰になるかも？

槻「……」パキパキッ

えっと、何か槻が怖いんで

次回は短縮した時間分カミジョーサンとお話することにしましょう  
—話開ければいいアイデア思いつくかもしれないんで

槻「思うのですが、キャラクターの機嫌を窺う作者ってどうなんで  
しょう？」

十九話、今回の不幸ってただの不注意では？（前書き）

短いうえに内容が薄っぺらい！

槻「ならもつと構想を練りなさい。あと一週間使って」

遅れたら読者に申し訳ない！

……結局のところ自分のエゴですね、分かります

## 十九話　今回の不幸ってただの不注意では？

さて、車探しをさっさと終わらせたおかげで相当暇な時間が出てしまいました。

どうせならもつと話しこんで暇をつぶしておけばよかったでしょう  
か？

槻（えっと、そういえば紙コップがそろそろ底をつきそうでしたね）

何か暇つぶしに足りないものがないかと考えると、案外ありました。  
洗いものせずに済みますし、変形させて投げれば不規則な動きをし  
てくれるので、的あての難易度を少々上げる遊びにはもってこいで  
す。

もちろんなのは系の魔法、メラなどの初級呪文などの命中精度の向  
上のためにやってるんですけどね。

・・・そろそろ相手が欲しいこの頃です。

槻「この辺にあるスーパーは・・・あそこですかね？」

そういえばスーパーって雑貨も扱ってるんですよ  
便利な時代です

槻「……ここだったんですか」

目の前には卵のタイムセールで奮起する学生。

その中にはご存知フラグメーカー & イマジングブレイカー

「又才才才才才才才——！！」

上条当麻さん

数々の名言と奇行、奇策を世に打ち出した偉人彼の影響を受けた厨二は数知れないでしょう。ご都合主義と言われればそれまでですが……

おっと、人の波が引き始めましたね。  
意気揚々と彼が戻ってくる姿はどんなものか

上条「・・・そ、そんな」orz

ってあれ？なぜうなだれているんですか？  
まさか取れなかった・・・

上条「貴重なタンパク元が・・・」

良く見ると卵のパックを持っではいるのですが、半分がご臨終  
この状態でレジに持って行ってもお値段同じなのですから、いたた  
まれないですねえ

槻「落ち込むのは後にして、移動してはどうです？邪魔になります  
し。あと、これどうぞ」

ですが邪魔であることには変わりないので、動かします。あと、1  
00均で買ったハンカチを渡します。

上条「え・・・あ、すいません」

これが私と主人公の出会いでした

上条「ありがとうございます！女神さま！」

勢いよく礼をする上条。

ああ、――さまではありませんよ？

あれはまだ見てないんで内容は知りません

槻「私は女神ではなく、片桐槻と言う名前があります。」

上条「ではツキさま！」

槻「おつきさまではありませんよ？」

上条「は？」

とまあ、色々と話をいろんな方向に投げ飛ばして遊んでいました  
卵の件は別のスーパーでの買い物をおこつてあげることとで解決  
しました。

まじめな貧乏学生にとっては、まさに神様ですね。

槻「とりあえず、名前を聞いても？」

上条「あ、はい。俺は上条当麻って言います」

知ってるんですけどね。

やっぱり本人から自己紹介してもらわないとねえ

槻「では上条、あなたの」

？「見つけた！！」

槻・上条「！！」

その声を聞いた瞬間、覚悟を決めました。  
だってこのタイミングでこの声と言えば・・・

？「勝負なさい！」

上条「……はあ？何言つてんだ、ビリビリ中学生」

最強無敵の唯我独尊、軽度の自己中心的な電撃姫

槻「ぶっそうなはなしですねー」（棒読み

御坂美琴、とうじょー

私は今回ばかりは空気になるのでしょうか？

十九話〱今回の不幸ってただの不注意では？〱（後書き）

本当は十八話と十九話は一本にして投稿するつもりだったんだがなあ

槻「それは置いといて、やはりミコちゃんと戦うことになるのですか？」

うん。原作介入でクリスティーナと戦うところで色々あるみたいだからね

今のうちに自重させておかないと、アニメ23話は確実に再現されるそれはいやでしょ？

槻「・・・分かりました。」

ま、お返しもしたいし

槻「？」

ってな訳で次回は美琴と槻のバトル！

二十話くらいよいよミコちゃんに対決!!ってこれは無いわぁ……(前書き)

ちょっと行間を開けてみました

縦に伸びるのは嫌なんですがね・・・

なんか読みにくいと思った男性がここに一人

それにしてもなんか違和感ある文章……

間違いがあるだろうと思うのだが直し方が分からないもどかしさが  
辛い!!

二十話くらいよいよミコちゃんと対決！！ってこれは無いわぁ……」

ミコちゃんって、二つ以上のことを並立して出来ない傾向があるんですよね。

だって上条見つけた瞬間にダッシュでこっち来て、堂々と押し問答続けてるんですよ？

ちよつと周囲に気を配れば私に気が付いてるはずですよ？

御坂「とにかく勝負しなさいよ、勝負！」

上条「勝負勝負って、今までお前の前戦全敗じゃんか」

御坂「うるさい、私だって一発も食らってないんだから……」

槻「あら、上条って意外と紳士なんですネ」

上条「意外ってなんだよ！」

ようやく割り込みました

いえ、二人で盛り上がって「盛り上がってない！！」「……まあ、ね」

御坂「って、あれ？どうして先輩がここに？」

ようやく気付きましたか

どれだけ旦那「違うから！」「……白馬の王」「絶対違うから！」

・・・声に出して言っていないんですけどね

ほら、上条が首かしげてますよ？

槻「ひとまず、なぜレベル5のあなたが上条と戦いたがっているのか知りたいのですが」

御坂「ええ！？あのっ・・・それは・・・・・・・・・・」

ん？

だんだん声が小さくなってますよお？

少しずつ赤くなってますよお？

槻「どうしたんですかぁ」「ニヤニヤ

御坂「……とにかく、勝負したいからです！だから勝負勝負！！」

槻「いや、中学生なのに駄々っ子はまずいのでは？」

うーん、見てて楽しいのですがそろそろ夕方から夜になる頃です  
からねえ

上条「なあ、ビリビリ。どうやったらお前との勝負は終わるんだよ」

御坂「そりゃもちろん……私が勝つたらよ!」

上条「はあ~~~~~~~~」。

うんざりした感じで上条がミコちゃんに聞くと予想通りの答え。

溜息は追いかけてまわされた距離に比例するんでしょうか？相当長か  
ったですよ？

ほら、ミコちゃんも怒ってらっしゃる

さて、上条はお疲れの様子ですし、ちょっかい出してみましようか

上条「ふう、分かったよ」

上条は腹をくくったようですな

なら、私も笑いをこらえて真剣になりましょうか

上条「それで気が済むって言うのなら……」

槻「私が相手になりましょう」

上条「はい！？」

御坂「ちよっ！なんで先輩が！？」

これ、結構やって見たかつたんですね、

いやあ、台詞を盗むのって楽しい！

っと、いけない、いけない。

一応ここからはまじめな話なんで、にやけるのはやめましょう

槻「嫌だと言ってる人に無理やりやらせるのはどうかと思うので。

個人的にミコちゃんの強さを知りたい、と言うのもありますけ

どね」

上条「いや、今日あったばかりの人に押し付けるようで、こっちが  
申し訳なくなるんですが……」

槻「いえいえ、大丈夫です。顔見知りですし、迷惑をかけているみ  
たいなのできつく言っておきます。

さ、どうぞ」

と言って先に行くように促します。

ぶちやけ連れて行ってもいいんですが、今日は不幸と叫ばない程度の生活を送ってほしいので。

……数週間後に（記憶が）死んでしまいますからね

上条「……すみません、そしてありがとうございました」

御坂「あ、ちょ「通しませんよ？」・・・先輩」

きちんとお礼を言って走り去る上条。

それを追いかけようとするミコちゃんをスッと移動して通せんぼ

ああ、まずいです

憧れのシチュを実現できたことにテンションが上がる……

槻「因みに、今回の定期検査の結果は表向きレベル2です」  
システムスキャン

御坂「どういうこと？」

あらあらミコちゃん、敬語を忘れていますよ？

別に私は気にしませんが、それで反感を買う人たちは多いですから、ね？

槻「計器が故障していたこともあります、私はその場でレベル5を言い渡されました」

御坂「!.....なら、あいつの代わりでも問題ないってわけね」

槻「では、周りに迷惑がかからないところに行きましょうか？」

準備  
レディ

ボソツと呟いた言葉は本気の証

槻（今のうちに痛い目にあわせておきませんか、ね）

頭にあるのは愛ゆえに本気を出す決心

だがそれ故に暗く、重い

右の瞳の中の光がだんだんと濁っていき

ほんのりと、紅くなる

？

御坂「ここなら邪魔も迷惑もかからないでしょ、さっさとはじめない？」

原作通り例の河原です。

あの橋は、確か原作三巻でミコちゃんが上条をフルボッコにした橋でしたっけ？

まあ、割とどうでもいいですね

槻「準備は出来てますよ。先手は差し上げます」

御坂「なら……手加減なしよ!!」

と言って雷を放ってきましたが、アニメと比較して規模が半分の大  
きさですよ？

明らかに手加減してます

槻「なら私も手加減しましょう。  
ライリンソウ 雷鱗槍、レフリカ 複製」

音も光も無く

予めそこにあつたかのように、1.9mの槍が私の手元に現れました  
髪の毛のようなサラサラの糸が刃の根元から伸びており、刃の形は  
竜にも見えなくもないものです

さて、普通電撃攻撃って回避は無謀だと思うのですが、この世界で  
は銃の弾より遅いようです。

なので私は槍を電撃に当てて、電気を吸収しました

御坂「え……何で槍がそこにあるの？」

槻「私の能力、コピー&ペースト【複製貼付】は0から物質を創りだす力ですので」

御坂「ちっ、ならこれを使うのは文句ないわよね!!」

ミコちゃんの手元に集まっていく黒い砂、砂鉄が日本刀の形を作っています。

それよりミコちゃん。なんでこの槍を持った状態で私がダメージを受けていないか分かっているのでしょうか？

まあ、おいおい説明してあげましょう

御坂「砂鉄が振動してチェーンソーみたいになってるから、触れないようにご注意ください!!」

ミコちゃん急接近!!それでも、あの刀って重量あるんでしょうか？

磁力の力で浮いていると言っても過言ではなさそうですし……  
今度作ってみましょうか？

槻「まあ、とりあえずこれではどうにもなりませんね。

ヒトリムシ、複製<sup>レプリカ</sup>」

雷鱗槍を地面に落とし、今度はサバイバルナイフを創りました。夜にも拘らず存在を誇示するかのような赤い刀身が特徴です。

まあ、慌てず、焦らず

両手で横薙ぎに振るわれる凶器に対して

御坂「へ？」スカッ

ナイフを左手に持つて受け止めます

ただし、その時には既に砂鉄の刀の形は維持できていません

別に難しいことはありません。

ナイフが3000 程の熱を持っているので、ナイフが当たる頃には砂鉄の粒子が粗くなります。そして、溶けて固まって溶けて固まってを繰り返す間に砂鉄同士が当たって大きくなり、酸素とも結合します。最終的に大半が酸化鉄になり、循環させるための回路の形成維持が不能。

よって、私には砂程度の大きさの鉄がパラパラと当たります。

因みにナイフの持ち手が小規模の結界になっていて、持っている者に対して熱は向かってこないようになってます。

さて

私の右手は自由

ミコちゃんの両手は振り切ってしまい、使用不可  
この状況、お分かりですか？

槻「正拳、突き！っと、逃げられましたか」

御坂「な、なんで！？」

お腹を軽く突こうと思ったんですが、磁力を使って後退されました。ちよつと衝撃的だったようで、ミコちゃんも膝についてます。そろそろ降伏してもらえないでしょうかね？能力以外使用禁止は結構ストレス溜まりますし

槻「解説は後でしてあげましょう。ですが、今は戦闘中ですよ？それとも降参ですか？」

御坂「くっ……じゃあ、こんなのはどうかしら!!」

今度は砂鉄で……え!?

槻「シュレッターの壁、ですか(汗)」

砂鉄で作った壁が迫ってきます  
もちろん触ればスプラッターw  
ってふざけている場合じゃないですね

槻「……一般人にはオーバークイルでしょうに」

密度は日本刀に比べると薄く、向こう側が見えますが……量がすごいです

これ、どう考えても黄泉行き確定じゃないですか？

ヒトリムシで受け止める

↓受け止められた部分以外を砂鉄へ

↓再度磁力を通して砂鉄の波にのまれる

↓スプラッタ

地面に落ちてる雷鱗槍を投げる

↓当たることと磁力を発生させている電気を吸収して強制解除

↓そこから原作のような空中からの強襲

↓スプラッタ

私は超人じゃありませんので、反応速度にも限界があります  
誤魔化しがきく武器でこの状況を打破するのは無理です

槻（寧々切丸じゃ砂鉄の粒子全てを相手するのは無理

リグルリグルは対人専用だから意味がない

……あーつまましたねー

メラゾーマで一気に酸化鉄に出来たらまだ何とかなっただでしょうに）

はい、負けですね。諦めました

一応死ぬことはなさそうですが、保険として左目を覆っている眼帯を外します

槻「ブックマーク、……………」

そして左眼を

？

Side out 第三者視点

眼帯を外し両目を開いて、槻は砂鉄の壁に向かって踏み込む。全てを飲み込もうと迫ってくる壁に対して、槻はヒトリムシで壁を縦に裂いた。この時、御坂と槻が一瞬だけ目を合わせるが両サイドに分かれた壁がそれを遮るかのように襲いかかる。

御坂（この勝負、もらった！！）

どこか得意げに槻を見る御坂。

砂鉄の壁は薄い膜となって槻を囲みもうとし、降参するまで外には出さないつもりだ。

もちろんサバイバルナイフには出来るだけ近づかないように循環させ、新たな砂鉄も常時供給できるようにした。

ここまでやればもう終わりだろうと

先輩ならこれでおしまいだと

勝手に決め付けてしまった

それゆえに

槻「ぐっ!!」ガリッ

御坂「・・・え」

辺りに柔らかいものと固いものを削るような音が同時に響く  
そして数瞬後、今度は水が地を打つ音が聞こえてくる  
それと同時に、ドサッと人が倒れた

S i d e   o u t   E N D

二十話ぐいよいよミコちゃんと対決!! ってこれは無いわぁ……………(後書き)

もついい……感想、質問、批難何でも来い!

ああ、なぜか本筋からずれていく……

これ終わったらスキルアウト絡みになるんだけどなあ

一応言っておくけど、ビッグスパイダーではありません

二十一話、安易な行動は後にしつぺ返しをくらいますよ？（前書き）

まだまだ練れてないが次、行つて見よう！！

槻「きちんと説明してくださいよ？死亡説まで出たくらいなんですから」

却下

理由は二十二話で書くから

二十一話　安易な行動は後にしつぺ返しをくらいますよ？

Side　御坂美琴

先輩の荒い息が聞こえてくる

切り傷が出来る程度だと思っていたあの攻撃

先輩が足を止めていれば何もなかったのに

先輩は目の前の攻撃から逃れる為に強引に後ろに下がった

まだ困いきれていなかったから良かったわ  
けどその端が先輩に当たったみたい

御坂「……私の勝ちね」

なんか複雑だけど、勝ちも勝ち「本当に？」

御坂「ぐっ！」

く、首が……締まる……  
誰！？

槻「後ろからは卑怯、などとは言いませんよね？  
ミコちゃんだってやったのですから」

せん、ぱい……？

槻「まあ、あの攻撃を避ける代償として、左腕を失うのは痛かったですけどね」

え？

腕？

失う？

槻「ですが私も認識を改めなければなりませんね

『遊び』ではなく『戦い』をお望みだとは考えませんでした」

御坂「っ！！」

痛っ！

いきなり蹴り飛ばされて地面を転がったけど、直ぐに起き上がった  
もうどうこう悩んでる場合じゃない！

先輩の左半身が血だらけでも、左肩から先が無くても関係ない！！  
だからもう手加減なし、全力全開で！！

槻「ですのでこれから、『戦い』を始めます」

何かが左側を通り抜けた

その軌道上には私の腕もある

なんとなくわかる

けど避けられなかった

御坂「あ、ああ……」

左手が、無くなった

御坂「あああああああああああああああああああ！……！」

痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ  
痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ  
痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ  
痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ

槻「五月蠅いので……はい」

御坂「カフツ！？」

今度は喉！？声が出ない……

もう熱いだけで、痛いかどうかも分からない  
斬られたの？突かれたの？焼かれたの？

槻「これが『戦い』です。

挑まれたら命を賭けて受けるもの

攻撃される腕を破壊し、逃げる足を潰す、殺し合い

なので、腕を失うのも命を落とすも自己責任。

……あなたはそれが分かって、殺傷能力の高い攻撃をしていた  
のでしょ？」

御坂（そんなの、考えたことなかったな）

別にそんな難しいことなんか考えてなかった

こうすれば先輩を倒せる、程度にしか思わなかった

槻「それでは、私の左腕を弔うために、死んでください」ニッコッ

なんかもう、だるくて避ける気にもならない  
先輩が持った何かで私の胸を貫かれる

その瞬間

パチン

どこからか指を鳴らした音が聞こえた  
それと同時に

視界にひびが入る

槻「ジャスト一分」

御坂「ええええ!？」

目の前には

槻「いい夢は、見れましたか？」ニッコ

無傷の先輩がいました

二十一話　安易な行動は後にしつぺ返しをくらいますよ？（後書き）

槻「作者ああー!!」

口調口調!!

言いたいことは分かる!

奪還屋ネタはやりすぎだと思っが、そこは謝る!

だから抑えて抑えて……

槻「ふう……では

なぜ両目が見えるのですかあ?

リジエネやリザレクションでも治らなかったのにさあ?」イラ

イラ

ああ、そっちか

それは前書きで書いたように次書くから勘弁

で、もう少し柔らかい口調にしてくださいます?（ダラダラ

槻「まあ、いいです。これでようやく眼帯から解放されるのですから!」

ああ……それは、その……

槻「まさか?」

直ぐに戻ったり……ってやめて!金属バットでボルベイラをかつ飛ばすのはご勘弁を  
ぎゃああああああー!!!!!!

二十二話 ミコちゃんはどうな夢を見たんでしょうか？ 雰囲気が変わったように

一週間で三回目か……

当然のごとく練りきれてないんですね

ですがこれでまた一区切りつくんで、大目に見てください

二十二話 ミコちゃんはどうな夢を見たんでしょうか？ 雰囲気が変わったように

槻「いい夢は、見れましたか？」ニコッ

と笑顔でミコちゃんを見下ろしているオッドアイの少女……って表現が適切でしょうか？ もちろん私のことです。私の左眼は一時的ですが、黄色い眼が収まっています。ただ、瞳が縦になっていて、中々に怖い眼が収まっています。爬虫類のような感じ？

これは【複製貼付】<sup>コピー&ペースト</sup>の応用です。きっかけは「武器を作れるのなら、自分の体の補強もできるのでは？」と考えたからなんです。脳神経に接続する眼は失敗すると結構痛いんです。悶絶さえも許されませんでしたからね……

っと、その前に何が起きたか解説しておきましょう  
そうですね、負けを認めたところからするとしましょう

私はアカシックレコードにある知識を使って、眼球の再生、視力の回復、邪眼の付加を行いました。  
この時に宣言したのが『ブックマーク』

「インスベクト質問、眼球構造、眼球に必要な素材、眼球から受けた情報を脳に送信して視力として回復させる方法、G o t B a k e r s の邪眼の構造」

…… いちいちこんな質問して、この後に膨大な回答の理解、整理、それから能力発動、って効率悪くありません？なので強引なのですが、アカシックレコードの情報に印をつけておき、キーワードを言えば能力を発動させるのに必要な知識を脳に流し込むことで武器の精製に結構役に立ってました。…… 勉強不足と言ったらそれまでなんですけどね。

今回宣言したのは「ブックマーク、g e t 邪眼」で、誤差0.3秒で邪眼の貼り付けが完了しました。中々チートになってきましたね

で！

そのあとシュレッターの滝に突っ込み、縦に切り裂いてミコちゃん  
の眼を見ます。直ぐに邪眼の効果を発動して、ヒトリムシで滝を

細切れにします。斬り終わったあと、後ろにあつた砂鉄を見て「本当に意地を張らなくてよかった……」と冷や汗をかいたのは内緒です

あとは時間が来るまでミコちゃんの様子を見て、頃合いを見て指パッチン、フィンガースナップとも言いますが、それをして決め台詞「ジャスト一分」

「いい夢は、見れましたか？」

で、今に至るわけです。

即席とはいえ、好きなキャラの能力を自身に付加できるなんて凄いですよね

あれえ〜？なぜこうなった!？

私が聞きたいですよ作者……

まあ、超能力を付加しようとする、人格、精神まで付加しなければならぬかもしれないのでやりませんけどね  
さて、解説が終ったところで

槻「……ミコちゃん」

ビクツと反応するミコちゃんもかわいいですね……邪眼で一体  
どんな夢を見たんでしょうか？

残念ながら内容までは分からないので、どんな言葉をかけようか  
悩むのですが、やはり試合続行か否かの確認でしょうね

槻「まだ……やりますか？」

殺る、犯る、戦る

どの意味も込めて言います

座ったまま震えているミコちゃんの答えは……

御坂「……最後に」

槻「え？」

御坂「最後に一発。相手をしてもらえませんか、先輩」

槻（……真の戦闘狂に覚醒した！！って訳でもないみたいですわね。  
どうしたんでしょう？……というより一発？）

嫌な予感はしますが、了承しました

槻（なぜ了承したんでしょかね……私のバカ）

なんかバチバチ音がする人間が目の前にいますよ  
で、なんかコインを手に乗せて弾こうとしてますよ  
間違いなく、ミコちゃんの二つ名を象徴する攻撃

超電磁砲  
レールガン

槻「念のために聞きますが、これは『遊び』ですか？」

それにしても規模がでかいですねえ

これが『遊び』なら、どう考えても毎日一人以上死人が出るんじゃないですか？

御坂「ええ、これは『遊び』です」

言いきらないでください

能力の人体実験したくてウズウズですが……」あら？

御坂「これを『遊び』で撃つのは……これで最後にします」

ああ、はい、それで？

確かに何か決心しているみたいなんです

その記念すべき『遊び』最後の砲撃が私が受ける理由は？なぜ？

Why？

槻「色々訳が分かりませんが、死なないように頑張ります」

とは言いましたが、全力で避ける以外に対処ってできませんでしたっけ？

雷鱗槍で応戦しても溶け始めているコインの勢いはどうしようもありませんので使えません。ヒトリムシなんて論外です。ああ、言い忘れてましたけどヒトリムシの元ネタはシャドー。イカーと言うラノベです。少しホラー要素が入っているらしいのですが、あまり怖くもな「行きますよ」早！！

仕方ないですね。非現実的ですが、対遠距離道具を創りましょう

御坂「いつつけえええ！！」

槻「ブックマーク、魔法の筒」ボソッ

全体的な色は紫でなんかよくわからない模様とひし形、ハテナのマークが書いてある筒が二つ出てきました。一つは超電磁砲がそのまま行けば中を通過する位置に、もうひとつは空に向けて

……現世で男だったのやってた訳ですよ、このカードゲーム

槻「リバーズカードオープン！マジックシリンダー！！」

超電磁砲が筒の中にはいると空に向けた筒からレールガンが射出されます。いわゆるワープ、と言えば分かりやすいと思います。

マジックシリンダー  
魔法の筒は直線で移動する物体の軌道を空間ごと捻じ曲げて方向を変えさせる道具。

槻「はあ……言ってしまった」ガクッ

声は中々ノリノリでしたが、心の中では頭を抱えています。もう厨二と認めた方が楽になりそうです。ね……で、このトンデモ砲撃をしたミコちゃんはなんか清々しい、いい顔をしていますね。

……なぜ？だれか答えて教えて？アカシックレコードは人の記憶系は干渉できないからさ、教えて！！

池上せんsギヤアアアアアア！！！！！！！！！！

たぐしや  
馬鹿は置いておきます

ああ、月がきれいですねえ……

御坂「あの、片桐先輩」

槻「はい」

御坂「ありがとうございました!!」ペコッ

槻「……え？あ、はぁ……どういたしまして？」

そう言っミコちゃんは走って行きました

……まあ、ミコちゃんの力量は大体わかりました。

比較するのはどうかと思いますが、ネギまのネギが使う雷の暴風と超電磁砲が同程度、ってところでしよう。連射できる分ミコちゃんの方に分がありそうですが、身体強化で突っ込まれると防壁に物を言わせてゴリ押しで来られるとアウトっぱいです。いくらなんでも素手で石を割るとか出来ませんからね

槻（さて、それではさっさと帰らないと……倒れてしまつかも、ですな）

なぜかと言うと、危険信号と言わんばかりの頭痛がします。眼球生成、武器二つ、最後に空間歪曲魔法を使った道具。物として創ったのは四つですが、そのための下準備を【複製貼付】で補うっていうのは中々の枷だと思います

内訳でいいますと、眼球生成に四回、雷鱗槍に三回、ヒトリムシに四回、魔法の筒に六回、計十七回使用しています

軽くフラフラしている気がするのも気のせいではないでしょう

槻「さて、今日はじっくり睡眠をとることにしましょう」

予想外のシュレッターの滝攻撃で随分苦戦しましたが、誤魔化しがきくレベルで戦ったにしてはまだまだかと思えます。

もっと効率化しないとな、と思う今日この頃です

二十二話、ミコちゃんはどうな夢を見たんでしょうか？雰囲気が変わったように

槻「よし、一区切りつきましたね」

どうした？いきなり

槻「構想だけで形になってない番外編、期待してますよ？」

……俺を殺す気か？

来週から死亡フラグ立ちまくりのスケジュールが組まれているのに

槻「つかさつさとオリキャラ増やしてください。からみがなくて寂しいです……」

あー、分かった。

番外書くからその時に増やそうか

槻「よし！」

ただ番外編限定になるかもしれない

もう大筋は決まってるから強引な参戦は無理

番外編(1) 最近、バレンタインデーは告白イベントではなくなっているのよ

時系列で言くと槻が時間跳躍をする前、つまり二月頃

従って原作メンバーは皆無

出てくる人も今後出るかは不明

番外編（１） 最近、バレンタインデーは告白イベントではなくなっているの

初めに断っておきますが、私は女です

ただし転生者で、現世では男でした

なので現在の状況に対して少々違和感を感じています

バレンタイン前日、友チョコ作りをしている自分に

現世の私はホワイトデーにチョコを貰う貰わないに関わらず、手作りお菓子を配ってました。（最近では材料費が捻出できなくて配ってませんが……）

しかしこの日、バレンタインデーの前日にそのお菓子、しかもチョコレート菓子を作るのは違和感があります。

男としては美化と偏見にまみれた妄想に浸っていたのですが、実際はお菓子作りの口実として使われる（と思っている）バレンタインデー。

まあ適当に配りますし、いつもより早くホワイトデーが来たと思えばいいですね

槻（幸い、こっちではお金に不自由はしませんし）

ホワイトデーの前哨戦と位置付けてしましましょう  
包む練習もしたかったですし♪

翌日、いつも通り学校に行きました

槻「おはよう」

卷子「おっはよーって何、その袋!？」

朝一で言うことがそれですか……まあ、仕方ないでしょう。

私の手にはスーパ―の袋（大）に入れられたお菓子があります。ええ、昨日作ったものです。

驚かれた卷子さんに最低限の言葉で袋の内容を教えます

槻「配布用」

卷子「……………は?」

わからないですか？

この日に配るものといえばお菓子でしょ？

槻「負け犬たちへの手向けです」

卷子「……………ゴメン、もっと意味分かんない」

もちろん自分に対しても言ってます。

ええ、本命のチョコなどもらったことはありません。

幸い女子が多い部活に入部することが多かったので義理はたくさんもらえていましたかね」

えっと、それではこれを作った過程をお話しましょうか

槻「お菓子を作った、余った、捨てるのもったいない、誰かにあげよう、そう言えば今日はバレンタインデー、なら可哀想な人たちにあげましょう。

……………OK？」

卷子「いや、ドケチなツツキーがそんなことするなんて……………」

槻「仕方無いのです。いくら別腹で食べれるとはいえ、この量を数日で食べることは出来ませんので」

実は食べれます

ええ、男でもお菓子は別腹です

生クリーム単品で食べるようなことはできませんが、周りの人より食べている自覚はあります。

卷子「ふーん。計画なしで行動するって珍しいわね」

槻「……………人間、夢中になると計画とかどうでもよくなるんですよ」

ちょっと遠い目をします。

いえ、別に何かあるというわけでもないのですが

卷子「ねえねえ、一つちょーだい」

うーん……

卷子さんってもし尻尾があれば絶対尻尾振ってるところですよ  
ここは手を前に出して

槻「待て」

卷子「私は犬じゃなあい！」

あら？

なぜ犬だと分かったんですか？お手だと確実なので避けたのですが

……

まあ憤慨する卷子さんを見るのも中々楽しいですけどね」

男はバカなんです  
それが私の感想です

槻（そう言う私も人のことを言えた身分ではありませんが）

渡せば素直に受け取る者もいれば  
逆にツンツンして受け取ろうとしない人もいました  
そんな人には

槻「お願い、受け取って……」

モジモジして上目使い  
私ならこれで落とせます  
涙があれば完璧なのですが、生憎嘔泣きは出来ません

男「し、しかたないな。……受け取ってやるよ」

で、ほとんどのツンツン男子がデレて受け取ってくれました。もちろん例外はいましたが、所詮私と同じ思考回路でしたか……そういえば逆にこの状況を楽しんで、ツンデレを実演してくれた猛者もいましたね。確か「す」で始まる方だったと思いますが、

どなたでしたっけ？

さて、こうして私が持ってきたお菓子はすべて配り終えました。  
そのことに異議を唱えるのが目の前に……

卷子「それで……男子に全て配ってしまったがために私に  
チョコがないとはどういうことよー！」

たいそうご立腹の様ですね、村上さん

放課後にする『ほのぼの談笑タイム！』の時間なのですが、言葉が  
とげとげしいです

因みにツンツンしている男子がデレる瞬間が楽しくて配りすぎたの  
は内緒です

ですが同性からもらうことを希望する方もいるのですね

まあ、知ったことはありません

槻「え、欲しかったんですか？」

卷子「私だっ作って……来ようとしたけど、失敗して、  
結局アルフォートになっちゃったけど」

ここに同性……そう言えば『友チョコ』とか言うものがありました  
ね。残念ですが今回はそんな気の効いたものは持ってきてません。  
で？村上さんが取り出したのは、袋に入った……アルフォート？  
袋に入ったアルフォートを見るのは初めてだったので、かなり驚き  
ました。

槻「……めずらしい」

……あ

卷子「ひ、酷い……」

泣かれてしまいました

盛大に勘違いをしているだけなのですが、非は私にあります  
主語がないと上手く伝わらないものですね

卷子「バレンタイン終了記念！ツッキーにバカにされた分歌いまく  
ってやる！in カ〜ラ〜オ〜ケ〜………！！」

「「わーーーーー」」パチパチパチパチ

槻（なんたら鑑定団の出張ですか？）

あれから大変でしたよ……

袋に入ったアルフォートが珍しかっただけで、卷子さんがお菓子を

くれることが珍しいというわけではないのです。

……いえ、私はいつも奢る側なので正しいですね。

まあそれは置いておきまして、そんな誤解を解こうと必死に説明したのですが言うことを聞いてくれず駄々をこねられ、仕舞には

卷子「今日は奢れ！そしたら許す」

なんて言う始末です

あれこれ妥協案を出した結果『友人を呼んでカラオケ、ただし部屋代等は全て槻が負担』で妥協していただきました。

なので今日のカラオケは少々にぎやかです

つてか、魔窟？いつの間にクロスオーバーしたんでしょうか？

？「つてな訳で早速送信ッス」ピッ

？「くつ、僅差で二曲目ですよ！？」ピッ

？「わ、私……カラオケ初めてなんです」アセアセ

？「大丈夫。遊びなのでリラックスしましょう」

先に言っておきます。

少なくとも外見は四人とも他の漫画、テレビゲームで出てくるキャラクターの皆様です。

上から

萌木<sup>もえぎ</sup> 桃枝さん<sup>ももえ</sup>。間違いなく『あすの与一』、斑鳩ちはや。声はゆかりんですね

髪は黄緑色のセミロングで、アホ毛が二本あり眼鏡をかけています。

活発でどこか飄然と生きてる方です。

BLの同志を増やそうと頑張っているようですが、丁重にお断りしました

菅 <sup>すが</sup> 瑠璃 <sup>るり</sup>さん。『レンタルマギカ』、アディリシア・レン・メイザ

ースさん

髪は金髪のロング、ウェーブがかかっています。婚后さんといういろんな方向で化学反応を起こしそうなお嬢様です。

能力的にも金銭的にも性格的にも常盤台へ行ってもおかしくないレベルなのですが、なぜか私と同じ高校に通っています

土風 <sup>つちかぜ</sup> 綴 <sup>つづる</sup>さん。『リトルバスターズ』、西園美魚さんですね。

髪は濃い藍色でショート、赤いバレッタを付けている子です。

おどおどしていて口数が少ないですが、じつとはしていない不思議な人です。

氷室 <sup>ひむろ</sup> 紗枝 <sup>さなえ</sup>さん。どうみても『テイルズオブシンフォニア』、プレ

セア・コンバティールさん……なんか言いにくいですね、さん付けは。

髪はピンク色でツインテール。高校生ではありえないほど身長が低いです

さすがに月詠先生よりかは高いでしょうけど、実際どうなんでしょうか？

以上四名は私と卷子さんと同年でクラスが違っただけです  
全員同い年で、まあ……色々ありまして友達となりました

この人たちとの馴れ初めは卷子さんとの出会いを含めてまたの機会に……

しかし、6人で騒ぐと結構響きますね

トップバッターの萌木さんの選曲は【little wish】  
ああ、ゆかりんヴォイスが響いてます・・・  
中々癒されるのでたまに聞いたりするこの曲が一曲目  
なかなか面白いですね

二番手の菅さんの選曲は……【Southern Cross】  
さざんくろす？と読むのでしょうか？  
外国語が苦手な私にとっては何を言っているか分かりません  
でも、リズムもテンポもいいですね

卷子さん……はっちゃけ過ぎです  
どこの女子高生が【GONG】なんて歌うんですか？  
アニソンの帝王、影山さんが歌っている曲ですよ？  
私は歌えなくは無いです、テンションのメーター振り切らないと  
歌う気になりません  
なかなか難しいんですよ？この曲

土風、氷室ペアが歌いだしたのは【ドラえもののうた】

初心者ならばここから、と言ったところでしょうが、ここで強引に普通のテンションに戻されるのかキツイです……

悪いことは無いんですが、アップテンポの曲を二曲続けて入れられた後の、ほのぼの曲は疲れるんです

卷子「んで、槻はまだあゝ？」

槻「はい？」

回すのですか？

私としては皆さんの歌の鑑賞に徹したいのですが、ここでそれを言うのは無粋でしょう

……あれにしましょう

名探偵コ。ンの最初のOP、【謎】

アニソンではありますが、無駄にテンションを高くしたりほのぼのしたりではなく、適度に上げてくれるので私は好きです

……やろうと思えばアリプロ歌えますが、現世で歌ったらドン引きされたんで自粛してます

卷子「一回りしたから、ここからはネタでいk」

槻「カラオケ初心者がいる今回は自粛した方がいいと思いますが？」

萌木「隙やりッス！」

菅「クツ、またしても……」

あー、もうこんな流れでうだうだと時間は過ぎるんでしょうね  
でもこう言う時間、大切にしたいですね

そして、そろそろ退出時間も迫ってきた頃

萌木「じゃ、幹事さん！締めの一曲、お願いするッス！」

槻「・・・え”！？」

なんでそんなことを・・・

思いつく曲つてもう3月9日とかサウダージとかツバサとか、切ない系しか持ち歌がないんですけど！？

「「「わー!!」「」」」

って皆さんも同意しないでください!

うう……元は勘違いの埋め合わせの筈でしたのに、何故?

ああ、曲が決まりません……

氷室「決まらないのならこれを」

槻「……白い足跡?ってこれ失恋ソングじゃないですか!?!?……何故?」

氷室「作者さんがリクエストしたので」

槻「本格的に対策を考えませんとね……」

リクエストされたのなら仕方ないです。きちんと歌います

それにしても、なぜあの人は私に介入したがるのでしょうか?

私としてはあなたの干渉は目ざわり以外の何者でもないのですがね?

槻「ふう、ご静聴ありがとうございます」

初めて歌うのですが、意外と何とかなるものですね

一時期、ようつべで何度か聞いたことがあったので助かりました

槻「私は精算してきますので、先にファミレスに行っていて下さい」

私の財布から樋口さんをお引越しさせた後、よく行くファミレスで合流したのですが……

卷子「……………」ムスー

槻「あの、なぜ卷子さんの機嫌が悪いんでしょう？」

氷室「愚痴を整理したところ、あまり歌えなかったからとか、バレンタインチョコがもらえなかったと嘆いていました」

萌木「マキにゃん、こういうときは逆にアタックをかけたらどうツスか？私を食べて……とか」

槻「興味は無くもないですが、また今度の機会に」

萌木「冗談だったんですが、大物がかかりましたぜ」プヒッ

はじめに言いましたが私は女です。でも精神は男です。私としては健全でも、社会的には引かれる……

難しいですね

槻「で、当の本人は頬を膨らませたままです

……本当にどうしましょうか」

氷室「ここで一度縁を切ってみはどうでしょう？言わせていただくなら面倒なので放っておきたいです」

槻「また毒の効いた台詞を……」

萌木「でもやってみる価値はあるッスよ？マキにゃんは槻ねえに奢ってもらえなくなるッスけど」

卷子「っ！」「ハッ

土風「でも……やっぱり可愛そうじゃないですか？」

槻「うゝん……仕方ないなあ」

氷室「どうしました？」

槻「えっと……あつた」ガサゴン

土風「何ですか、そのプレゼント用に包まれたものは？」

槻「これはね、こうするの……卷子、パス……」

卷子「あ、……イタ……！何すん「プレゼント」……はい？」

槻「バレンタインのチョコとは別に、今日って衝撃の出会いから丁

度一ヶ月でしょ？その記念」

卷子「……開けていい？」

槻「どうぞ」ニコッ

卷子さんがプレゼントに夢中になっている隙にこっそりと  
みんなに耳栓を配り、後ろを向くように指示します

その間に防音と強い光を外に出さない壁を能力で作り、囲います

パシュッ

キイイイイイイン

いやあ、箱を空けた瞬間に発動するスタングレネードって中々面白いアイデアじゃありません？

元ネタは『MGS PW』よりスタンダンボール！！

私が作った壁のおかげで周囲の被害0、対象は気絶！

完璧ですね♪……と言いたい所ですが犠牲者が出ました

氷室「このレベルの嫌がらせも悪戯ですか？少々悪質すぎますよ」

槻「でも三回目なんで」

氷室「前言撤回します。村上さんは学習能力が無いのですか？」

槻「そこまでは分かりません」

気になった土風さん、命令を無視した萌木さんは閃光をまともに見  
てしまい気絶してます。

まあ、各自の家はそんなに遠くないので終電過ぎても気になりません  
気長に氷室さんとお話して、起きるのを待ちましょうか

番外編(1) 最近、バレンタインデーは告白イベントではなくなっているのよ

ボルベイラ作成前なので対抗策が無い時の槻でしたw

次回は何かが100を超えたときに書いて放置したもの……  
なぜ放置したんだろうか？

H23・8 歌詞の削除と改訂を行いました

番外編(2) 夢の中で質問コーナーを設けるのはどうかと思います(前書き)

勢いオンリーで書いてる感が満載ですが、温かい眼で見てください

番外編(2) 夢の中で質問コーナーを設けるのはどうかと思います

槻「えっと、確か私は紅茶を飲んで寝たはずなのですが？」

ミコちゃんと遊んで疲れ果て、砂糖多めのミルクティーを飲んで寝たのですが……

どういう訳か非常に見慣れた場所にいました。

おそらく現在の状況は

- 1、現世でよく行っていたマツクにいる
- 2、四人掛けの席に座っている
- 3、他に客がない
- 4、作者が何かしたのでしょう

槻「それではボルベイラをt「使っても元には戻らないよ？」……誰ですか？」

そう言って現れたのは、黒っぽい無地の長袖にジーンズと言う個性のない服装の男……

あら、作者じゃないですか

しかも断りもなく向かい側に座ってきました……

波摩璽「おっと！僕は分身だからいくら攻撃してもそれを使つても意味はないよ？」  
ボルベイラ

無言でポケットに手を入れたのですが、やはりバレましたか……

両方狙っていることに気がつくとは伊達に作者ではありませんね

波摩壘「ま、いくらか質問が届いてるからそれに答えてもらえれば元の世界に返すことになっています……」

だから、あの凶器を、コッチニムケルノヲ、ヤメテクレマセンカ……」ガクガクブルブル

波摩壘が指をさした方向……天井……には、包丁が二桁ほど吊るしてあります。

某錬金術師の錬成で作ったものですが、これも気づかれてしまいました。

練成反応は出なかったはずですが……強敵ですね

槻「……分かりました。それでは、手短にお願いします」

不毛な攻撃はやめて要望にお応えしましょう。

私も波摩壘に言っておきたいことがありますしね

波摩壘「……なぜそこまで笑顔になっておられるのですか？」

槻「いえ、どんな質問が来るのか楽しみで」ニヤア

S i d e    波摩璽

はじめまして、波摩璽です。

僕は作者の性格などをコピーして作られているので、ほぼ本人に近い人格になっています。

番外編でしか登場できない設定になっておりますが、よろしく願います。

波摩璽「それでは、早速質問の方を行っていきたいと思います。」

槻「頑張ってください♪」

・・・なぜでしょう？

槻さんは満面の笑みを浮かべているんですが、冷汗が止まりません・  
・

ですが、頑張ります！

波摩鹽「では、リョウト様からの質問から」

槻「あの、あれって単なる感想だと思いますが・・・」

波摩鹽「えっと・・・『他に感想もメッセージも何もなかったから強引に採用！』っと、作者は言っています。」

槻「活動報告の方でも募集すればよかったのでは？」

波摩鹽「えー・・・『言い訳はしない、だが時間がなかったんだ！』だそうです」

槻「思いつきり言い訳してますが・・・家庭内のパソコン事情がありましたからね。そこは大目に見ます」

波摩鹽「さて、質問の内容ですが、『コラボはokですか？』、『技は漫画限定か？』と言うことです。」

槻「技に関しては漫画の方がチェックがしやすいんですよね。詠唱とかもきちんと載っていますし、聞き逃すこともありません。」

一応、アスラクラインの黒科学や少年陰陽師の陰陽術なども使えますが、主に表現方法などの関係で使えないんですね。

簡単に言うとな作者の技量不足。」

波摩鹽「『そしてPCに保存してたアニメが見れなくなっちゃったんだよおおお！』と作者の魂の叫びも届いています。」

槻「頑張れ作者」(笑)

波摩鹽「まあ、そこらへんの事情は私達には関係ないので作者にまかせましょう」

槻「コラボに関しては私が許可を出しますので、どうぞ」

波摩鹽「・・・え、いいの？」

槻「断る理由がありませんので構いません。何か問題でも？」

波摩鹽「『性格に関しては特に設定せずに始めたから扱える人少なそうなんだけどな』

と、かなり舐めたことほざいてます。」

槻「あとでボルベイラをラケットで壁打ちしておきましょう」

波摩鹽「でもさ、作者視点で見るとコラボの件は難しいんだよね

しかも今の流れだとイルム君とのバトルがほぼ確定……

口調とか性格とか攻撃方法とかはアドリブと勢いだけじゃ書けないからね」

槻「がんばってリョウト様の小説を読み返していただきましょう」

波摩鹽「鬼ですなぁ……」。

あと、リョウト様にプチ報告。コラボは書き始めていますが、何か使用する技とかスペルにご要望があれば受付ます。できればメッセージでお願いします

因みに東方は非想天則しかやったことないので、よく分かってません。アドバイスおよび助言をお願いします」

槻「さて、そろそろ帰りたいのですが……」

波摩璽「まあ、待て。こっからの質問が終わったら返してあげるからスリーサイズは？」

槻「えっと、ここは物語の外なのでOKですよね？  
リトルバスターズの来ヶ谷さんと同じです。」

波摩璽「結構胸がでかいということด้วย  
んじゃ次、容姿は？」

槻「上記と同じく来ヶ谷さん参照……：そう言えば黄色いリボンは付け方が分からないのではありません」

波摩璽「足元まである長い髪で、眼は濃い紫色でしたね  
次、趣味ってあるの？」

槻「最近……クレーンゲームでしょうか？格闘系はお休み中ですし、音ゲーはなんだかやる気になりません  
あえて難しい物を取ろうとするのでフィギュアが標的になって取れてしまい、置き場所の困っているのが悩みどころです」

波摩璽「お休み中って？」

槻「信じない人が多いのですが、  
煮詰まったゲームをあえて一ヶ月全くやらずに放置してからやると難易度が下がった気がすることがあります。

これを利用して煮詰まったゲームはさっさと中断して別のゲームをやるうと。で、別のゲームをやって煮詰まった場合、元のゲームをやることであっさり問題解決！というのを狙って中断している

期間をお休み中、と称しています」

波摩鹽「長い説明ご苦労」

次、友人はどれくらいいるの？」

槻「バレンタインデーの時に集まったメンバー以外はいませんね。気がついていないだけかもしれませんが」

波摩鹽「『男を一人混ぜるから言い切るな』とのことです。全員上手くコントロールできるんでしょうかね？」

次、今【バインダーログ収集記録】なしで使える呪文ってある？」

槻「えつと……理論上、あらゆる初歩のものなら何とかなるはずなんですけど、私自身の使用制限に『その世界で認知されている魔法、技でなければ収集記録なしでは使用できない』ってものがあるんです。なので今できるのは人払いとB B弾程度の火球程度ですね。」

魔人拳はまだ練習中です」

波摩鹽「んじゃ最後ね」

【コピー&ペースト複製貼付】の使用回数一回ってどんな一回？

ぶつちやけまとめてやれば一回で済むんじゃない？」

槻「私の能力の一回は、『制限された中でできる事象を一回する』です。これには物質創造と構築は1セットになっているので含まれません、主に特殊能力……火が出る、刃こぼれしない、投げて手元に戻ってくるなど……を一個付加させるごとに一回を消費します。そしてその特殊能力を発動させるために必要な力はどこから供給させるか、というのも別枠で付加させなければなりません。」

なので投げたら手元の戻ってくるボールを作った場合、使用回数は三回になります。」

『時間を止める』『必ず当たる』などチート要素が濃いものは一回で作れません。まあ、付加だけで5回以上使うでしょうけど

以上の点で纏めて作れる場合と作れない場合が出てきます。単なる本や弾薬でしたら20kg以内でしたらいくらでも作れますが、禁書や特殊な効果がある弾薬でしたらそうは行きません

例を挙げますとライフボトルやラストエリクサーが分かりやすいでしょう……あれって一個作るだけで15回分消費するんで」

波摩璽「ってことで第一回槻ちゃん質問コーナーを終了します！  
！」

槻「何気にテンション高いですね！？」

波摩璽「ぶちやけ強引にここまで上げないと司会なんて出来ない！  
まあ、お疲れさん。それじゃ」

パチン

指パチンを合図にマックは無くなり、暗く何も無い空間になる  
当然足場も何も無いので落ちる人は落ちる  
一応僕は権限を持っているので落ちることは無い

槻「あ”あ”あ”あああああああああああ………  
………」

真っ暗闇でまっ逆さまに落ちるって結構怖そうだね  
うん、絶対に味わいたくない！

番外編(2) 夢の中で質問コーナーを設けるのはどうかと思います(後書き)

中途半端で滅茶苦茶ですが……こんなもんです、私の番外編は  
まとまった時間が欲しいです

二十三話 壁打ちと固法さんとポイ捨て犯 (前書き)

根性で何とか更新  
だけど内容が……

## 二十三話　壁打ちと固法さんとポイ捨て犯

今日は目覚めが最悪です

寝汗がべたつきますし、何やら夢でとても嫌なことがあった気がします

主に作者関連で

なので今日はテニスラケットを持って壁打ちをしに行きましょう  
もちろんボールは……

着替えを終え、メールチャックをしていました

槻「ん？」

一件デコメが送られていました  
本文の文字をそのまま写しますと

- - - - -

片桐さんへ

御坂さんが大人しくなった件に  
ついて白井さんから説明が欲しい  
そうです

大変申し訳ないのだけど、お昼から177支部に来てもらえるかしら？

よろしく

固法

- - - - -

となるのですが、余計な空白が気になります。  
なのでこれを通常のメールで返信しようとすると次のような文になりました。

- - - - -

片桐さんへ

御坂さんが大人しくなった件について白井さんから説明が欲しいとのこと。

大変申し訳ないのだけど、お昼から177支部に来てもらえるかしら？

あと、風紀委員一日体験をやってもらうからね  
よろしく

固法

- - - - -

デコメの装飾機能を使い、背景色で文字を隠してたんですね……  
ですが甘いです。一度使用しようとして見破られた経験があるので

うーん……暇ですので行きましようか

……一応言っておきますけどきちんと訓練はしていますよ？  
休憩はきちんととりませんとね

固法「やったー……来てくれたー……!!!!」

万歳して喜ぶことなのでしょうか？

呼ばれて行くことは確かに初めてですが

因みに呼ばれた回数は百回越えたあたりで数えてません

それにしてもすごく眩しい笑顔ですね

と言うより、笑顔ってどうすればできるんでしょう？

槻「白井さんはどちらに？」

固法「え？ああ、白井さんは今、パトロールに行っているわ」

それはそうでしょう

装飾機能を使ってまで呼んだのにそれで一日が終了しては元も子もないですからね

手っ取り早く追い出したんでしょう

槻「では、手っ取り早く風紀委員一日体験をやりましょうか。暇ですし」

固法「あ、やっぱり見たんだ」

槻「昔、同じいたずらをしたことがあるので、ね」

さて、何をすることになるのやら

S i d e   o u t   御坂美琴

白井「どうしましたのお姉さま。最近本当におかしいですわよ?」

御坂「うん、私もそれは分かってるんだけど……」

片桐先輩と戦ってしばらくしたんだけど、なんか考えがまとまらない

- - - - -

槻「これが『戦い』です。

挑まれれば必然的に命を賭けて受けなければならぬもの

攻撃される腕を破壊し、逃げる足を潰す……殺し合い

なので何を失おうと、命を落としてもすべてが自己責任の世界

……あなたはそれが分かって、殺傷能力の高い攻撃をしていた  
のでしょ?」

- - - - -

私だつてこの能力と生きていたから、どれくらいの力を込めれば危ないか位は分かるし超電磁砲だつてセンチ単位で狙えるからまず外さない。相手の力量を見誤ることなんてないし、絶対に大怪我を負わないように立ち回ってきた。伊達にレベル5になつたわけじゃない。

『あなたはそれが分かつて、殺傷能力の高い攻撃をしていたのですよ？』

あの後、頭の中をグルグルしてるさっきの話をもつと詳しく聞こうとしたら「残念ですが記憶にありません」とか言われた。だからずつと悩んでる。

今までしてやりたいことをやりたいようにしてきたけど、それが本当に正しかったの？

もし間違っているとして、どこを直せばいいの？どうすればいいの？私はこの力を……本当に扱えているの？

分からない……

私は

何をしたいの？

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
  
E  
N  
D

槻「掃除？」

固法「ええ、ここを片付けてくれって要請があつたの」

ぶつちやけ店なんだから自分でやれと思うのは……学園都市では通用しないかもですね

プライスストア……覚えておきましょう

まあ、小言はさておきまして、アニメ版六話をベースに話が進むようです。

……あれですか？ミコちゃんの反抗心を根こそぎ叩き折ったっぽい事が起きたことでイベントがこっちに回ってきたってことですか！？まあ、グラビトン事件でしたっけ？中々被害の大きさがアレなのであのメガネ君、見つけたら裏路地で色々してみましようか。もちろんO H A N A S H Iを含むでしょうが、それはそのときの気分次第ってことで

槻「つて、支部を空けて大丈夫なんですか？」

あくまで手は動かしたまま聞きます。

カーディガンがあるとはいえ、テンションが上がらないまま外で作業など面倒なことこの上ないです  
さっさと終わらせましょう

固法「心配は無いわ。これは風紀委員ジャッジメントの活動の一環でもあるし、開いた穴は他の支部や警備員アンチスキルが補ってくれるわ。それに夏休みは警備員以外の手の空いている組織にも協力を要請できるから、割とんびりできるの」

槻「気まぐれで聞きますが、肅清委員アポロンにも要請するのですか？」

固法「ああ、白井さんたちが言ってた集団のことね。似たような仕事を請け負う組織はあるけど、そんな名前の集団は聞き覚えが無いわ」

固法さんも知りませんか

ではどうしましうかね？手がかりなしでは動けませんよ……

パッパラーリ〜ラーリ〜ラーラー♪

ドラクエのテーマということは友人からのメールですね

槻「ちょっと失礼」

………《メール解読中》………

律儀なのやらズボラなのやら分らない人ですね  
ああ、因みに相手は萌木さんでした。なんでも、以前お世話になった人へお礼を言いたかったのですが、多忙で無理となりました。夏休み終了してもやることがあるので代わりにお礼を言ってきてもら

えないか、と言うものでした。  
ですがこれって……

槻「すいません、フォーラーズってご存知ですか？」

固法「えっと……聞いたことがあるわね。スキルアウトのはずだけ  
ど、風紀委員のブラックリストには無かったわね。

それがどうかした？」

槻「そこにお使いを頼まりました……」

少し肩を落とします。いえ、ビッグスパイダーの話はまだ先のはず  
なので、別に嫌なわけではないのです。

まあ、お願いでしたからまだマシと言えるでしょう。萌木さんから  
は例のバレンタインデー翌日から一時期、私のパソコンに『女性同  
士がアレコレ』的な同人誌が一方的に送りつけられたことがあるん  
ですよ。まあ、すべて見させていただきましたが

……ん？

何か問題でも？

私は女ですよ？

はさむものはありますが、はさまれるものではありませんよ？

……下ネタですね、失礼

文句は土御門へどうぞ

ポイツ

槻「ちよつとそこの男子学生」

何の抵抗もなく、自然にポイ捨てしてきましたよ  
掃除している姿が目に入らないのでしょうか？

男子学生「ああ、これも頼むわ」

カランつと先ほどまで飲んでいた缶まで投げてきました  
はい、原作通りですね  
通りなんですけど……

槻（やはり……腹が立ちますね）

ツカツカツカツカ

割と早足で男子生徒を追い抜き、通せんぼします  
その間に収集記録はきちんと出して置いて……

槻「ポイ捨てはいけないことだと……教わりませんでしたか？」二  
コッ

男子生徒「っ！！」ビクッ

この笑顔で相手の顔を引きつらせることは分かっています

まあ、不確定多数が見ている中で普通にするのはまずいので、言葉だけにしましょう

さあ、O H A N A S H I ましよ ♪

収集記録は単なる脅しです。分厚い本を持って微笑んでいれば、紙の束とて凶器になるんです。

槻「風紀委員に加入することを拒む理由のひとつに、先ほどのように自制が効かない場合がありますね。今更ですがお見苦しいところを……」

固法「確かに、風紀を乱すものが入るのはいただけないわね」

男子生徒「でも、こうやって徹底的に打ち負かす風紀委員がいてもいい気はしますよ？」

この男子生徒、結構タフで思慮深い方のようです。私の独断と偏見にまみれた理論展開に何一つ突っ込まずに聞き入れ、最後に「ポイ捨ての件は謝ります。お詫びに掃除を手伝わせてください」なんて言う大人でした。

こんな人間が各クラス3人の割合でいたらどんなに楽でしょうか……！  
……ポイ捨てをする時点でどうかとは思いますが

槻「つと、これでおしまい」

固法「大きいゴミだけで助かったわね」

色々考えている間に掃除が終わりました。

つて、こんなに大きいなら手で拾って、後から掃いた方が……つてのは男性の思考ですね、自重しましょう

さて、掃除も終わりましたし男子生徒を解放しましょうか

槻「お疲れ様でした」

男子生徒「次からは気をつけます。それじゃ」

名も知らない男子生徒

この人の名は後に槻の顔を驚愕に彩らせる

なんてフラグはないです

再登場するのなら容姿が、手抜きでも髪型だけでも書くはずですからね

今生の別れとなるでしょう

ってなことを見送りながら考えてました。

固法「じゃ、次行くわよ」

どこに？とは聞きません

ただ外を歩くだけで、パトロールと言うお仕事ができるのですから

あえて心の中で言わせていただきますが、なぜか今日はデスクワークな気分です

正直今は、歩きたくないです……

男子生徒「おかしいなあ……なんで御坂があそこにいらないんだ？」  
ボソッ

え？

二十四話〜いろんなところで予定外〜（前書き）

色々な補足設定と確認作業の話だな、俺的には

## 二十四話　いろんなところで予定外

Side out 羽生

こんにちわ、ボクは羽生といいます。本当はリカたちと雛見沢を見守らないといけないのですが……

どうも神様の人手が足りないようです

猫の手も借りたいらしく、土地神クラスでしかない私にも白羽の矢が立ちました。で、ボクに任せられた仕事の話になるのですが

『神によって殺された者を事態が収集するまで異世界に留めておく事』

詳しくは説明してもらえなかったのですが、どうも死んだ魂をそのままにしておくと勝手に消滅するらしいのです。事態が収集した後は事件が起きる前の状態に戻したい上司(?)としては、それはそれは困るようなのです。渋々了解して(強制と読むのです)、今までお仕事を任せられそうな方を除いて百人ほど異世界に送ってみました……

どの世界も許容範囲内の原作介入です

正直つまらないです

でもそのつまらない時間が、とても大切な時間だと言うことを

? 「失礼! d8494aa27c11世界を担当しているのは君か?」

羽生「えっと……はい、そうです」

？「実は、こちらの手違いで……」

血相を変えて訪れた同期の神、ビュグヴィルさんの失敗で思い知らされたのです……（泣

Side out 第三者視点

レストラン『フレンテ』

とあるレストランで食事をしている男女が一組いる

男性は無難なミートソースのスパゲティを食べている  
髪の色は黒で髪型はショートで刈り上げているのだがパツと見、

彼に個性が感じられない。

釣り目だとかどنگり眼とかゲジマユだとか、何か特徴を挙げようにも挙げようとした瞬間に忘れてしまう様、何かで細工している。

一方女性はほっそりとした体格に似合わず、たらこスパゲティ大盛りにシーフードピザを食べている。

こちらの髪の色は黒に近い紫色。髪型はロングで、腰まである。

この店に誘った彼女は元々話がしたかったようだが、丁度お昼時ともあって今は食事に集中している。

さて、それではこの二人の食事が済むまでの間、事の顛末を説明しよう

槻「え？」

眼を丸くして槻は驚いていた。

御坂がここに来ることを知っていると云うことは原作の流れを知っている。つまり転生者の可能性がある、と云うことだ。もしくは槻が現れていない本来の未来を予測、予知できる能力者がコンピュータが作られているかもしれない。原作に介入した時点で本来の流れからは外れてしまっているので、当然そのようなことが起きても不思議ではない。

だが槻の中では転生者とは当たり前がついていた。女の勘？いや、彼女の精神は男だ。女の勘は無いだろう

話を戻そう。槻が驚いている原因は思い違いからきている、とある法則。それは『異世界に転生できるのは原則一人』というもの。

もし二人の転生者がいたとして、二人ともハーレムエンドと望んだ場合どうなるだろうか？住み分けをすることもあるかもしれないが、大概是奪い合いをするだろう。もちろん『平行世界だから問題ない』という言い訳をして相手を殺すことあるかもしれない。

元々槻の様な転生者は神の都合によって現世に戻れなくなった場合に発生する、いわばお詫び。……時々娯楽として勝手に殺して勝手にチート無双させる場合もあるが、多くは前者だ。なのに世界が

被ってしまっただけで殺し合い。勝てばまだマシだが、負ければそれでおしまい。空しいにも程があるだろう。

そうということが起きないように行き先の世界がかぶった場合は平行世界に送られることで、転生者同士を接触させない様にしている。これが槻の考え。

すると？

槻（……不味い！！）――――

天界がコントロールしていたシステムに異常が起こった、とも言える。

そこから導き出されるのは天界の異常。よく考えれば槻自身は神になるための修行をしているのだ（実際はただ遊んでいるだけだが）。それを知った敵の神が周到な奴であれば、刺客を送ってくることさえ考えられる。

その刺客が今、目の前にいたとするとどうなるだろうか？次は殺し合いになることを考えておかねばならないだろう。

しかし相手の力量は未知数。そんな相手を想定した訓練も実践も積んでいない槻は、恐らくまともに戦えない。

今回の接触の後に襲ってくる可能性は高く、襲われた場合はなす術も無く殺されるだろう。

ならば、と槻がとった行動は

槻「あ、すいません、とある科学の超電磁砲ってご存知ですか？」

男子生徒「……っ!!」ピシッ

この世界に存在しない、この世界が舞台の漫画を告げることだった。それは自分が転生者であることを明かすことと同じことだ。博打を承知で槻は

槻「もし良ければ……一時間後、私はフレントで昼食をとりますので」

対話を望んだ

一応言っておくが、男子生徒以外に転生者は何人かいる。なので槻の考えは半分以上ハズレである

槻「すみません、固法さん。用事を作ってしまいました」

黙って男子生徒が去った後、槻は頭を下げて詫びた。

ほとんど強引に参加させられたようなものだが、自分自身の都合で抜けるのは申し訳なく思った様だ。

対して固法は

固法「別に問題ないわ。元々こっちが無理やりつき合わせているもの」

割とあっさり了承した。

風紀委員に入りたいといくら固法が思っても、本人の自覚が無ければなれないし、なってもらっても困る。

それだけ責任と権利が譲渡されるボランティア……それが風紀委員である。

ただ、やはり男女の関係ともあって

固法「その代わり、何があったか教えてよね」

恋バナを期待してニヤつく固法であつた

これで以上だ

その後は時間きつちりに来た両者が同時に店に入り料理を注文、  
現在に至るわけである

当然であるが、量の少ない男子生徒の方から食べ終わる。  
皿を端に避け、のけぞって腕を組んだ状態で言う

男子生徒「で？用件は何だ女子高生」

明らかな敵意と拒絶

それは口調が変わったことでも伺える

でも相変わらず特徴は見えてこない

槻「私には片桐槻と言う偽名があります、男子生徒さん。

あと、誘っておいて何ですが……食事中なので待ってもらえませんか？」

一方槻は普段通り

だが皮肉を皮肉で返す事が少ない彼女。やはり緊張しているのだろうか？

男子生徒「こつちにも戸塚雄呂智<sup>トツカ オロチ</sup>って偽名があるんだが？」

両者偽名を名乗る。それは本名を名乗ることが出来ないからであり、アレイスターにそのことがばれる事を危惧していると言う意味もある。

転生者ならではの暗号である

槻「では、自己紹介と食事が終わったことですし……」

いつの間にか食事を終えた槻が上着の胸ポケットから大きな本を取り出した。明らかに胸ポケットには入らない図鑑の様な大きさだが、特に戸塚は騒がない。

槻はパラパラと何ページか捲り

槻「流れよ、止めよ、ものよ、覚えよ、記憶よ、留めよ。」

封絶を展開させる

周囲に話が漏れない様

途中で邪魔が入らない様

アレイスターに聞かれない様

そして、もう一度確認

槻「本題に入りましょうか、転生者さん？」

これから、部外者同士の話し合いが始まる

二十四話　いろいろなところで予定外（後書き）

うーん、続けるのが苦しくなってきたな……

槻「ミコちゃんのストーカーですか？あの男」ゴゴゴゴゴ

安心しろ、違うから

でもバトルはあるから準備しとけよ？

槻「では消失の魔眼を」

それだけはダメ！

二十五話　話は脱線、そして模擬戦へ（前書き）

一ヶ月以上更新できなかった――――  
待ってください　た読者に申し訳が立ちません  
しかもそんなに内容も文章量も無い  
何とかせねば！

## 二十五話　話は脱線、そして模擬戦へ

戸塚「で？てめえは何が目的なんだ？」

体を貫くような視線と強烈な重圧が全身にかかります

まあ、当然のことながら殺気全開で威嚇してきますよね。封絶のことを知らなければ、結界に閉じ込められたと考えるでしょうし、実際その通りです。

……とは言つても、退出は自由です。入室は結構難しいと思いますけどね？

ですがそれを教える理由もないのでお話続行といたしましょうか

槻「やりたいことをやる前の準備、とでも言いましょうか？

一応羽生と言う神から任務を受けているのでお答えできませんが」

気にした様子もなく、汗一つかかずに答えた私を誰かほめてください骨がギシギシと軋んで痛いんです

戸塚「……ハニユウ？ヒグラシのオヤシロ様のことか？」

槻「本物かどうかは分かりませんが、外見はそっくりです。」

戸塚「空想の神が出てても良いのか？……まあいい、俺んとはビュグヴィルだ。」

戸塚さんのため息と同時にふっと、重圧が軽くなったのですが……はい？どこのどなたですかその神様？

槻「すいませんがメジャーな神しか分からないので、説明願えますか？」

戸塚「フレイって神の召使いだよ。そのフレイって神のことも分からないんだが、それ以上のことは話してくれなかったぜ」

槻「土地が豊かになるとか、そんな感じの自然を司る神だったと思います。……うる覚えの知識ですが」

後で虚空年代記で調べておきましょうか。

戸塚「って、話がそれてるぞ。」

始めに逸らしたのは戸塚さんですが？まったく、羽生で食いついてくるから……  
なんて言いませんよ？

槻「では、いきなり本題に入ってください。面倒な駆け引きとかやりたくないの」

戸塚「呼んだ本人が吐く台詞じゃねえな

まあいい。なんでこんな場を設けたんだ？」

そう言えば呼んだのは私でしたね。

どうも話の主導権を握ってないと適当なことやってしまつようです

槻「無駄な争いを事前に止めるためです。

邪魔だからと言って消されるのは勘弁願いたいので、お互いが何をしたいかを知っておくことで線引きをしておこうと。」

戸塚「あー……。つまり嫁にするキャラの争奪戦みてえなことをしたくねえってことか？」

槻「その延長線でガチバトルとかになるのが非常に困ります。純正の転生者ではないのでステータス補正がないんです」

ここは重要です。虚空年代記で念入りに調べた結果、要望通りステータス補正はされていませんでした。

……ですが成長率がおかしいんですよ。一ヶ月も鍛えていないのに各種ステータスが1・5倍くらいになっているんですよ？

戸塚「はあ？普通パラMAXにわがまま能力三つ以内付加されるんじゃないの？」

槻「信じてくれないでしょうが生前、外見はチンピラの神に瀕死の重症を負わされまして「俺の場合は殺されたがな」……はい？」

戸塚「俺もチンピラに化けた神に殺された。輪廻から外れちゃったから転生して余生分の穴埋めをするってことでこの世界に来たんだよ。」

槻「なるほど。ですが私の場合、助からないと分かったので飛び降り自殺してしまったんですよ」

戸塚「なぜ自殺!？」

槻「何か腹が立ったので、幕引きくらい自分でしようかな?とか思ったのが理由ですね」

戸塚「おいおい……」

槻「続けますね。私は自殺をして死んでしまったがために少々特殊な状態になりました。死ぬ原因は神が殺そうとしたことですが、死因は自殺です。戸塚さんの様に直接手を下した場合ならばきっちり輪廻から外れてしまい、あなたと同じような扱いになっていたと思います。ですが、自殺したことで中途半端に外れてしまいました。この場合は時間が経てば輪廻へ戻れるらしいのですが、非常に時間がかかる。それを待とうにも、神界に長く滞在すると魂が消滅するそうなんです。」

戸塚「別に消えても良いんじゃない？ ギャーギャーうるさい魂を助けるよか、新しい魂を作ったほうが早くね？ 神なら魂の一つや二つ用意できると思うんだが」

槻「……戸塚さん、最近あなたの様に殺された人間の数って知ってます？」

戸塚「3000か？」

槻「5000万です」

戸塚「はあああああああああ！？」

槻「魂の補填が追いつかないから、と言っていましたよ？」

さて、嘘だらけの相談会はいつまで続けましようかね？

槻「さて、そろそろ線引きの話しに入りましょうか」

戸塚「・・・・・・・・なぜか俺だけ無駄に疲れたみてえなんだが？」

槻「まだまだですね」

戸塚「油断せずいこうぜ」

冗談とネタと嘘を混ぜて話す槻  
無意味にネタをネタで返す戸塚  
当然、話が進むこともなく時間が過ぎていく。  
だが全く進んでいない訳ではない

槻「残念無念」

戸塚「まっ たら来週」

槻「でも来週まで待てない人はどうするのでしょうか？」

戸塚「返事すら出来ないただの屍になればいいんじゃない？」

槻「私の火力ではあなたを屍に出来そうにないですね。封印も難しいですし」

戸塚「試してみるか？」

槻「・・・・・・え？」

戸塚「返事は聞いていない。すぐやるぞ」

槻「はい！？」

流れを無視した異次元の方向に話が進んでいた

槻「半径1km、高度100mまでが結界の範囲……つまりアレイ

スターから見えない範囲になります。」

お会計とか細かいことは気にせず、槻たちは外にでる。  
どうやら本当に模擬戦を行うようだ。

戸塚「便利だな、そのバインダーログとやらは」

戸塚の目線の先には開かれた収集記録。一見便利そうに見える道具。  
だが

槻「戦闘になると滅茶苦茶不便なものですよ？特に前衛も後衛もし  
ないといけない一人身の転生者としてはこれよりもパラMAXが欲  
しいところです。」

そう

バインダーログ  
【収集記録】は確かに便利だが、それが戦力に直結するとは限らな  
い。

戸塚「なあ、なんか開戦の合図みたいな……かつこいい台  
詞はねえか？」

槻「そんな装備で大丈夫ですかあ？」  
考え

戸塚「一番いい台詞を頼む」キリッ

槻「『さて、誰から飲み込もうか』なんてのはどうです？適当です  
けど」

戸塚「もっと長く！！インパクトがあるのを頼む！！」

槻「注文が多いですね。それではこの模擬戦であなたは手出ししない、と言っルールを付けられるのなら、きっちり考えてきますが？」

戸塚「……………さすがに防御はできるよな？」

槻「攻撃しなければ問題ないです。……………というより、恐らくすぐに分かると思いますよ？」

そう言っ槻は身構える。左手の人差し指を収集記録のページに挟み、左手だけで持つ。

右手は握っ準備完了

槻「さて……………今宵、幕を引く物語はどれにしましょうかね？」

## 二十五話　話は脱線、そして模擬戦へ（後書き）

今回は収集記録の使い方と注意事項

そして某クエストの呪文の詠唱が登場！！

先に行っておきますが、普通のPARAMAXだけでも十分にチートな  
んですよ？

・・・・・・頑張って書きます

二十六話「ただのパラMAXだと侮るなよ？」（前書き）

戸塚「てえな訳でよろしくな！」

ああ、なぜこうなった……  
本来お前は次の世界で登場予定だったんだぞ？

戸塚「大丈夫だ！何も問題は無い」

……本当になぜこうなった

## 二十六話　ただのパラMAXだと侮るなよ？

周囲は閑散とした片側二車線道路。その中心に向かい合って仁王立ちする男と女。

辺りは薄暗いが、かと言ってどこかが見えないこともない。

なぜか核融合を起こす星から送られてくる光は無く、その代わりと言わんばかりに地平線で燃え盛っている黒い炎。

どこに光源があるか疑問に思わずにはいられない空間。

と、解説してみました。が飽きました。  
さっさと攻撃しましょう。

どうやっても当たらないでしょうし

槻「魔人拳！」

地面スレスレからアップercutをすることで生じる衝撃波。  
威力もスピードも大したことはありません

槻「行きます!!」

つまり、私の足でも追いつけると言うことです。俗に言う同時攻撃  
魔人拳を左右にかわせばそこに私が攻撃に入る。素人なら体勢が崩  
れているので効果的な作戦だと思ったんですが

戸塚「ジャンプしちまえば問題ねえよな？」

槻「え〜」

予備動作、この場合しゃがむ動作無しで戸塚さんが結構な高さまで  
跳んでます。

……垂直跳びで10mも跳べるなんてありますか？

戸塚「よっ……………」

あれ？今、明らかに物理法則を無視した動きじゃありませんでしたか？  
真上から落ちてくるはずの戸塚さんが、空中でピョンと跳ねて、は  
じめと同じくらいの距離の地点に降りました

槻「ワン。ースの月歩？」

戸塚「残念、ネギ。の虚空瞬動。」

槻「しかし実際はサイ。ンのマテリアルハイ！」

戸塚「真実はただの蹴り。

・・・・・・まあ、月歩と違って二段ジャンプが出来るだけ  
なんだが」

槻「容赦が無い、ただのチートのようだ」

戸塚「おお片桐よ、この程度で驚いてしまつとは情け無い」

ネタの応酬ってまだ有効だったんですか？



槻「……………近接、戦闘では……………絶対に……………勝てません、ね」ゼイゼイ

TPが尽きるどころか、念もチャクラもほとんど無くなってしまつまで攻撃したのですが

戸塚「絶対に早さが足りねえよ。転生して一週間もしてねえ俺でも見切れるぞ？」

全く当たりません。毎日訓練は続けていますが時間が短かったですし、対人の経験が無さ過ぎますからね。動きを読まれても仕方ないでしょう。

散沙雨、驟雨双破斬、秋沙雨、飛天翔駆、獅吼翔破陣、飛葉翻歩、閃空裂破、獅吼滅龍閃の順に特技硬直無視して叩き込もうとしたん

ですけど、正面から全て相殺、又は避けてくれました。  
で、ここで言うのもなんですが、戸塚さんって凄いですよ？ソニックブームを起こさない限界ギリギリのラインまで移動速度が上昇するんです。これが絶対回避に繋がる秘密だったんですね♪  
一般人には瞬間移動に見えますよ？これ

戸塚「どうした？その収集記録の力もそんなもんかあ？」

槻（実際はそんなものなんですけど……）

## 収集記録

私知っている呪文、技が扱える本です。しかも技に関しては名前を、呪文に関してはその本に載っている詠唱を唱えるだけで発動できます。その呪文や技で消費する魔力などを持つていなければ発動出来ませんが、逆に言えば持つてさえいれば何でも使えるということです。

と、収集記録の利点だけ挙げましたが、これは研究者が持つべきアイテムだと私は思います。なぜなら戦いの場合は詠唱など許してもられないでしょ？

刻一刻と敵も味方も動くし、威力が大きくなればなるほど味方との連携やタイミングに気を配らなければなりません。外せば標的になることは必至ですし、無差別破壊砲台になっても意味は無いでしょう。ならば研究者に渡して新しい理論の構成の手助けをしてやったほうがいくらかマシかと思えます。

さらに言わせてもらつと、使用方法にも厄介なところが……

- 1、使用する呪文のページは開いておくこと
- 2、開いているページには必ず使用者の指が触れていること
- 3、必ず詠唱すること。よって詠唱破棄、遅延呪文、重詠唱は使用できない。
- 4、使用者が持っている器以上の魔法は使用できない。ただし、例外はある

1と2に関しては、使用ページに指を突っ込むことで簡略化させてもらっています。ただ、片手が使えなくなることには変わりありません。

3に至っては致命的です。格下ならまだいいですが、詠唱は一番無防備になる時間でもあります。即応性が無いことは戦闘ではマイナスにかなりません。

4は使いすぎる私にとっては助かる機能の一つです。ですが多少無理してでも、ということが出来ないのは今後問題になりそうで怖いです。

槻「ふう・・・・・・・・・・では、メインの呪文のほうに移りましょうか。」

残っている多少の気を使って疲労とたるさを中和させます。まあ、早い話が自然治癒力の強化です。

槻「来たれ雷の精、風の精・・・・・・・・・・」

あえて使うのは魔力とMPに絞りましたが・・・  
さて、当たりますかね？

S i d e   o u t   戸塚

どこかの誰かに言ってやろう  
片桐は弱いぜ？

槻「そを包み込むは閃光、それは業。焼かれ爛れ尚苦痛に悩まされるがいい！」

始めの雷の暴風、だっけ？特に問題なさそうだったからなあ、普通に避けたぜ。

それよりも、某クエストの魔法が見れるたあ驚きだし、あの威力を片手で出すつても褒めるべきだろおな。

だが詠唱が面倒だな。それが無けりゃいい線行くと思うんだがな

槻「ベギラゴンー!!」

詠唱する間はどうかとも無防備になっちまう。動きながら精神集中なんて曲芸、俺には出来ねえ

ま、だからどうしても距離をとって戦う羽目になる。んで、総じて呪文に早さが無え。

何だよ、この時速300km程度しか出ないベギラゴン。球だったら太陽系の外側まで運んでやるぞゴルァ！

槻「それを焼き尽くすは炎柱、それは落胆。灰も残さず業火に焼かれよ！」

ん？

なんでそんなに悠長に解説とかしてるかだと？

・・・普通に考えてみる、パラMAXだぜ？よっぽどの奇策か、音速以上の攻撃じゃねえとかすりもしねえよ。

効くかどうかは別問題だがな

槻「メラゾーマー！」

・・・ここは・・・このメラゾーマは・・・この火球は打ち応えがありそうだ！

手をバットにしてフルスイング！！・・・はしねえよ。結界から普通に出そうだからな。自重自重

つつーことで、ただただ片桐の魔法を避け続ける退屈な時間だ何とかなんねーの？

槻「ふーむ……ではこれを避けてみてください

それを弄ぶ<sup>もてあそ</sup>は爆発、それは蹂躪。退くもかわすも出来ずにただ爆風に吞まれよ

今宵は長いわよ？」

おお、確かにこいつ避けるのは難しそうだな  
効果範囲が目に見える範囲とかどんだけえ

槻「イオナズン！！」

ま、関係ないか

知覚出来ないくらいの速さで背後に立つちまえば問題無え

槻「正直、パラMAXを甘く見すぎてましたね」

戸塚「反省は良いから、次。眠くてしょうがねえよ」

のんびりと、俺と片桐の間を空ける。

欠伸をこらえてんだから、そろそろ面白いもん出してくれよ

槻「では、次です。」

全ては理の中、理の外では全ては無  
矛盾の融合、消え失せ無くなり意味となる  
その力もて、我が前に立ちふさがる愚かな者を穿<sup>うが</sup>つ  
理に立ち向かい従わせん！」

今回は長いねえ

どんな呪文かねえ………つて!!

槻「メドローア！」

おお!! いいねえ。

熱エネルギーのプラスとマイナスを反発、それに対消滅する力が発生。それを弓のように引き絞って放つ呪文。明らかに両手が必要な代物なんだが、これも片手。片桐もチートだねえ

まあ、普通に避けるんだが………そういえば何かおかしくね？

炎の中に氷をぶち込んで、んなもん発生するか？ プラス1+マイナス1はあくまで0<sup>ゼロ</sup>だ。

余りがなけりや変なことは起きねえだろ？

………根本から考えてみつか

そもそもプラスやマイナスを操作してんのは何だ？ 魔法力だ

炎とか氷が出てくるのは何が核になってるんだあ？ 魔法力だ  
炎+氷<sup>魔法</sup>ってどうなるんだあ？………

ん？

魔法+魔法は倍の魔法だよな  
プラス マイナス

炎+氷はゼロだよな

………どっちが優先されんだ？

戸塚「なあ、メドローアってどうやって発動してんだ？」

槻「……………模擬戦終わったらきちんと話しますので、待って  
もらえませんか？」

戸塚「頭と胴体が永遠の別れを望むんなら良し」

槻「理由が無いので却下

……………では、成功するかどうかは置いといて

珍しいものを見せましょうか」

さらつと流すんじゃないよ。胴体の処理が面倒だからしないがな  
それにしても珍しい、ねえ？……………まあ、分かんなくてもない  
か。とあるの世界で超野菜人のオーラが見れるとは思わなかったぜw  
しかも無色透明。そこは空気を考えて黄色にして金髪にすべきじゃ  
ね？

で、そのオーラを右手に集めて……………殴りかかってくるのか？

槻「虚無より来たる偽りの道化

目で見えしものは全て虚偽、心で見えしものは中身のみ  
捻じれよ、曲げよ、歪めよ

その世界こそ、何一つ偽りなき世界」

詠唱すると同時に消えたってこたあ、そのオーラを使った魔法って  
ことか。

どんな魔法が楽しみだな♪

槻「トゥルーワールドあるべき姿の世界」

槻「呪文は成功しましたか？これで終了する予定なのですが」

戸塚「・・・・・・・・何なんだアレは？」――――

一瞬だけ目が眩むほどの光。その後起こったアレ、体験しねえと分かんねえだろうな。

つてか説明できねえ

槻「目をくらませた瞬間に指定範囲の世界を歪める魔法です。

まあ、幻術ではない魔法で人を惑わす方法と言えば分かりやすいでしょうかね？

制約で30分しか展開できないなど、改良面が多々ありますがいかがでしょう」

戸塚「一歩動くだけでバラバラになるアレが未完成だあ！？ふざけてんのかデメエ！」

槻「逆に動かなければある程度形は残りますよ？」

そういう問題じゃねえんだが、とりあえずこのだりい時間が終わったのは助かった。  
本気で寝てやろうかと何度思ったことが……………

戸塚「んじゃ、メドローアの話をしてくれ。めっちゃ気になってんだよ」

槻「えつとですね……………高校レベルの化学だと説明しやすいんですけど、分かります？」

戸塚「悪いが赤点科目だ。」

槻「では高卒レベルだということを前提に話を進めます。

別段知りたくも無いのならば飛ばしてください。

\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$

まず、メラ系が酸性の水溶液、ヒヤド系がアルカリ性の水溶液と仮定します。

前提を補足しますが、酸性とアルカリ性を全く同じ比率で混ぜることでも中性、つまりどちらでもない性質を持つものになります。ただほとんどの場合、ほんのわずかに比率が違ってしまい、弱アルカリ性、弱酸性になってしまいます

さて、酸性とアルカリ性を中和することで中性になりますが、このときエネルギーと水と塩が発生します。

ここで仮定を魔法に当てはめます。

メラとヒヤドを完全に同じ比率にすると、酸とアルカリ……  
・プラスとマイナスがゼロになり、中性……。魔法的な意味がなくなります。さて、それでは水と塩とエネルギーは何を意味するでしょうか？

水は魔力になります。エネルギーは放置すれば熱となってメラ系の効力を発揮します。余談ですが、このエネルギーがわずかな差異があつた場合に「腕が焦げる」要因となります。塩は酸とアルカリを合成した結果、無となる、『無と言う結果』を持つ概念を与えられました。無を引き起こすには消失、消滅させなければならぬ。

ここで消滅呪文を発動させる理屈が出来ました。

そしてここからが重要ですが、これは自分から放出された直後、又は待機状態で合成しなければ消滅呪文はできません。

よくメラでヒヤドを相殺したという話があります。ですが先ほど話した内容が是ならば、激突した場所で消失呪文になってしまわず。

これはなぜか？

それは一度はな放った呪文は出力のコントロールが効かない上、形状によって威力や密度が異なってしまう為です。完全に同じ魔力で放ち衝突したとしても、激突した瞬間から相殺までの出力が不安定なため相殺で終わってしまいます。しかしまだ自分の制御下にあるのならば、魔力の放出量の調整ができるので相殺を通り越して消滅と言う結果を得られるのです。

まあすごく簡単に言いますが、これはこれでセンスと才能が必要です。一般的な魔法使いが持っている魔力量すべてを針の穴を通すかのような繊細な調節を片手で、それも両手同時にコントロールするとなると凡人では不可能と言えます。

つくづくポ。プって準主人公補正MAXな人ですよ

\$\$\$\$\$\$\$\$

っと、こんなところですかね？」

戸塚「とりあえず単純に火と水の魔法が使えてもメドローアは撃てねえってことは分かった」

話を聞く限りじゃ、何かを媒介にして出来るほど優しいもんじゃねえ様だな。

残念なことに俺は某クエスト系の魔法は使えねえ。異世界の魔法の使用は才能とかが必須だから、この世界で使うならチート能力で才能をもらうしか無え。

槻「私の知る限り、某クエスト系とね。マくらいしか出来そうに無いですね。

有りそうならば教えてください」

戸塚「どこ見て誰に言ってるんだ？」

槻「読者」

戸塚「……………メタ発言は慎まねえか？」

槻「ああ、そう言えば戸塚さんは何の目的でとあるの世界に？」

あからさまに話を逸らしてきたな……………って本来の流れに戻っただけじゃん  
忘れとつたわ

戸塚「俺は上条の視点を見てみたくな。基本原作通りに話が進められるよう立ち回るつもりだ」

槻「では……そうですね。あなたにとっては一度きりの世界ですから、適当なところで――」ボソボソ

戸塚「あん？」

槻「シスターズ、と言えば分かりますか？そこまでは引っ掻き回させてもらいます」

戸塚「……まあいいか。邪魔なら消すだけだし」

槻「えっと……一発レッドとかは止めてくださいね？」



槻「さて、そろそろ時間なのでお暇しましょうか」

戸塚「ってオイ、飯代は？まさかの食い逃げか？」

槻「きちんと2・5倍のお金を置いてきましたから大丈夫ですよ」

戸塚「2・5倍の意味は!？」

槻「気分」

戸塚「……………さいですか」

後は結界を解いてもらってアドレス交換。んで解散ってな流れだった

……………鍛えたら面白そうなんだがなあ

二十六話　ただのパラMAXだと侮るなよ？（後書き）

さて、お次はグラビトン事件の犯人との遭遇。カイトビとか言う名前だっけ？

事件自体は面倒なんで起こさない方向で動きます。なのでサクッと書ける………はず？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6520p/>

---

神に殺された男が復讐のためにチート転生する ---実は復讐なんてどうでも

2011年11月2日00時53分発行